またたとへ誰かゞ、老衰の爲めか或は老病の爲めかで、永久の眠りに就いた者があつても、その後は長く斯うした異常な出來事に驚くやうなことはなかつた。

殊に、こんな事があつても、例へば鍛冶屋のタラースが、自分の小屋に火を放つて、其の中で燒け死なうとした爲め、彼に水をかけて助けなければならぬやうな事があつても、彼等は別段驚きもしなかつた。

犯罪の中でも、豌豆や人參や蕪を盜んで、野菜畑を荒すのが非常に流行つたことがある。また或る時、突然二匹の仔豚と一羽の牝鷄とが、行方不明になつて——この地方全體を驚ろかす出來事となつたが、これも村の人達は、前日木製の食器を運んで定期市場へ行つた運搬人の所爲にして了つた。兎に角、有ゆる偶然な出來事は、非常に稀であつた。

けれども、或る時、廻り路の向うの掘割の橋の傍に、一人の行倒れ人を見附け出したことがあつた。それは、此の村を通つて市街へ行つた勞働者仲間から紛れた者らしかつた。

一番最初にその行倒人を見附けたのは、子供達であつた、彼等は吃驚して村へ駈け戻つて、怖ろしい蛇か狐憑かが掘割の中に横はつてゐたと告げ、それが自分達を追ひかけて來て、危くクージカを喰ふ所だつたと附け足した。

百姓達は、大膽に三叉や斧などで身を固め、どや〳〵と掘割に押しかけて行つた。

「お前達、何處へ行くだ？」と、老人達が制止した。「首がしつかりしてるだか？　何をするだ？　詰らねえことするなよ。誰もお前達を追つかけてゐやしめえし。」

けれども、百姓達は駈けて行つた。掘割から五十サーゼンのとこまで行くと、種々な聲で怪物を呼んで見た。が、答はなかつた。百姓達は立ち止つたが、やがて再た進み出した。

掘割の中には、一人の百姓が小高い處に頭を凭せかけて、倒れてゐた。彼の傍には、袋と棒とが横たはつてゐた。その棒には、二足の草鞋が突きかけてあつた。

百姓達は、傍へ近寄らうともしなければ、また觸らうともしなかつた。

「おい、おい！　兄弟！」と、百姓達は、交る〳〵叫んだ。中には、後頭部を搔く者もあれば背中を搔く者もあつた。「どうしてお前そんな處にゐるだ？　おい、おい！　どうして其處にゐるだ？」

行倒れ人は身體を動かして、頭を揚げようとしたが、揚がらなかつた。見たところ、その男は病氣をしてゐるか、それともひどく疲れてゐるらしかつた。

一人の百姓は、三叉で行倒れ人を搖らうとした。「よせ、よせ！」と、多勢の者は叫んだ。「分つてらア。見ろ、ちつとも動きやしねえ。あれに違ひない……おい、おい、おい、觸るなよ……」

「歸るべえ。」と、或る者は言つた。「全くだ、歸るべえ。何であんな者に構ふだ？　だが氣の毒な者だなア！」

皆は老人達に、掘割の中に土地の者でない者が倒れてゐて、少しも動かない。どうしたのかさへ分らない、と言つて村へ歸つた。

「土地の者でなければ、構はねえがいゝだ！」と、老人達は土堡に坐つたまゝ、兩肱を膝について言つた。

「打捨つて置くがいゝ！　何もばた〳〵とすることねえだ！」

オブローモフが夢の中で、突然に運ばれて行つた處は、斯うした一角である。

此處に三つ四つと撒き散された村のうちで、一つはソスノーフカと云ひ、も一つはワヴィローフカと云つて、その間は一露里ばかり距たつてゐた。

ソスノーフカ村とワヴィローフカ村とは、オブローモフ家代々の世襲財産で、一般にオブローモフカ村と呼ばれてゐた。

ソスノーフカには主人の屋敷と事務所とがあつた。ソスノーフカから五露里ばかり距てた所に、ウェルフリョーウォと云ふ小村があつた。矢張り以前はオブローモフ家の領地であつたが、餘程前から他人の手に渡り、その村の處々に散在してゐる幾つかの百姓屋も、他人の手に渡つてゐた。

この村は、此處に一度も來たことのない金持の地主の所有になつてゐて、獨逸人の支配人が其處を管理してゐた。

これが、この一角全體の地理である。

オブローモフは或る朝、自分の小さい寢床の中で眼を醒した。彼はまだ七歳であつた。彼は輕快な氣持を感じてゐた。

彼は愛らしく、美しく、そしてまん丸く太つてゐた。頰は他の悪戯兒が故意と脹らしたも、とても彼のやうにならぬ程丸々としてゐた。

乳母が彼の眼醒を待つてゐた。彼女は彼に靴下を穿かせようとしたが、彼は穿かうともせずに、ふざけたり、兩足をばた〳〵させたりした。乳母が彼を捉へると、二人はハハハと笑つた。

遂々乳母は彼を立たせた。彼女は彼の顏を洗ひ、頭髪を梳つて、母親のところへ伴れて行つた。

オブローモフは、疾くに死んだ母親を見ると、夢の中で嬉しさと母親に對する熱い愛情とで身慄をした。眠つた彼の睫毛の下からは、二粒の溫かい涙が、徐かに溢れ出て、凝つと止まつた。

母親は彼に情熱的な接吻を浴せかけた。やがて貪るやうな心配らしい眼附で、眼が曇つてはゐないかと彼を見廻はし、何處か痛くはないかと訊いた。また乳母には、彼が安眠したかとか、夜中に眼を醒ましはしなかつたかとか、眠つたまゝ騒擾きはしなかつたかとか、發熱しやしなかつたかなどゝ聞き訊し、それから彼の手を取つて聖像の前へ連れて行つた。

其處で、母親は跪まづいて、片手で彼を抱きながら、彼に祈禱の文句を讀み聞かせた。

子供は茫然として、たゞ窓の方ばかり見ながら、祈禱文を繰り返した。窓からは、涼しい空氣とライラックの匂とが、流れ込んで來るのであつた。

「お母さん、今日は散歩に行きませうね？」と、彼は祈禱の最中に突然訊いた。

「行きますよ、坊や。」と、母親は狼狽て言つたが、聖像からは眼を放さずに、急いで祈禱文を讀み終らうとした。

子供は氣懈さうにそれを繰り返したが、母親は祈禱に自分の全心を打ち込んでゐた。

それから二人は父親のところへ行き、次にお茶を飲みに行つた。

茶卓の傍には、オブローモフ家で餘生を送つてゐる年老いた叔母がゐた。年齢は八十で、絶えず自分の女中を怒鳴つてゐた。女中は年齢の所爲で頭を慄はせながら、叔母の椅子の背後に立つて世話を燒いてゐた。其處には、父親の遠い親戚に當る三人の年老いた婦人と、少し氣の變な母親の義兄弟と、七人の小作人を持つ池主で、オブローモフ家にお客に來てゐたチェクメーネフと、それから何處かの爺さんや婆さん達がゐた。

これらの人達とオブローモフ家の召使達とは、イリヤ・イリイーチを捉へて、愛撫と讃辭とを浴せかけた。で、彼は賴みもしない接吻の跡を拭ふ暇がなかつた。

それから皆は彼に丸パンや乾パンやクリームを食はせ始めた。

次に、母親はまた彼を愛撫し、そして庭や屋敷や草原へ散歩に出した。出す時、彼を一人にしてはならないとか、馬だの山羊だのの傍へ近づけてはならないとか、家から遠くへ遣らないやうにとか、殊に、怪しい噂があつて村の中で一番怖ろしい處とされてゐる窪地へ遣らないやうになどと嚴しく乳母に言ひ含めた。

或る時、窪地には、一匹の犬が現はれた。その犬は人に近よらないので狂犬だと言はれた。百姓達が三叉や斧を持つてこの犬を殺しに行くと、犬は何處か山の中へ姿を消した。その窪地は、腐つた肉の捨場であつた。其處には、盜賊や狼や其他この地方ばかりか世界中にゐない種々な怪物が現はれると思はれてゐた。

子供は母親の警戒を待つてゐなかつた。彼はもう疾くに屋敷外へ飛び出してゐた。

彼は初めて戸外へ出たやうに、嬉しい驚愕を感じながら、周圍を見廻したり、家の周圍を駈け廻つたりした。家の傍には、歪んだ門があつた。その門の眞中には、木製の小屋根が載つてゐた。小屋根の上には、優しい綠色の苔が生えてゐた。それから搖々する上り段もあれば、種々な建增もあり、また荒れた庭もあつた。

彼は家全體を傾けてゐる釣露臺の上に駈け上つて、川の流れを見たくて堪らなかつた。が、この古い露臺は、漸く釣下つてゐるくらゐなので、（召使達）だけにはその上を歩くことが許されてゐたが、主人達には禁じられてゐた。

彼は母親の注意には氣を止めず、もう魅惑的な階段の方へ行かうとしてゐた。ところへ、階段の上へ乳母が現はれて、辛つとのことで彼を捉へた。

彼は乳母を振り放して、枯草の積場の方へ駈けて行つた。急な梯子を攀ぢて其處へ登らうと思つたのである。乳母が辛つと積場へ駈け着けた時には、もう彼は鳩小舍へ登り、家畜小舍へ入り、それから危いこと窪地へも行かうと目論んでゐた。

「あら、まア、何てえ子供だらう、まるで獨樂のやうだ！　もし、坊ちやま、溫柔しくなさらなけりやいけませんよ！」と、乳母は言つた。

毎日毎夜乳母はたゞ騒いだり、駈け廻つたりするばかりであつた。子供の爲に或時は叱られたり、或時は非常に喜んだり、或時は倒れて鼻を打ちはしないかなどとびく〳〵したり、或時は彼の子供らしい無邪氣な愛嬌に感動したり、或時は彼の遠い將來に茫乎とした悲しみを覺えたりした。乳母の心は、これだけで鼓動してゐた。この老婆の血は、この波立で溫ためられてゐた。彼女の眠つたやうな生命は、この波立で辛つと

保たれてゐた。彼女の生命はこの波立がなければ、もう疾くの昔に消えて了つたかも知れない。

けれども、イリヤ・イリイーチは亂暴でないこともあつた。時によると、彼は靜かに乳母の傍に坐り、凝つと周圍を見てゐることがあつた。彼の子供らしい智慧は、彼の眼前で行はれてゐる有ゆる現象を觀察してゐるのであつた。その現象は、彼の心の奥深く落ち込み、やがて彼と一緒に生長し成熟するものであつた。

莊嚴な朝であつた。戸外は涼しかつた。太陽はまだ高くはなかつた。家からも、木からも、鳩小舍からも露臺からも——有りとあらゆるものから長い影が遠く走つてゐた。庭にも屋敷内にも、默想と睡眠とを誘ふやうな涼しい蔭が造られてゐた。たゞ遠くにある裸麥の畑だけは、丁度火のやうに燃えてゐた。川も太陽の光線を受けてぎら〳〵輝き、眼を射るやうであつた。

「乳母や、そこは暗くて彼方は明るいのは何故だい。彼方も明るくなるだらうか?」と、子供は訊いた。

「坊ちやま、あれはね、お日樣がお月樣をお迎へに行つたら、お月樣がゐなかつたものだから、あんなに顏を顰めるのですよ。けれど、遠くからでも一寸見ると、もうあんなに明るくなるのです。」

子供は考へ込みながら矢張り周圍を見てゐた。彼はアンティーブが水を汲みに行くと、地上にも彼と並んで、も一人アンティーブが歩いてゐるのを見た。彼には、そのアンティーブが假物より十倍も大きく、その水桶が家ほども大きいやうに思はれた。馬の影は、草原全體を覆ひ隱し、たつた二足で草原を通つて、俄かに山の彼方へ行つて了つたが、アンティーブはまだ屋敷を出てゐなかつた。

子供は矢張り二足歩いて、なほも一足歩いた——と、彼も山の彼方へ行つて了つた。

彼は山へ行つて、馬が何處へ行つたかを見極めたかつた。で、彼は門の方へ行つたが、窓から母親の聲が聞えた。

「乳母や! 御覽よ、子供が日向へ駈け出した! 日蔭へ連れて行きなさい。頭を日に曝すと——頭痛がして、吐きたくなつて、食べなくなつて了ふ。そんなことをしてゐると、子供は窪地へ行くぢやないか。」

「おや! 甘たれつ兒が!」と、乳母は彼を階段の方へ抱へて來ながら靜かに唸つた。

子供は鋭どく、素敏こい眼附で、大人達が何をしてゐるか、朝をどんなことに使ふかを見てゐた。

一寸した小さい事でも、一寸した點でも子供の燃えるやうな注意から辷り去ることはなかつた。家庭生活の光景なども、彼の心に深く刻み附けられてゐた。彼の柔らかい智力は、多くの生々した實例を吸收して、知らず識らずのうちに、その周圍の生活から自分の生活要目を作るのであつた。

オブローモフ家の朝は、無駄に費されたとは言へない。料理部屋でカツレツや青物を切るナイフの音は、村中にさへ聞える程であつた。

女中部屋からは、絲卷の音が聞えた。それから婆さんの靜かな細い聲も聞えた。それは婆さんが泣いてゐるのか、それとも悲しい歌を言葉なく唄つてゐるのか聞き分けられなかつた。

アンティーブが水桶を持つて屋敷内へ歸つて來ると、四方八方から婆さん達と馭者達とが、手桶や馬槽や水差などを持つて水桶の傍に集まつた。

が、彼方では、一人の婆さんが粉を入れた茶碗と一山の卵とを持つて穀倉から料理部屋の方へ行つた。其

處では、料理人が窓から突然水を振り撒いて、アラープカにかけた。アラープカは、朝の間眼を放さずに窓の方を見ながら、尾を振つたり、口舐ずりをしたりしてゐたのである。

オブローモフ老人も矢張り忙がしかつた。彼は朝の間窓の傍に腰掛けて、皆が屋敷の中で爲てゐることを怠りなく監視してゐた。

「おい、イグナーシカ！　馬鹿野郎、何を持つて行くんだ？」と、彼は屋敷内を歩いてゐる一人の男に訊いた。

「下男部屋へナイフを磨ぎに行くんでがすよ。」と、その男は主人の方を見向きもせずに答へた。

「よし、持つて行け、持つて行け。だが、よく見て磨げよ！」

それから婆さんを呼び留める。

「おい、婆さん！　婆さん！　何處へ行くんだ？」

「旦那さま、穴藏へ行きやすだよ。」と、婆さんは立留つて言つた。そして片手を眼の上に翳しながら、窓の方を見た。「食卓の牛乳を取りに。」

「よし、行け、行け！」と、主人は答へた。「だが、氣を附けろよ。牛乳を零すなよ——おい、おい、ザハール！」

ルか、悪戯者奴、再た何處へ駈け出すんだ？」と、主人は叫んだ。「俺が言ひ附けた時に駈け出せばいい！俺はもうこれで三度お前が駈け出すのを見たぞ。客間へ歸つて居れ！」

ザハールは再た居睡をしに客間へ行つた。

野原から牝牛が歸つて來ても　老人は先づ牛に水を飲ませることを心配する。番犬が牝鶏を追ひ廻してゐるのを窓から見ようものなら、屋敷内の紊亂を取り締る爲に直ぐに嚴格な方法を講ずる。

彼の妻君もなか〳〵忙がしい。裁縫師のアウェールカに夫の胴衣からイリューシャの上衣を作ることに就いて三時間くらゐも説明をする。白墨で寸法を書いて、アウェールカが布を誤魔化さないやうに見てゐる。それから、女中部屋へ行つて女中一人々々に一日分のレース編を定めて遣る。次には、ナスターシャ・イワーノウナかステパニーダ・アガポーウナか或は自分の小間使の中の誰かを呼んで、實際上の目的の爲めに庭を歩く。林檎が熟してゐないかとか、昨日熟してゐたのが落ちてはゐないかなどと見廻はる。彼方を結び附けたり、此方を切り取つたりする。

けれども、一番主な配慮は料理部屋と晝餐とであつた。晝餐に就いては、家族全體で相談をした。老耄れた叔母まで、こ　相談に呼ばれた。皆自分の食ひたい物を申し出るのであつた。或る者は臓物入のスープを、或者は素麺か又は胃の腑を、或者は臓腑を、或者は赤いソースを、或者は白いソースをそれ〴〵申し出た。

どんな相談も、一度は考究され、詳細に審議された上で、女主人の最後の宣告で容れられるとも、または退けられるとも決定るのである。

料理部屋には、ナスターシャ・ペトローウナかステパニーダ・イワーノウナかが絶えず走らされて、これを足すとかあれを換へるとか云ふことを傳へたり、料理用の砂糖や蜜や酒を持つて行つたり、料理人が出した物を皆殘らず入れるかどうかを注意したりした。

食事に就いての配慮がオブローモフカ村では一番大切な生活上の配慮であつた。年中行事のお祭の爲めには、澤山な仔牛が肥され、澤山の鳥も養はれた！　この鳥の爲にも、幾多の細密な考へや仕事や心配が必要であつた。聖名祭や他の祝日に用ひられる七面鳥や雛鷄などは、胡桃で養はれた。雌鳥には運動を禁じ、お祭の數日前からそれを袋に入れて、動かぬやうに掛けさせた。それは、脂を增す爲めであつた。ジヤムや漬物や菓子なども種々と澤山に貯へられた。オブローモフカ村では、蜂蜜やクワスが煮られ、肉入パンが燒かれた。

斯うして午前中は皆離離と氣を配つて、忙がしい蟻のやうに元氣よく生活するのであつた。

日曜日や祭日でも、矢張りこの働き好きな蟻共は、休息しなかつた。その時にも、料理部屋のナイフの音は、益々忙しく、そして益々强く鳴り響くのであつた。婆さんは、平常の二倍もある粉や卵を持つて、穀倉から料理部屋の間を度々往復した。鷄小舍にも一層多くの呻聲が聞え、多くの流血が行はれた。大きな肉入パンも燒かれた。家族の者達は、それをその翌日まで食べた。三日目四日目になるとその殘りは女中達へ下げられた。斯うして此の肉入パンは五日目の金曜日までである。そして遂々一つの堅い塊になり、すつかり中身がなくなると、特別のお惠みと云ふ體で、アンティープに授けられるのである。アンティープは十字を切りながら、この珍らしい化石を熱心にガリ〳〵と嚙み割る。彼は、數千年を經た古い頭蓋骨の器具で古酒を玩味する考古學者のやうに、肉入パン其物を味ふと云ふより、寧ろこれは主人の肉入パンであると云ふ意識を味はふのであつた。

子供は、何物をも見遁さない子供の智慧で、これを視詰め、これを觀察してゐた。彼は忙しい朝が有益に過ぎると、正午と晝餐とが來ることを呑み込んでゐた。

暑苦しい眞晝であつた。空には一片の雲もない。太陽は頭上に凝つと停止して、草を燒いてゐる。空氣も流れを留めて、凝つと淀んでゐる。木も水も微動さへしない。木と畑との上には、攪亂し難い靜寂が横はつてゐる。萬象は悉く死んだやうである。何處か遠くには、人の聲が甲高く鳴り響いてゐる。二十サーゼンも離れた所で、甲蟲が羽音を發てゝ飛んでゐるのが聞える。繁つた草の中には、誰かゞ頻りに鎌をかいてゐる。誰か其處に横はつて、甘い夢を結んでゐるやうである。

家の中にも、死んだやうな靜寂が籠つてゐた。晝食後の睡眠時間になつたのである。

子供は周圍を見廻すと、父親も母親も年老いた叔母も召使達も、皆隅々で眠つてゐた。隅にありつかなかつた者は、草積場へ行つた。或者は庭に行き、或者は玄關に凉み場を搜し、また或者は蠅を避ける爲めに手巾で顏を覆うて、暑さに脂汗を滲ませながら、食堂で眠つてゐた、食堂には、大きな晝餐の殘骸が横はつてゐた。園丁も庭の灌木の下にある自分の鋤の傍で長くなり、馭者も馬小舍で眠つてゐた。

イリヤ・イリイーチは下男部屋を覗いた。其處でも、皆子供達を打棄らかして、棚や床や玄關など所嫌はずごろ〳〵と寢てゐた。子供達は屋敷の中を匐ひ廻つたり、砂を掘つたりしてゐた。犬も疾くから小舍の中へ入つてゐた。幸ひ誰も吠える者がないのである。

だから、誰にも會はずに家の中を通り拔けることが出來た。周圍の物を手當り次第容易く盜むことも出來れ

ば、それを車で屋敷から持ち去ることも容易であつた。若しこの地方に盜賊が横行するやうなことがあれば、誰もその盜みを妨げる者はないに違ひない。

これは、凡てを呑み盡したやうな、そして何物にも破られない、丁度死そのもののやうな眠りであつた。萬物は死んだやうであつた。たゞ四方の隅々から、種々な調子の鼾が聞えるだけであつた。

時々誰か急に眠つたまゝ頭を擡げ、吃驚したやうに無意味に兩側を見廻はし、寢返りを打つたり、或は眼を瞑つたまゝ夢現で唾を吐いたり、脣をピチヤ〳〵と鳴らしたり、何か鼻聲で獨語つて再た寢たりする。

また或る者は、前觸れもなく突然に自分の寢臺の上に起き上り、貴重な時間を空費するのを恐れでもするかのやうに、クワスの入つてゐる盃を取り、その中に浮んでゐる蠅を盃の片隅に吹き寄せる。その時まで凝つとしてゐた蠅は、ひどく動き始める。起きた者は、自分の氣分を良くしようとしてクワスで喉を濕ほすと、再た彈丸に中つた人のやうに、蒲團の上に倒れて了ふ。

が、子供は矢張り靜察を續けてゐた。

彼は貪食　乳母と一緒に再た戸外へ出た。けれども、乳母は子供を打棄つて置いてはならないと女主人から嚴しく戒められてゐたにも拘らず、また自分自身もさう思つてゐるにも拘らず、睡魔の誘惑に抵抗することが出來なかつた。彼女も矢張りオブローモフカ村を領してゐるこの睡眠病に感染して了つた。

最初彼女は根氣よく子供を見守り、自分の傍から遠く行かないやうに、駈けずり廻るのを嚴しく叱つてゐたが、やがて傳染病が近づいて來る徵候を感ずると、門の外へ出ないやうにとか、山羊に觸らないやうにとか、鳩小舍へ上らないやうになど〻懇願し始めた。

彼女も何處かの日蔭に、階段か穴藏の入口か草の上か何處かに腰掛けてゐた。そして靴下を編みながら子供を見守つてゐるやうに見せかけてゐた。けれども、程なく彼女は頭を振りながら、氣懈さうに子供に注意するやうになつた。

（あれ、あの子を御覽。上らうとしてゐる。あの獨樂は、露臺に登らうとしてゐる。）と、彼女は殆んど夢現に考へた。（それからまた……窪地へ）……

婆さんの頭は、膝の上に屈み、靴下は手から落ちた。婆さんは子供のことを忘れ、少し口を開けて、輕い鼾をかき始めた。

が、子供は頻りにこの瞬間を待つてゐた。この時から彼の獨立の生活が始まるのである。

彼は世界中にたつた一人で居るやうな氣持がした。彼は爪立をして乳母の傍を逃げ出し、誰か何處で眠つてゐるかと皆を見廻した。それから立ち留つて、誰かゞ眼を開けたり、唾を吐いたり、眠つたまゝ何事か唸つたりするのを凝つと視詰めてゐたが、やがて心臟を躍らせながら露臺に駈け上り、ぎし〳〵と鳴る板の上を走り、鳩小舍に登り、庭の奥に入つて甲蟲の羽音を聞き、それが淡く空中を飛んで行くのを見送つた。また彼は何かゞ草の中で鳴いてゐるのに聞き惚れた。この靜寂の破壞者を搜し出して捉へた。蜻蛉を捉へてその羽を拐り、それがどうするかを見た。それに藥を通して、こんな物を附けてどんな飛び方をするかを見た。また彼は蜘蛛が自分の捉へた蠅の血を吸つてゐるのや、憐れな犧牲者が悶えながら蜘蛛の足の下でぶん〳〵

と翅を鳴らしてゐるのを面白さうに息を殺して見た。が、遂々犠牲者と迫害者との双方を殺して了つた。

次に、彼は小溝へ行き、何かの根を掘り出し、皮を剝いて、それを母親から貰ふ林檎やジャムなどより甘さうに食つた。

彼は門の外へ駈け出した。樺林へ行かうと思つたのである。彼は廻り路をせずに、眞つ直ぐに小溝や籬や穴を越えて行けば、五分間くらゐで其處へ行けると思つてゐた。けれども、彼は其處に悪魔や盗賊や怖ろしい猛獣があると云ふことを聞いてゐたので、びく〳〵してゐた。

彼は窪地へ駈け下りたくなつた。窪地は庭から五十サーゼン餘りの處にあつた。子供はもう其の端まで駈けつけ、眼をしば敲きながら、噴火口の中を覗くやうに窪地を見ようとした。……が、俄かに彼の前に、この窪地に就いての噂や傳説が現はれた。彼は恐怖に我を忘れ、生きた心地を失つて駈け戻つた。そして怖ろしさに慄へながら乳母に抱きついて此の婆さんを呼び起した。

婆さんは突然夢から醒めると、頭の手巾を直し、灰色の頭髪束を指で手巾の下に押し込み、そして少しも眠らなかつたやうな風をしながら、疑はしさうにイリユーシヤ（譯者註。イリヤー＝帝稱）を眺め、それから主人の窓の方を見やり、彼女の膝の上に横はつてゐる靴下の編針を、慄へる手で一本々々に動かし始めた。

暑さも幾らか弱まつて來た。自然の萬象は、皆な生々して來た。太陽はもう林の方へ傾いてゐた。

家の中の靜寂は、次第に破れて來た。或る何處かの隅の扉がキーと鳴つた。屋敷の中には、誰かの足音が聞えた。草積場では、誰かゞ噴嚏をした。

程なく料理部屋から一人の男が狼狽て、重さうに身體を屈げて、大きな湯沸器を持つて來ると、皆お茶を飲みに集まつた。或人の顔は、皺くちやになつてゐた。眼には、涙が漂つてゐた。或る男は、頸と顳顬のところに、赤い斑點を作つてゐた。或る者は、睡さうな妙な聲を出して話をした。斯うした連中は、皆辛つと我に歸つたやうに、溜息を吐いたり、太息をしたり、欠伸をしたり、頭を掻いたり、身慄をしたりした。

午餐と午睡とは、癒し難き渇を生んだ。渇は喉を焼いた。で、皆な十二杯宛もお茶を飲んだが、それでもまだ渇は癒らなかつた。太息や呻聲も聞えた。皆は覆盆子水や梨水やクワスなどを飲み始め、或者はたゞ喉の渇を止めるために何かの藥さへ飲んだ。

皆一種の神罰でも遁れようとするやうに、渇から遁れようとした。皆アラビヤの沙漠を旅行して、何處にも泉を見附け出さなかつた駱駝のやうに、萎え疲れてゐた。

子供は母親の傍に居つた。彼は自分の周圍の人達の不思議な顔を眺め、彼等の眠さうな萎えたやうな談話に聞き惚れてゐた。彼には、彼等を見るのが面白かつた。また彼等が言ふ種々な無駄話を聞くのも珍らしく思はれたのである。

お茶が濟むと、皆それ〴〵の仕事に取りかゝる。或者は川へ行つて、水の中へ小石を蹴込んだりしながら、岸の上を徐かに逍遙ふ。或者は、窓際に腰掛けて、傍を過ぎ行く現象を一々見遁すまいとする。屋敷の中を猫が駈け通つても、白羽鳥が飛んで行つても、その觀察者は、眼と自分の鼻先とでそれを見送りながら、頭を右へ向けたり、左へ向けたりする。犬はどうかすると、よく斯う云ふ風に一日でも窓の上に坐り、頭を

太陽に曝しながら、通り過ぎる者を注意深く見送ることがある。

母親はイリユーシヤの頭を抱いて自分の膝へ載せ、徐かにその頭髪を梳りながら、柔らかい頭髪に見惚れる。ナスターシヤ・イワーノウナやステパニーダ・ティホノウナにもそれを讃めさせる。そして彼女達とイリユーシヤの將來のことを語り合ひ、彼を自分が作つた或る華やかな叙事詩の主人公に當て篏める。女中達はイリユーシヤが黄金の山を作るだらうと言つて讃める。

が、遂々黄昏になつて來る。料理部屋には、再た火の燃える音が聞え、再た氣持のいゝナイフの音が響き出す。晩餐の支度を始めたのである。

召使達は、門の傍に集まつた。其處には、バラライカや笑聲が聞えた。鬼ごつこが始まつたのである。

が、太陽はもう林の蔭に沒して、幾條かの温い光線を投げてゐた。その光線は、火の條のやうに林全體を貫き、松の梢に燦々と黄金を注いでゐた。やがて光線は、一條々々と消えて、最後の一條は長く殘つて、細い針のやうに、枝の繁みを貫いてゐたが、それもとう〳〵消えてしまつた。

萬象はその形を失つた。何もかも最初は灰色の塊に、次に黑い塊に溶け合つた。小鳥の歌も次第に弱くなつた。程なくその小鳥も全く鳴き止んで了つたが、たゞ頑固な一羽だけは、皆に反對でもするやうに、廣い靜寂の中にたゞ獨り合間を置きながら單調に囀つてゐた。が、それさへ次第に度數を減らし、遂々響のない弱い聲で叫び、最後に自分の周圍の木の葉を輕く振り動かして身慄ひをした……そして眠つて了つた。

何も彼も沈默した。たゞきりぎりすだけがお互に張合ふやうに段々強く鳴いてゐた。地上からは白い水蒸

氣が立ち騰つて、草原や川の上に擴がつた。川も矢張り靜かになつた。暫くすると、川の中に何か急に最後の水音が聞えたが、川は動かなくなつた。

濕氣が匂つて來た。益々暗くなつた。多くの立木は、怪物か何かのやうな形に固まつた。林の中は怖ろしくなつた。其處では、誰かゞ急に軋るやうな音を發てた。怪物の一つが動き出して、乾いた枝を其の足で踏み折つたかのやうであつた。

空には、最初の星が生きた眼のやうに煌々と輝いた。家の窓には、燈火が瞬き出した。

自然の嚴粛な靜寂の時が來た。この時には創造の智慧が最も強く働く。詩的情藻が最も盛んに沸騰する。この時には心の中に情熱が最も生々と燃え上り、悲哀が最も強くその苦痛を訴へる。この時には殘酷な心の中に反逆的思想の種子が、最も柔順に、そして最も強く熟する。この時オブローモフカ村では、皆平和に熟睡してゐる。

「お母さん、散歩に行きませうよ。」と、イリユーシヤは言つた。

「何を言つてるの、お前は！　今頃散歩に行かうなんて。」と、母親は答へた。「濕つぽいから、足が感冒を引きます。それに怖いのよ。今頃林の中には鬼が歩いてゐて、小さい子供を見ると、連れて行つて了ふんですから。」

「何處へ連れて行くの？　鬼つてどんなもの？　何處に住んでゐるの？」と、子供は訊いた。

母親は自由に自分の空想の翼を擴げた。

子供は母親の言ふことを、愈々睡魔に捉はれて了ふまで、眼を開けたり、閉ぢたりしながら聞いてゐた。乳母が來て彼を母親の膝から抱き上げた。乳母は、眠つた子供の頭を自分の肩にだらりと凭せかけながら、蒲團へ連れて行つた。

「さア、これで今日も過ぎた。有難いことだ！」と、オブローモフ家の者達は寢床に入りながら言つた。溜息を吐いたり、十字を切つたりしながら言つた。「先づ無事に濟んだ。明日もどうか斯うありたい！　神樣の御蔭だ、神樣の御蔭だ！」

次に、オブローモフは他の季節の夢を見た。彼は無限に長い冬の夜、怖々と乳母に抱き附いてゐた。乳母は彼に或る不思議な國の話を囁いてゐた。其處には、夜もなければ寒さもない。其處には、いつも不思議な事が行はれてゐる。其處には、蜜と乳との川が流れてゐる。其處では、一年ぢう誰も何も爲ない。そして毎日イリヤ・イリイーチのやうな立派な若者達と、口でも言へなければ筆でも書けないやうな美人達とが、散歩をしてゐるのである

其處には、氣の良い魔法使ひの女が住んでゐて、時々シチューカ（譯者註。河に棲む魚の名。）の姿になつて我々の國へ現はれ、一人の靜かな惡氣のない戀人を、別な言葉で言へば、皆から辱かしめられてゐる或る一人の懶惰者を選んで、それに今言つたやうな理由で澤山の寶物を與へる。その懶惰者は働かずに食へるし、着ようと思へば衣服もある。それからミリトリーサ・キルビチエーウナと云ふやうな絶世の美人と結婚をする。

子供は耳を欹て、眼を睜つて、熱心にその物語に聞き惚れてゐた。

乳母の傳說は、斯う云ふ具合に巧みに實際に存在することを物語の中で避けた。で、想像と智慧とは、虛譚に感化されて、彼が年老るまで彼の奴隷になつてゐた。乳母は何の氣もなく馬鹿のエメルの話をした。然し、これは我々の祖先に對する意地惡い陰險な諷刺であつた。或は我々自身に對するものと言ふことも出來る。

イリヤ・イリイーチは大人になつてから、蜜と乳の川が實際にないことや、さう云ふ魔法使の女がゐないことなどを知つて、乳母の物語を嘲笑つたが、然しこの嘲笑は眞實のものでなくして、竊かな歎息を伴ふものであつた。彼は物語と生活とを混同し、何故物語が生活でなく、生活が物語でないのだらう、と無意識の中に悲むのであつた。

彼は知らず識らずミリトリーサ・キルビチエーウナのことを空想した。彼はいつもたゞ散歩することだけを知つてゐる處へ、そして心配も悲哀もない處へ心を惹かれてゐた。彼の心には、煖爐の上に横たはり、働き出した衣服ではなく、有り合せの衣服を着て歩き、優しい魔法使の女の備へて呉れる食物を食べたいと云ふ希望がいつまでも殘つてゐた。

オブローモフ老人も祖父も矢張り子守の時分には、乳母や子守男の口から銅版にして代々傳へられたかのやうな物語を聞いたのであつた。

けれども、イリヤ・イリイーチの乳母は、彼の想像に全く別な光景を插いた。

乳母は彼に我國のアヒールやウリースなどの手柄話をした　イリヤ・ムーロメツやドーブルイニヤ・ニキ

ティーチやアリョーシヤ・ポポウキーチなどの武勇譚もした。勇士ボルカンや旅人コレチーシチの話もした。彼等が露西亞を旅行して、不逞なバスルマンの軍勢を亡ぼしたことや、綠酒を滿たした盃を一息で飲み干しても唸らない者があるだらうかと議論したことなども物語つた。それから、乳母は兇暴な盜賊のことや、眠つてゐる王妃達のことや、化石した街と人間のことなどを話し、遂に我國の幽靈談や、死人のことや、怪物のことや、狐憑のことに迄話し及んだのであつた。

乳母はホーマーのやうな單純率直な心で、生々とした精細な浮刻の繪のやうに、露西亞のイリアドを子供の記憶と想像との中に注ぎ込んだのである。そのイリアドは、人間がまだ自然と人生との危險と祕密とに眞れず、狐憑や鬼の前にも懼ひ戰き、アリョーシヤ・ポポウキチのところへ行つて、自分の周圍の不幸を防ぐことを願つた混沌時代に、我國のホーマー崇拜家によつて作られたもので、當時は空にも水中にも、林の中にも野原にも、奇妙な事ばかり行はれてゐたものである。

當時の人は怖ろしい不安な生活をしてゐたのである。人は家の閾から出ることさへ危險で、若し家の外へ出ようものなら猛獸に引き裂かれたり、盜賊に切られたり、獰惡なダッタン人に持物を奪はれたり、行方不明になつて何の手掛りもなくなつたりするのであつた。

また俄かに空には不思議な前徵や火柱や火玉が現はれた。新らしい墓地の上では、火が燃えた。林の中では、誰かゞ提灯のやうなものを持つて彷徨つたり、さうかと思ふと、カラ〳〵と怖ろしく笑つたり、暗闇の中で眼を光らせたりした。

人間と一緒に澤山の不可思議な物も造られたのである。人は長い間幸福に暮してゐる——何事もない。ところが、突然に妙なことを言ひ始める。或は自分の聲で無い聲で叫び、或は夜な夜な眠つたまゝ彷徨つて歩く。種々なことで他人を打つたり、撲つたりする。そしてこんなことがある前には、牝鷄が牡鷄のやうに時を告げたり、屋根の上で烏が啼いたりする。

氣の弱い人は、怖〻と人生を見廻はしながら茫然自失する。そして自分の周圍の自然と自分の天性との祕密を探る鍵を想像の中に求める。

實際、永久に靜寂な萎え切つた夢のやうな生活を營み、運動もせず、樣々な實際の恐怖と冒險と危險を知らずにゐると、人間は自然界に有り得べからざる他の世界を造る。そしてその世界の中に、浮は氣な空想の爲めに快樂と安逸とを搜し、また魂象の狀況や原因の普通の連絡を、現象そのもの以外に探すものらしい。

私達の憐れな祖先は、五里霧中の生活をしてゐた。彼等は自分の意志の翼を擴げもせず、それを抑制しようともせず、それでゐて不幸災難に會ふと無邪氣に驚いたり、怖れたりして、無言で不明瞭な自然の形象文字にその原因を訊ねるのである

彼等の出會す死は、其の前に死人を運び出す時、家からは頭を先にして出したが、門からは足を先にして出さなかつた爲めに生ずるものであつた。火事は、犬が三晩窓の下で吠えた爲めに起るものであつた。で、彼等は死人を門から出す時には、足を先にして出すやうにし、食事にも定つたものを食ひ、寢るにも竈の上にぢかに寢るやうにした。犬が吠えでもすると、屋敷の中から敲き出し、光る木片などは、矢張り腐つた床

の隙間に投げ込んだ。

當節の露西亞人も、自分の周圍の虛構のない嚴密な現實の中で、誘惑的な昔譚を信ずることが好きである。今後も長い間この信仰から離れることは出來まい。

イリューシヤは乳母から「黃金の羊毛――ジヤル・プティーツア」の話や、魔法城の城砦と祕密部屋との話などを聞くと、自分を勳功を樹てた勇士に想像して活氣づき――身體ぢうをぞく〳〵させたり、勇士の不成功を歎いたりするのであつた。

乳母の物語は、無限に流れ出た。彼女は熱心に、夢中に、所によると感激して生々と物語るのであつた。それは、彼女自身がその物語を半ば信じてゐたからである。老婆の眼は火花に燃え、頭は感動の爲めに慄へ、聲は調子外れに高くなるのであつた。

不思議な恐怖に捉はれた子供は、眼に涙を湛へながら、乳母にしがみついた。

死人が夜中に墓の中から出て來ることや、無理に怪物の犧牲にされる者のことや、木の足を有つた熊が、切り放された自分の自然の足を捜して、大村小村を歩き廻ることなどの話になると、子供の頭髮は怖ろしさに頭の上で慄へた。子供の想像は冷めたり、沸騰したりした。彼は苦しいやうな甘いやうな病的な心持を感じ、その神經は樂器の絲のやうに緊張した。

乳母が淋しい聲で（菩提樹の足よ、軋れ、軋れ、俺は今小村を歩いてる。大村を歩いてる。百姓の女共は皆眠つてる。一人の婆アは眠らずに、俺の毛皮に坐つてる。俺の肉をば煮いてゐる。俺の毛をば紡いでる）

などと熊の言葉を言つた時や、熊が遂々百姓小屋の中へ入つて、自分の足を奪つた者を捉へようとすることを話した時には、子供は、もう我慢が出來なかつた。彼は身慄をしながら、キヤツと言つて乳母の手に抱きついた。彼の眼からは、驚きの涙が流れてゐた。同時に彼は、熊の爪に捉はれてゐるのではなく、霧煖爐の上で乳母の傍にゐると云ふ嬉しさからハツハツと笑つた。

子供の想像は、不思議な幻影に充たされた。恐怖と悲哀とは、彼の心の中に長く、いや、永久に根を下したやうであつた。で彼は悲しさうに周圍を見廻はしながら、いつも生活の中に不幸災難ばかりを見出し、いつも罪惡と心配と悲哀とのない國ミリトリーサ・キルビティエーウナの住んでゐる國、何もしなくつても甘い物を食はせ、綺麗な物を着せて貰へるその不思議な國のことばかりを空想してゐた。物語は、オブローモフカ村の子供達に對してばかりでなく、大人に對しても生涯の終まで其の權力を保つてゐた。オブローモフ家の者も村中の者も、主人やその細君を始め、頑丈な鍛冶屋のタラースまで、皆暗い夜になると、何故か悸々してゐた。どんな木でも、其の時分になると、巨人に變るし、どんな濡木でも、强盜の洞窟に見えるのであつた。

バタンと云ふ窓扉の閉まる音や風か煙突に衝突つて唸る音も、男達や女達や子供達を眞蒼にした。洗禮祭の晩でも、十時過になると、誰も一足でも門の外に踏み出さなかつた。復活祭の晩など、皆家の中の惡魔が出ると云つて、廐にさへ行かなかつた。

彷徨つてゐたと話すと、彼等は少しも考へずに信ずる。また誰かが、それは綿羊ではなく、何か他の者だとか、或は何處其處のマルフアとかステパニーダとか云ふ女は、魔法を使ふなどゝ噂をすれば、彼等は綿羊やマルフアを怖がるやうになる。そして彼等は、どうして綿羊が綿羊でなくなり、マルフアが魔法使の女になつたのかと不審を抱くやうなことがないばかりか、誰かそれを疑ふ者があると、却つて其の者を責めるくらゐであつた。それほどに、オブローモフカ村の人達の不思議に對する信仰は強かつたのである。

イリヤ・イリイーチは後で、世界は單純に作られてゐることや、死人は墓から出て來やしないことや、亘人が現はれたら、それを直ぐに見世物小屋へ押込んで了ひ、強盜ならば監獄へ打ち込むことを知つた。けれども、たとへ幻影に對する彼の信仰そのものは消えても、恐怖と言ひ知れぬ哀愁から生ずる或る沈澱物は、決して消えなかつた。

イリヤ・イリイーチは怪物から災難を受けるものでないことを知つてゐたが、でもよく分らないながら何か災難があるやうな氣がして、一歩踏み出す毎に何か怖ろしいものを豫期して、びくゝしてゐた。今でもなほ暗い室に居つたり、死人を見たりすると、子供の時分に彼の心に浸み込んだ氣味惡い哀愁の爲めに身慄を感ずるのであつた。彼は毎朝自分の恐怖を笑ふけれども、晩になると再た蒼白めるのである。

なほ、イリヤ・イリイーチは俄かに十三か十四歳頃の少年の時分を夢見た。

彼はオブローモフカ村から五露里ばかり距てたウェルフリョオウォと云ふ村へ行つて、其の村の支配人で獨逸人なるシトーリツのところで學問をした。シトーリツは田舍貴族の子弟の爲めに餘り大きくない學塾を經營してゐたのである。

彼には、アンドレイと云つて、オブローモフと殆んど同じくらゐの年齡の息子があつたので、オブローモフの兩親は自分の息子をも彼に頼んだのである。オブローモフは、殆んど一度も學問をしたことがなかつた。それに、生來虛弱であつた爲め、子供の時分には舐めるやうにして育てられた。で、祖母の傍でなく、他人の家で黑麵な子供達の間で暮してゐることや、誰も自分に愛想を言つて與れる者もなければ、誰も自分の好きな肉入パンを燒いて與れる者もないことを思つて、彼はいつも窃かに泣いてゐた。

この學塾には、この二人の子供の外に、他の子供はゐなかつた。

父親と母親とは、詮方なしに甘垂ッ兒のイリューシャに、學問をさせるやうにしたものゝ、それは涙と歎きと後悔との種になつた。で、彼等は遂々イリューシャを呼び戻した。

シトーリツは凡ての獨逸人のやうに、嚴格な實務家であつた。だから若しオブローモフカ村がウェルフリューウォ村から五百露里も離れて居れば、イリューシャはシトーリツのところで多分何かを立派に修學し得たに違ひない。が、どうして學問なんかしてゐられよう？　魅力の强いオブローモフ家の雰圍氣と生活狀態と習慣との勢力は、ウェルフリューウォ村までも擴がつて來た。この村も、以前はオブローモフ家の領地であつたのだから、シトーリツ家の外、どの家でも皆例の原始的な懶惰と單純な風習と靜寂と沈滯とを呼吸してゐたのは、已むを得ないことである。

子供の智力と感情とは、彼が始めて書物を見る以前に、既にこの地の有ゆる生活の光景や狀態や風習を充

たしてゐた。が、子供の腦髓にある智慧の種子が、斯うも早く發達し始めようと誰が思つてゐたらう？　子供の心に、最初の觀念と印象とが生れたことを、どうして見遁すことが出來よう？

子供は、まだ辛つと口を利くやうになつた頃であつたらう、いや、まだ全然口の利けない時分、歩くことさへ出來なかつた時分、たゞ大人がどんよりした眼附だと云ふ子供らしい無言の凝視で周圍を見廻してゐた時分であつたらう、もう自分の周圍の現象の意義や連絡などを洞察してゐた。が、このことは、自分にも他人にも氣がつかなかつた。

イリューシヤはもう疾くに、自分の傍で大人達が言つたり、爲たりすることに注目し、またそれを理解してゐたらしい。彼の父親が絹綿天鵞絨のズボンを穿き、肉桂色木綿羅紗の上衣を着て一日ぢう手を背後に組んだまゝ、隅から隅へと歩いたり、煙草の匂を嗅いだり、鼻をかんだりしてゐたことも、母親が珈琲からお茶へ、お茶から晝餐へ移り行つたことも、父親が、收穫れた麥束がどのくらゐ出來たかを見ようともせず、刈り殘した所を調べようともしないが、彼に手巾を渡すのが少し遲れようものなら、一家の不始末を怒鳴つて、家ぢう上を下への大騒動をさせることも知つてゐたらしい。

彼の若い智力は、誰でも自分の周圍の大人が生活してゐるやうに生活すべきもので、それ以外の生活はあり得ないと疾くに決めてゐたらしい。彼として、それ以外にどう決めることが出來よう？　では、オブローモフカ村の大人は、どんな生活をしてゐたのだらう？

彼等は、何の爲めに生命を享けたのだらう？　と、自問したことがあるだらうか？　どうだか分らない。またその自問に何と答へたらう？　多分、何とも答へなかつたらう。そんなことは、彼等にとつて非常に單純明瞭であるやうに思はれてゐたからである。

彼等は所謂苦勞の多い生活に就いて、胸に苦しい心配を持つてゐる人々に就いて、又何故か地上の一隅から一隅に彷徨ひ歩く人々に就いて、或は自分の生命を限りない永久の苦勞に投げ出してゐる人々に就いて、何事も聞いたことがなかつた。

オブローモフカ村の人々は、心の不安を輕蔑し、何處かにそして何かに憧がれる永劫の希求を生活の範圍に入れなかつた。彼等は情慾の衝動を火のやうに怖れてゐた。他處では人々の身體は內部的精神的な噴火作用の爲めに直ぐ燃え出したが、オブローモフカ村の人々の精神は、何の障害もなく平和に柔らかな肉體の中に溺れてゐたのであつた。

生活はオブローモフカ村の人々を、他處の人々に對するやうに、時ならぬ皺や精神上の打擊や病氣などで縁どらなかつた。

善良な人々は、種々な不快な偶然で、例へば病氣とか損害とか爭論とか、殊に勞苦とかで時々破壞される安靜と安逸の理想が卽ち生活であると解釋した。

彼等は勞苦を、我等の祖先に與へられた罰だと思つて忍んだが、それに親しむことは出來なかつた。だから、この勞苦を遁れることが出來る場合には、または遁れなければならぬことが分つた場合には、機會があり次第必ずそれを遁れた。

彼等は決して茫漠とした理論上や精神上の問題で自分を苦しめなかつた。だから、彼等はいつも健康で快活であつた。だから、彼等の生命は長かつた。四十歳くらゐの男は、青年の仲間であつた。老人達は死の苦痛と戦はなかつた。そして生きられるだけ生き永らへると、靜かに冷たくなり、何時の間にか最後の太息を吐き出して、消えるやうに死ぬのであつた。だから、彼等は昔の人間の方が丈夫だと言つてゐる。

實際、昔の人は丈夫であつた。以前には子供に生活の意義を説明したり、生活を賢明で嚴肅なものとして、子供をそれへ準備させたりすることを急がなかつたからである。また子供を書物で苦しめなかつたからである。書物は頭の中に無限の問題を生み、問題は智力と感情とを呑み、結局生命を切り詰めて了ふのである。

兩親は生活の方式を準備して、それを子供に與へるが、その兩親も既に準備された方式を祖父から受け、祖父は曾祖父から受けたのである。同時にその方式をウェスタの火のやうに完全に毀つけないやうに保存すると云ふ約束も傳へられてゐる。代々の祖父の時代に行はれたことは、イリヤ・イリイーチの父の時代にも行はれ、今もなほオブローモフカ村で行はれてゐるらしい。

では、彼等は何を考へ、何に感激し、何を知り、どんな目的に到達しなければならないのだらう？

何も要らない。生活は靜かな川のやうに、彼等の傍を流れてゐるのだ。彼等の爲ることは、ただこの川の岸に坐つて、呼ばれもせぬのに順々に彼等の前に現はれて來る避け難い現象を觀察すれば、それで可いのだ。で、眠つてゐるイリヤ・イリイーチの想像にも、先づ三つの主なる生活作用が、丁度生きた繪のやうに順

順に展開し始めた。その作用は、彼の家族中には勿論、親戚の所にも知人の所にも屢々見られた誕生と結婚と葬式とであつた。

次には、生活の樂しい部分と悲しい部分が、例へば、洗禮日、聖名祭、家庭のお祝、斷肉祭、肉食始、賑やかな午餐會、親族の會合、お客招待、お祝、表向の喜び事や悲しみ事の儀式が次から次へと現はれた。

それは皆、正確に勿體らしく、そして莊嚴に執り行はれた。

彼の頭には、種々な儀式の時に知人達のする顏附や身振などから、彼等のせか〳〵した忙しさうな樣子まで殘らず浮んだ。五月蠅い媒介式でも、莊嚴な結婚式でも、聖名祭でも、彼等に遣らせようものなら、彼等は規定通り少しも略さずに遣つて除けるのである。誰を何處に坐らせるとか、何をどう云ふ風に出すとか、誰と誰とが同乘して儀式に行くとか、緣起を守るとか——斯う云ふことをさせると、オブローモフカ村の者は、誰も決して少しの間違もしでかさないのである。

何處かに子供が生れないと云ふやうなことがあれば、この地の母親連中は、薔薇色の重たい愛の神を持ち廻る。彼等がそんなことをするのは、肥つて白い丈夫な子供が生れるやうにと云ふ禁厭である。

彼等は春が過ぎようと云ふ頃でも、若し春の始めに雲雀を燒かなければ、春を知らうとしない。彼等はどうして春を知らずに居られよう。どうして雲雀を燒かずにゐられよう？

其處に彼等の凡ての生活と學問とがあり、其處に彼等の凡ての悲哀と喜悅とがあるのである。だから、彼等は他の凡ゆる心配と悲哀とを自分から追ひ拂ひ、他の喜悅を知らないのである。彼等の生活は單にこの根

本的な、避け難い事件によつてのみ動いてゐる。その事件は彼等の智力と感情とに無限の食物を與へるものであつた。

彼等は心臓を感激に波立たせながら、儀式と宴會と禮儀とを待つてゐた。やがて洗禮を受けさせ、結婚をさせ、埋葬して了ふと、その人と、その人の運命とを忘れ、例の無感覺に沈む。その無感覺から彼等の新らしい場合——聖名祭や結婚式が生じて來るのであつた。

子供が生れるや否や、兩親の最初の心配になるものは、出來るだけ確實に、少しも省略せずに、要求される儀式を蔑らず子供の爲に行ふこと、つまり洗禮の後で宴會を開くことであつた。それから子供に對する五月蠅い世話が始まるのであつた。

母親と乳母との問題は、健康な子供を育て上げ、感冒を引かせないやうに、眼を悪くしないやうに、それから種々な厭ふべき事情に遇はせないやうに子供を守ることであつた。母親と乳母とは子供がいつも機嫌が良くつて、澤山に食ふやうにと、熱心に世話を燒くのであつた。

子供が立つやうになると、つまり子供に乳母が要らなくなると、母親の心には、矢張り健康で血色のいゝ細君を捜さうと云ふ希望が窃かに起る。

再た儀式と宴會との時代が來て、最後に結婚式が來る。此處で人生の感激は、その絶頂に達するのである。その次にはもう反復が始まる。子供の誕生、儀式、宴會といふ具合に、葬式によつて背景が變へられるまで續く。が、それも長くはない。或る人は他の人に自分の場所を讓り、子供達は青年になり、同時に花婿になり、結婚をし、そして自分のやうな者を生む——生活は斷れ目のない同じ模様の織物のやうに此の順序で延び、墓の傍で跡なく切れてゐる。

尤も、どうかすると彼等は、他の心配に捉はれることがある。が、オブローモフカ村の人達は、大概平然としてその心配を迎へる。で、心配は彼等の頭上をぐる〳〵と廻り、小鳥のやうに彼等の傍を飛び過ぎて了ふ。その小鳥は、滑らかな壁を目がけて飛んで來た爲め、其處に休み場を見附けることが出來ず、固い石の傍でたゞ徒らに羽搏きをしたゞけで、飛び去るのである。

例へば、或る時、吊露臺の一部分が俄かに家の一方から落ちて、その壞れ物が雛鶏小舎を埋めたことがあつた。アンティーブの妻のアクシーニヤは、吊露臺の下の紡績機の椅子に腰掛けてゐたが、丁度それが落ちる時、幸ひ繊維を取りに行つてゐたので、吊露臺の下敷になることを免かれた。

家中には大騒動が起つた。大人も子供も皆駈けつけて來た。彼等は、雛鶏小舎でよかつたやうなものゝ、若し奥さんがイリヤ・イリイーチを連れて、其處を歩いてゐる時であつたらどうだらう、と思つてぞく〳〵と恐怖を感じた。

皆溜息を吐いた。そしてどうしてこれが前以て分らなかつたのだらうと言つて、お互に詰り合ひを始めた。或者はさう思つてゐたと言ひ、或者は修繕させようと思つてゐたと言ひ、また或者は修繕しようと思つてゐたと言つた。

皆て吊露臺が落ちたのに驚いたが、前の日には、その吊露臺かよくもこんなに長い間保つてゐるものだと

言つて驚いたのである！

こんどはどう云ふ風に修繕したものかと云ふ心配と評議が始まつた。それから、雛鶏小舎を惜み、イリヤ・イリイーチを吊露臺に連れて行くことを嚴しく禁じて、徐々と各自の場所へ解散した。

その後、三週間も經つて、アンドリューシヤとペトルーシヤとワーシカとは、壞れた板や欄干を納屋へ運んで、路の上に散らかして置かないようにと言ひ附けられた。が、壞れた板や欄干は、春になるまで其處に横たはつてゐた。

オブローモフ老人は、窓からそれを見る毎に、修繕のことを考へた。大工を呼んで新らしい吊露臺を作つた方がいゝか、それとも壞れ殘りの部分を取り崩すがいゝか、何方がいゝかと相談した。それから大工を家に歸しながら斯う言つた。

「まア、歸つて呉れ、考へて見る。」

斯うしたことは、ワーシカかモーテカかが、今朝吊露臺の壞れ殘つた部分に上つて見たら、その隅々が壁から離れて、また落ちさうになつてゐた、と報告するまで續いた。

其の時、大工は呼び出されて、最後の相談を持ちかけられた。その相談の結果、壞れ殘つた露臺の一部分を古い木片で暫く支へて置くことに決つた。そして其の月の終までにそれは出來上つた。

「やア！　吊露臺は再た新らしくなつたわい！」と、老人は細君に言つた。「どうだフェドートは巧く丸太を立てたぢやないか。宛然家の入口にある圓柱のやうだ！　まづこれで可い。再た暫く保つ！」

誰か老人に、序に門を立て直し、階段を修繕してはどうか、でなければ階段の隙間を猫ばかりか、豚さへ床の下へ通り抜けるやうになつてゐると言つた者があつた。

「さうだ、さうだ、直さにやならん。」と、イリヤ・イワノウヰチは心配らしく答へて、直ぐに階段を見に行つた。

「實際、この通り搖ら〳〵して居るんぢやからなア。」と、彼は片足で階段を搖籠のやうに搖りながら言つた。

「でも、この階段は作つた時分から搖れてゐただよ。」と、誰かゞ言つた。

「搖れてゐた？　そんなことがあるものか。」と、オブローモフ老人は答へた。「修繕もせずに十六年の間壞れなかつたんぢやないか。ルカが立派に作つたんだ！……彼は大工だつたよ、大工でね……死んだが――天國へ遣りたいものだ！　今時の者は我儘でこんな物を作れやしない。」

そして彼は眼を他の方面へ向けた。が、階段は搖れてゐると云ふのに、まだ矢張り壞れない。

實際、このルカと云ふ男は、偉い大工だつたらしい。

が、兎に角主人達が、その後災難や危險をひどく心配して、やかましく言つたり、または怒つたりするのも無理もないことである。

どうしたならばさゝ云ふ災難や危險を避け、または喰ひ止めることが出來るだらう？　直ぐに方法を講じなければならぬ。で、皆は小溝に橋を架けてはどうかとか、庭の一部分を圍つたらどうかとか、そんなこと

ばかり言つてゐた。それは家畜か木を害はないやうにする爲めで、その時分、籬の一部分など地面に倒れてゐたのである。

イリヤ・イワノウヰチはこんなことまで心配した。或時、彼は庭を歩いてゐる時に、息を切らしながら籬を引き起して、庭番に直ぐ二本の杙を立てさせた。籬はこの手當のお蔭で、夏中立つてゐたが、冬になつて雪の爲めに再た倒された。

終にはこんなことが起つた。彼はアンティープが馬や樽と一緒に橋から小溝の中へ落ちると直ぐに、橋の上に新たに三枚の板を敷き、アンティープの傷がまだ癒らないうちに、もう橋は新らしく出來た。

牝牛や山羊は、籬が再た倒れると、庭の中へ次第に入り慣れて、あかすぐの灌木を喰ひ、十番目の菩提樹を踏み折り、これから林檎にかゝらうとした。その時、籬を必要なだけ埋めて溝を掘るやうにとの命令が出た。

二頭の牝牛と一頭の山羊とは、現場で捉まつて散々横腹を敲かれた。

なほ、イリヤ・イリイーチは兩親の家の大きな暗い客間の夢を見た。其處には、いつも覆布を掛けられた繻製の古風の安樂椅子もあれば、大きくて不細工で堅い長椅子もあつた。それは汚點だらけの色の褪せた空色の天鵞絨張であつた。その外、一脚の大きな革張の安樂椅子もあつた。

冬の長い夜が來た。

母親は兩足を縮めて長椅子に腰掛け、氣懼るさうに子供の靴下を編みながら、欠伸をしたり、時々編針で頭を掻いたりしてゐた。

母親の傍には、ナスターシャ・イワーノヴナとペラゲヤ・イグナチィエーウナとが坐つて、仕事に鼻を突き附けてゐた。それはイリユーシャか父親かそれとも自分達かのお祭着か何かを熱心に縫つてゐるのであつた。

父親は兩手を背後で組み合せながら非常に滿足らしく室の中を彼方此處と歩いてゐる。或は安樂椅子に腰掛ける。暫く腰掛けてゐると、自分の足音に注意深く聞き惚れながら再た歩き出す。それから、煙草の匂ひを嗅ぎ、鼻をかんで再た嗅ぐ。

室の中には、魚油で作つた一本の蠟燭がぼんやりと燃えてゐる。こんなことは、冬の夜か秋の夜にしかないことである。夏の間は、皆寢ることばかり考へてゐるし、起きてゐるにしても、蠟燭がなくとも、晝間の光明で間に合ふからである。

これは、一つは習慣であつたが、一つは經濟からであつた。オブローモフカ村の人々は、手製以外の購入品に對しては極端に吝嗇であつた。

彼等は立派な七面鳥でも、或は一打の雛鷄でも、客が來た時には喜んで殺す。が、乾葡萄が餘つてゐてもそれを食物に入れはしない。お客が勝手に自分の盃に酒を注がうとでもしようものなら、眞蒼になるくらゐであつた

だから、此處ではこんな無作法なことをする者は、皆から一種の狂人と思はれて、相手にされない人だけであつた。が、さう云ふお客なら第一屋敷に入れやしなかつた。

いや、此處の風習は、そればかりではかつた。こゝのお客は、三度勸められなければ、決して何にも手を附けなかつた。お客は最初の勸めが多くの場合、持ち出された食物や酒を玩味するより、寧ろ拒絶して貰ひたいと云ふ願を意味してゐるものであることを良く知つてゐたからである。

どんな人の爲めにも二本の蠟燭を點けると云ふ譯ではなかつた。蠟燭は街で金を出して買ふので、他の購入品のやうに、女主人の鍵で守られてゐた。蠟燭の片さへ、丁寧に數を算へて保存された。

兎に角、こゝの人は金錢を費ふことを好まなかつた。いくら品物が必要でも、必ず非常に惜んで金を出した。それも費用がかゝらないことを條件とした。多額の金を使ふことには、呻吟と嘆息と罵詈とが附き物であつた。

オブローモフカ村の人々は、どんな不便でも喜んで忍ぶことを承知した。金錢を費すことよりも、不便を不便と思はないことに慣れてゐたのである。

だから、客間の長椅子も疾くに汚點だらけになつてゐる。イリヤ・イワノヰチの革張の安樂椅子も、たゞ革張と云ふだけで、實は纖維製か羅製のやうであつた。革はたつた背のところに一個所殘つてゐるだけで、他の部分はもう五年も前から斷々になつて落ちてゐた。だから、門は歪み、階段は搖々してゐるらしい。而もどんな必要な品物の爲にでも、一時に二百留とか三百留とか或は五百留とかの支拂をすると云ふことは、彼等に取つて殆んど自殺のやうに思はれたのである。

で、田舍の若い地主の一人がモスクワへ行つて、一打の襯衣に三百留支拂ひ、靴に二十五留出し、結婚用のチョッキの爲めに四十留も使つたと云ふ話を聞いた時など、オブローモフ老へは十字を切り、顏に恐怖の色を浮べながら早口に言つた。（そんな若者は牢屋にでも打ち込むが可い。）

兎に角、彼等は資本を敏速に活かして流通させることの必要と骨の折れる產業と產物の交換とに關する政治經濟的眞理には疎かつたのである。彼等は單純な心で、資本の唯一の使用法だけを悟つて、それを實行してゐた。それは資本を手箱に入れて置くことであつた。

家の者も出入の訪問者も、客間の安樂椅子に樣々な樣子をして腰掛け、そして鼾をかいてゐた。

主客共に大概は默り込んでゐた。彼等は毎日會ふのである。智識上の寶物はお互に汲み盡し語り盡したが、新らしい事を外部から聞くことは少なかつた。

森然としてゐた。たゞ家の仕事をしてゐるイリヤ・イワノウヰチの重々しい靴音が響くだけであつた。なほ柱時計の振子が、箱の中で微かにカチ〳〵と鳴つてゐた。それから、ペラゲヤ・イグナティエウナか或はナスタシヤ・イワーノウナかゞ、時々手か或は齒で糸を切る音が、深い靜寂を破つてゐた。……

斯うして、時によると三十分間ぐらゐ過ぎる事がある。すると誰かゞ聲を出して欠伸をし、口をもぐもぐさせながら「主よ憐み給へ！」と呟く。

その人に續いて、その隣の人が欠伸をする。それから、次の人が丁度號令でもかけるやうに徐かに口を開ける。斯う云ふ具合に空氣の傳染的遊戯は、皆の肺の中を通過して行く。のみならず、或る者には涙さへ流させる。

でなければ、イリヤ・イワノウヰチは窓の方へ近寄り、戸外を見ながら少し吃驚したやうに言ふ。
「五時になつたばかりだが、もう戸外は暗い！」
「さうですねえ。」と、誰かゞ答へる。「今頃はいつも暗いんです。愈々夜が長くなつて來ましたよ。」
が、春になると彼等は日が長くなるのに驚き喜ぶ。が、何故日が長いのが嬉しいかと訊いても、彼等はそれを知らない。
そして再た默つて了ふ。
が、誰か蠟燭の燃えさしを除けようとして、急に蠟燭を消すと――皆ぶる〳〵と身慄をする。
「無調法なお客さんだ！」と、誰か必ず言ふ。
どうかすると、その時話が妙にこんがらかることがある。
「そのお客と云ふのは誰のことです？」と、女主人は言ふ。「ナスターシヤ・ファドデーウナぢやなくつて？どうか、さうだといゝが！　いや、さう、さう、彼女はお祭頃に來やしないのだつたね。來て呉れると嬉しいんだが！　さうすれば彼女と二人で抱き合つて、たんと泣くんだが！　朝の祈禱や聖餐式にも一緒に行くし……それから何處へ行かう！　私はこんなに若いんだもの、頑固なことを言はなくつても可い！」
「だが、彼女は何時此處から歸つたんだ？」と、イリヤ・イワノウヰチは訊いた。「イリヤの日が濟んでからぢやなかつたかねえ？」
「あなた、何を言ふんです、イリヤ・イワノウヰチ、いつもとんちんかんなことばかり言つて！　彼女は聖靈降臨祭の前に歸つたんですよ。」と、細君は訂正した。
「でも、彼女はピョートル祭には此處に居つたと思ふが。」と、イリヤ・イワノウヰチは反對する。
「あなたは何時もそんな調子ね！」と、細君は詰るやうに言つた。「言ひ爭つても、あなたが敗けです。」
「でも、どうしてピョートル祭に居らなかつたと言ふんだ？　その時まだ矢つ張り茸入のパンを燒いてゐたぢやないか、彼女の好きな……」
「それはマリヤ・オニシモーウナですよ。彼の女は茸入のパンが大好きなんです……もう忘れたのですか！それにマリヤ・オニシモーウナはイリヤの日までぢやなく、ブロホルとニカノルの記念日まで居つたんです。」
彼等はお祭や季節や家庭の仕來りに從つて時日の計算をしてゐるのである。だから決して、何月何日などとは言はなかつた。これは一つにはオブローモフ以外の他の者達も皆月々の名稱や日數の順序を取り違へてゐた爲めらしい。
イリヤ・イワノウヰチは敗けたので默つて了ふ。一座の者は、皆再た假睡に耽り出す。イリユーシヤも母親の背中に倚りかゝつて居眠つてゐる。時によると、すつかり眠つて了ふこともある。
「さう、さう。」と、やがてお客の中の誰かゞ、深い溜息を吐きながら言ふ。「あの、マリヤ・オニシモーウナの亭主のワシーリイ・フオミーチは、全く達者な男だつたが、死にましたよ！　六十歳も越さなかつたのに、あんな男は百歳までも生きられるものだが！」
「神樣が御召しになる時には、誰でも皆死にますよ！」と、ペラーギヤ・イグナティエウナは溜息を吐き

ながら反對する。「死ぬ者もあるが、フロボフさんのとこなんか、洗禮を受けさせるのが間に合はない程でね。アンナ・アンドレーウナさんが再た生んださうぢやありませんか――これでもう六人目ですよ。」

「アンナ・アンドレーウナだけぢやないわ！」と、女主人は言つた。「あれの兄弟が結婚をして、大勢の子供を生むでせう――また心配が大變です！　小さい者は大人になつて、矢張り花婿になるし、其處に娘達をお嫁にやるでせう。けれど今花婿は何處にゐるでせう。今時の者は皆持參金を望みますからねえ。何でもお金で……」

「何のお話ですね？」と、イリヤ・イワノウヰチは話し仲間の方へ近づきながら訊いた。

「斯う云ふ話ですよ……」

イリヤ・イワノウヰチに話を繰り返して聞かせる。

「それが人生ですよ！」と、イリヤ・イワノウヰチは誠めるやうに言ふ。「一人が死に、一人が生れ、そして一人が結婚する。そして俺達は段々年をとる。一度過ぎた年も、一度過ぎた日ももう歸つて來やせん！　何故だらう？　毎日は昨日のやうに、昨日は明日のやうにとは行かない！……考へて見りや情ないことだ……」

「年寄は年をとるし、若い者は大きくなる！」と、誰か隅で眠さうな聲で言つた者がある。

「神樣にお祈をして、何も考へないがいゝ！」と、女主人は嚴肅な語調で言ふ。

「全くだ、全くだ。」と、イリヤ・イワノウヰチは速口で悸々と答へる。彼は哲學を考へ耽りながら、再た彼方に行つたり此方へ來たりしてゐる。

再た長い間沈默が續く。たゞ、針で眞表に突き通される糸の軋るやうな音だけが聞える。時々女主人が沈默を破る。

「ほんとに戸外は暗いことね。」と、彼女は言ふ。「さあ、もうお祭を待つだけだわ。お祭が來れば面白くなる。晩の過ぎるのが分らないだらう。マラニヤ・ペトローウナが來れば、大巫山戲が始まるわ！　彼女は何でも工夫しますからねえ！　鉛を鎔かしたり、蠟を煮たり、門の外へ駈け出したりして。うちの女中達まで笑ひ出して了ふんです。種々な遊びを考へ出して……そりや面白いんですよ！」

「ほんとに、世慣れた奥さんですよ！」と、話し仲間の一人が言ふ。「一昨年なんか彼の女は山から辷り降りたりして、ルカ・サウウヰチさんが眉に傷をしたくらゐです……」

皆急にぶる〳〵と身慄して、ルカ・サウウヰチを見た。そしてハツハツハツと笑ひこけた。

「お前さん、どうしたんだ、ルカ・サウウヰチさん？　さあ、さあ、話した！」と、イリヤ・イワノウヰチも言つて、笑ひこける。

皆笑ひ續ける。イリユーシヤも目を醒して笑ふ。

「でも、何を話すんです！」と、ルカ・サウウヰチはおど〳〵しながら言ふ。「そんなことは、皆アレクセイ・ナウムイチの作り話ですよ。そんなことは全然ありやしない！」

「へえ！」と、皆同時に彼に合槌を打つ。「そんなことはない？……俺達は生きてゐるんだからね……その額さ、額さ、それ今でも傷が見えてゐる……」

皆ハッハッハッと笑ふ。

「どうしてお前さん達は笑ふんです？」と、ルカ・サウウキチは笑の斷れ目に言はうとする。「俺は……そんなこたアありませんよ……皆ワーシカの泥棒奴が……古い小槌を盗みやがつて……彼の女達は俺の下を辷つてゐたんだ……俺はそれを……」

一同の笑聲は、彼の聲を消して了ふ。彼は自分が槌から落ちた歴史を頻りに辯解しようとする。笑聲は一座を動かして、玄關の間や女中部屋まで聞える。家全體を覆うて了ふ。一同はその滑稽の時を思つて、長い間笑ふ。オリンピヤの神々のやうに親しく、「何も言はずに」笑ふ。漸く默りかけると、誰かゞ再た合槌を入れる。そして笑ひ續ける。

遂に辛つとのことで皆は靜かになる。

「どうだ、こんどもお祭に辷るかね、ルカ・サウウキチさん？」と、暫く默つてゐたイリヤ・イワノウキチは訊いた。

再た皆ドッと笑ふ。その笑ひは十分間も續く。

「アンティプカに齋中に雪の山を造るやうに言附けたらどうだらう？」と、オブローモフは再た突然に言ふ。

「ルカ・サウウキチさんは辷るのが大好きなんだから、先生、辛抱出來まいて……」

一座の笑聲の爲めに、オブローモフは言ひ了ることが出來ない。

「その例の……小槌はまだありますかね？」と、一人の話相手は笑ひながら辛つと言ふ。

再た笑ふ。

皆長い間笑ふ。終ひに次第に靜かになる。或る者は涙を拭く。或者は鼻をかむ。或者は恐ろしい咳をしたり、唾を吐いたりする。そして辛つと斯う言ふ。

「あゝ、あゝ！　痰で呼吸がつまりさうだつた……あの時は散々に笑はせられたものだ。本當に。全く罪だよ。背中を上に向け、上衣の裾をばら〳〵にして……」

すると、最後の高笑が長く長く續く。それから皆默つて了ふ。或者は溜息を吐き、或者は大聲に何か言ひ足しながら欠伸をし、そして一同沈默する。

前の通りに、時計の振子の音とオブローモフの靴の音と糸を噛み切る微かな音とが聞える。

俄かにイリヤ・イワノウキチは鼻の先を摘みながら、吃驚したやうな樣子をして室の眞中に立ち止る。

「困つたことだ！　これ、この通りだ」と彼は言ふ。「死人が出來るかも知れない。俺の鼻先が痒いから……」

「あら、まあ！」と細君は手を拍つて言ふ。「鼻の先が痒い時は、死人ぢやないんですよ！　死人の時は、鼻柱が痒いんです。イリヤ・イワノウキチ、あなたはほんとに忘れつぽい人ですねえ！　そんなことを人中か、お客に行つた時にでも言つて御覽なさい――恥かしいぢやありませんか。」

「ぢや、鼻先が痒いのは何の意味だ？」と、イリヤ・イワノウキチはきまり惡さうに訊く。

「お酒が飲めるんですよ。死人が出るなんてことがありますか！」

「すつかり取り違へてゐた！」と、イリヤ・イワノウキチは言ふ。「鼻の側が痒い時とか、先の方が痒い時と

か、眉が痒い時なんかと、一々憶えてゐられるもんか……」

「鼻の側が痒い時は、」と、ペラギヤ・イワーノウナが話を受け取る。「音信がある。眉が痒い時は、悲しいことがある。額が痒いと、謝罪るやうなことがある。それが右の方なら男に左の方なら女に。耳が痒いと雨に遇ふ。脣が痒いと接吻をする。口鬚が痒いと、貰ひ物を食べる。肱が痒いと、新らしい處に寢る。足の甲が痒いと、旅行をするんですよ……」

「さうか、ペラゲヤ・イワノーウナはなか〳〵偉い！」と、イリヤ・イワノウヰチは言ふ。「だが、バタが安價くなる時には、頭の後部か何處かゞ痒いのだつたねえ……」

婦人達は笑つたり、べちや〳〵と饒舌つたりし始める。男の中の或人達も莞爾とする。再た笑が破裂しようとする。が、丁度その時、室の中に、犬が唸るやうな、また猫が噴嚏をしようとする時のやうな唸聲が一寸響く。これは時計が鳴つたのである。

「おゝ！　もう九時だ！」と、イリヤ・イワノウヰチは吃驚したやうに嬉しさうな聲を出す。「どうです、何時の間にか時間が經つて了つた。おい、ワーシカ、ワーニカ、モーティカ！」

眠さうな三人の顏が現はれる。

「お前達はどうして御馳走の支度をしないのだ？」と、オブローモフは吃驚したやうに、そして又悲しさうに訊く。「どうしてお客のことを考へないのだ？　何故立つてゐる？　速く火酒を持つて來い！」

「そら、だから鼻の先が痒かつたのよ！」と、ペラギヤ・イワノーウナが元氣よく言ふ。「火酒を飲むし、盃

を見るでせう。」

晩餐が濟むと、皆接吻をしたり、お互に十字を切つたりして、各自の寢床へ散る。睡魔が暢氣な頭を支配する。

イリヤ・イリイーチが夢で見た斯う云ふ日と夜とは、たつた一回や二回ではなく、何週間何箇月何箇年と云ふ間のことであつた。

單調な斯う云ふ生活を破るものは、何もなかつた。オブローモフカ村の人達自身も、斯う云ふ生活を迷惑に思はなかつた。これ以外の生活狀態を想像しなかつたからである。たとへ想像しても、恐怖を感じてその想像から遁げ出すに違ひない。

彼等は他の生活を望みもしまい。また好きにもなるまい。若し或る事情によつて彼等の生活狀態に變化が來れば、その變化がどんなものであつても、彼等はそれを悲しむに違ひない。たとへ明日が今日と異なり、明後日が明日と異つても、彼等は憂悶の浸潤を感ずるに違ひない。

他の人達が望む樣々な變化と偶然とは、彼等に何の役に立つだらう？　他の人達はこの盃を飲むが可い。たゞ彼等オブローモフカ村の人達にとつて、そんな盃は一向無關係である。他の人達は自分の好きなやうに生活するが可い。

たとへ何か利益があつても、偶然は不安なものである。偶然は繁忙と勞苦と奔走とを求める。一つ處に坐らずに、商賣をしたり、手紙を書いたり、一口で言へば、あたふたとしなければならぬ。堪つたゝのぢや

ない！

彼等は何十年間となく居睡をしたり、鼻を鳴らしたり、欠伸をしたり、田舎流の滑稽を言つてお目出度い笑を漂はせたりすることを續け、或は一團に集まつて、誰かゞ夜中に見た夢のことまで物語つてゐた。

若し怖ろしい夢でも見ると――皆その意味を考へて、眞面目に怖がつた。若し豫言的な夢でも見ると――皆その夢の悲しさや喜ばしさに應じて、正直に喜んだり、悲しんだりした。夢が或る暗示の實行を求めると、直ぐに彼等はこれが爲めに實行の方法を講じた。

でなければ、皆な馬鹿遊戯をしたり、トランプをしたりする。お祭毎にはお客とボストン遊戯（骨牌）をする。また判じ物並べをして、ハートのキングやクラブのジャックで結婚の占ひをする。

時によると、ナターリヤ・フアドデーエウナか誰かゞ一週間も二週間もお客に來る。先づ老婆達は誰はどんな暮し方をしてゐるとか、誰はどうしてゐるなどゝ土地中の紹介をする。彼等は家庭の狀態や內幕の暮し向にまで立入るばかりか、一人々々の祕密の考へや計畫などにまで突き込み、心の中まで察して、不都合な百姓を、殊に不忠實な百姓を罵つたり、惡口したりした揚句、聖名祭とか洗禮日とか誕生日などの種々な場合を擧げて、誰は何を御馳走したの、誰を呼んで誰を呼ばなかつたのと吹聽する。

そんな話に疲れると、新調品や衣服や外套から下袴（スカート）や手袋までを見せ始める。女主人は手製のリンネルや糸やレース糸の自慢をする。

が、それも盡きると、こんどは珈琲やお茶やジャムなどの御馳走が始まり、次には皆もう默つて了ふ。

お互に顏を見合ひながら、彼女等は長い間腰掛けてゐる。時々重苦しさうに何事かの爲めに溜息を吐く。どうかすると、誰か泣き出したりすることがある。

「お母さん、お前どうしたんだね？」と、一人の老婆が驚いて訊く。

「あゝ、でも悲しいんだもの！」と、女の客は重苦しい溜息を吐きながら答へる。「私は馬鹿なことをして、神樣を怒らせて了つたんだよ。碌なことはあるまいよ。」

「でも、何も吃驚したり、怖がつたりすることはないわ！」と、女主人は遮ぎる。

「さう、さう。」と、女主人は續ける。「世も末になつて、民は民を滅ぼし、國は國を滅ぼし……愈々世界の終が來るんです！」と、終にナターリヤ・フアドデーウナが言ひ、遂々二人でさめざめと泣く。

ナターリヤ・フアドデーウナがこんな結論をするのには、何の根據もなかつた。誰が誰を攻めたと云ふやうなこともなかつた。彗星さへもその年は現はれなかつた。けれども、老婆達はどうかすると斯うした暗い豫感を持つことがある。

斯うして時を送つてゐるうちに、時によると、何か過失（あやまち）が出來て、例へば家中の者が大人も子供も皆な炭酸瓦斯に醉つて、頭痛を訴へ出すこともあつた。

他の病氣は家でも村でも殆んど聞かなかつた。たゞ誰かゞ暗闇の中で棒杭か何かに衝突（ぶつかり）つたとか、積草の上から落ちたとか、屋根から板が落ちて來て頭に衝突つたと云ふくらゐのことであつた。

が、斯うした出來事さへ滅多になかつた。斯う云ふ過失には、家傳の療法が用ひられた。傷口を水苦か草

の葉で拭き、負傷者に聖水を飲ませるか、祈禱をするかすれば、それですつかり癒るのであつた。

が、瓦斯に醉ふことはよくあつた。さう云ふ時には皆な閉ぢ切つて寢床に就いてゐる。呻き聲や唸り聲が聞える。或者は頭の周圍に胡瓜を置き、その上を手拭で縛つてゐる。或者は兩方の耳に苺を入れて、山葵の匂を嗅いでゐる。或者は襯衣一枚を着て寒い戸外へ飛び出す。或者は感覺を失つて、床の上に倒れてゐる。

こんなことは時期を定めて毎月一回若くは二回くらゐづゝあつた。それは、彼等が暖かい空氣を無駄に煙突から出して了ふのを惜んで、まだ煖爐の中に（惡魔ロベルト）にあるやうな火が斷け廻つてゐるうちに煙突を閉めるからであつた。で、寢煖爐にも煖爐にも手を觸けられなかつた。それを見ただけで水泡が飛び出すのであつた。

或る時、彼等の單調な生活狀態が、斯うした過失で破られたことであつた。

皆な骨の折れる晝餐の後に一休みしてお茶に集まつてゐると、俄かに街から歸つたオブローモフ家の百姓が遣つて來て、衣匣から何か出さうとしてゐたが、辛つとのことで皺くちやになつた一本の手紙を取り出した。それはイワン・イワノウヰチ・オブローモフに宛てたものであつた。

皆な呆氣にとられてゐた。女主人は顏色さへ少し變へた。皆な眼を見張り、鼻を手紙の方へ差し伸べた。

「どうしたんだえ！　誰から頼まれたんだえ？」と、奥さんは遂々我に歸つて言つた。

オブローモフは手紙を手に取り、不思議さうにそれを手の中でぐるぐると廻しながら、どうしたらいゝかと考へた。

「一體、何處から持つて來たんだ？」と、彼は百姓に訊いた。「誰がお前に渡したんだ？」

「街のある屋敷で俺が商ひをして居りやすとねえ、且那樣、」と、百姓は答へた。「するとね、郵便局から二度も來やして、オブローモフ家の百姓はゐないか、且那に手紙があるが、と斯う訊きやすだ。」

「それで？……」

「それで、俺最初の間隱れてたんで、兵隊は手紙を持つて歸りやしたよ。ところが、ウェルフリューウォ村の補祭樣が俺を見附けて、局へ知らせたゞ。それで再た遣つて來て、怒鳴りつけて、手紙を渡して、その上五哥もぶつたくり、これをどうするだ、何處へやるだと訊ねると、且那樣へ渡せと言ひやしただ。」

「でも、お前は受け取らなけりやいゝぢやないか。」と、奥さんは腹立たしさうに言つた。

「俺受け取らなかつただよ。俺に手紙が何になりやすべえ――俺には要りましねえだ。罰で俺を脅かさなけりや手紙を受け取りましねえだが、お前えさま、手紙を突き返して見ねえ、兵隊がひでえこと言つて怒鳴りやすだ。お上に訴へると言ひやすだ。で、俺受け取りやしたゞよ。」

「馬鹿ねえ！」と、奥さんは言つた。

「誰から來たんだらう？」と、オブローモフは差出人の筆蹟を見ながら不思議さうに言つた。「字には、全く見覺えがあるが！」

手紙は手から手に渡つた。種々な解釋や推察が始まつた。誰が何を言つて來たのだらう？　終には皆な分らなくなつた。

イリヤ・イワノウヰチは眼鏡を捜させた。眼鏡を一時間半くらゐ捜して、それをかけると彼はもう手紙を開封しようと考へた。

「お止しなさいよ、イリヤ・イワヌイチ、」と、彼の妻は怖ろしさうに彼を止めた。「どんな手紙だか分りやしませんからねえ。何か怖ろしい災難に會ふかも知れませんよ。今時の人は油斷がなりませんから！　明日か明後日でもいゝぢやありませんか——手紙が逃げて行きやしまいし。」

手紙と眼鏡とは、箱の中へ隱されて、鍵を下された。皆なお茶を飲み始めた。この手紙は斯うして、若し非常な出來事でもなければ、そしてオブローモフカ村の人達の頭を刺戟するやうな事が起らなければ、其處に何年間でも入つてゐるに違ひない。翌る日のお茶の時にも、手紙の話が始まつた。

四日目に遂々辛抱し切れなくなつたので、大勢集まつて悸々と手紙を開封した。オブローモフはその署名を見た。

「（ラディシチェフ）と、彼は讀んだ。「何だ！　これはフィリップ・マトウェーイチから來たんだ！」

「おや、それは珍らしい人から來たものだ！」と、四方から言つた。「彼の男はまだ生きてゐたのかな？　まだ死なゝかつたんだ！　まづ目出度いことだ！　何を書いてよこしたんだらう？」

オブローモフは聲を出して讀み始めた。フィリップ・マトウェーウヰチが書いてよこしたことは、麥酒の調合書を送つて呉れと言ふのであつた。オブローモフカ村では非常に上手に麥酒を醸つたからである。

「送つてやるがいゝ。送つてやるがいゝ！」と、皆な言つた。「手紙を書くがいゝ。」

斯うして二週間過ぎた。

「手紙を書かなけりやならん！」と、イリヤ・イワノウヰチは言つた。「調合書は何處にあるんだ？」

「何處でせう。」と、妻は答へた。「捜さなけりや分らないのです。まあ、お待ちなさいよ。そんなに急がなくつてもいゝぢやありませんか。も少しして、お祭を待つて、肉を食べるやうになつてから書いても遲くはありませんよ……」

「全くだ、お祭のことを書いた方がいゝ。」と、イリヤ・イワノウヰチは言つた。

お祭になると、再た手紙の話が出た。イリヤ・イワノウヰチはこんどこそ書かうとした。彼は書齋に入つて眼鏡をかけ、そして卓子に向つて腰掛けた。

家の中には深い靜寂が滿ちた。皆な足音を殺してたり、騒いだりすることを禁じられた。「旦那が手紙を書いてゐるんだ！」と、皆なは、家に死人があつた時のやうに、慎み深い悸々した聲で言つた。

彼が手を慄はせながら徐々と、何か危險なことでもするやうに用心をして、丁度（拜啓）と金釘流に書いた時に、彼の妻が入つて來た。

「捜しても、捜しても——調合書はありません。」と、彼女は言つた。「なほ寢部屋の戸棚を捜して見なけりや。だが、どうして手紙を送りますか？」

「郵便でやるさ。」とイリヤ・イワノウヰチは答へた。

「あそこまで幾哥かゝるでせう？」

オブローモフは古い年鑑を取り出した。

「四十哥だ。」と、彼は言つた。

「四十哥ゐ詰らないことに棄てるんですねえ！」と、彼女は言つた。「一層、も少し待つたらどうでせう。街からあそこへ行く幸便があるかも知れませんよ。百姓達に氣をつけるやうに言ひ附けて置いたらいゝでせう。」

「實際さうだ。幸便で送つた方がいゝ。」と、イリヤ・イワノウヰチは答へた。そしてペンで卓子をポンと敲き、ペンをインキ壺へ突き込んで眼鏡をはづした。

「全くさうするがいゝ。」と、彼は決めた。「まだ遲くはない。間に合ふだらう。」

フィリップ・マトウェーウヰチが調合書を待つてゐたかどうかは分らない。

イリヤ・イワノウヰチはどうかすると、書物を手にすることがあつた。彼にはどんな書物でもよかつた。彼は讀書が人間の根本的要求であることを疑はなかつた。が、同時に彼は書物を贅澤品だと思つてゐた。丁度壁に額が懸つてゐてもゐなくてもいゝやうに、また散歩に行つても行かなくてもいゝやうに、讀書もしてもしなくても一向差支のない仕事であるやうに思つてゐた。だから、彼にはどんな書物でも同じであつた。彼は書物を薦さ晴らしの爲めか、退屈凌ぎか、それとも無駄事かに用ひられる品物と同じやうに見てゐたのである。

「久しく書物を讀まなかつた。」と、彼は言ふ。時によると文句を變へて、「さあ、書物でも讀まうか。」と言ふ。或は兄から讓られた僅かな書物が積んであるのを偶然にチラリと見るやうなことがあると、何でも構はず手當り次第にその一册を引き抜く。彼の手に入つた書物がゴリコフであらうが、最近の解夢者」であらうが、ヘラスコフの「ロシヤーダ」であらうが、スマローコフの悲劇であらうが、或はまた三年前のであらうが――何でも彼は同じ滿足を感じながら讀む。そして時々こんなことを言ふ。

「どうだ、何を考へてるんだ！　何と云ふ盜賊だ！　あゝお前の言ふことは空論だよ！」

斯う云ふ叫び聲は著者に浴せられたもので、名前などは彼の眼から見ると、何の尊敬にも價しないものであつた。彼は舊時代の人達が抱いてゐた著作に對する輕蔑をさへ持つてゐた。だから彼は、多くの人達と同じやうに、たゞ著作者を藝人の一類、つまり道樂者、放蕩者、醉漢、幇間と思つてゐた。

時によると、彼は三年前の新聞を朗讀して皆なに聞かせたり、或は皆なに近況を敎へたりすることがある。

「こんなヘーグ通信がある。」と、彼は言ふ。「エ・ヴエ王は暫く旅行してゐたが、無事に宮殿に還啓されたとある。」そして斯う言ひながら眼鏡越に聞いてゐる皆なの顏を見る。

或は、

「ウヰンナ駐劄の某々公使は國書を捧呈したさうだ。」

「あゝ、此處にはこんなことが書いてある。」と言つて彼は更に讀む。「ヂヤンリス孃の著書が露西亞語に飜譯されたさうだ。」

「それを飜譯したのは大方、」と、聞き手の中の一人で、小地主が言ふ。「我々貴族仲間の金を誤魔化す爲めだらう。」

けれども、可哀相なイリエーシヤはシトーリツのところへ學問に行く。彼は月曜日に眼を醒すと、もう悲みに襲はれてゐる。彼は階段からワーシカが金切聲で叫んでゐるのを聞く。

「アンティーブカ、馬車の支度をして呉れ、小旦那を獨逸人のとこへお連れ申すんぢや！」

彼の心臓は慄へる。悲みに沈んだ彼は、母親のところへ行く。母親はイリユーシヤが何の爲めに來たかを知つてゐる。彼女はまる一週間イリユーシヤと別れなければならぬことを思ひ、竊かに溜息を吐きながら、丸藥の鍍金を始める。

その朝、イリユーシヤに御馳走をすることは大變なものである。彼の爲めに丸パンやビスケットを燒く。鹽漬や菓子やジャムや乾菓子や蒸菓子やその他の食糧品までも彼に附けて遣る。それは、獨逸人のところでは、滋養になる物を食べさせないだらうと思ふからである。

「彼處へ行くと、十分に食べられまい。」と、オブローモフ家の人達は言ふ。「お書餐にはソップとビフテキと馬鈴薯くらゐで、お茶の時にはバタで晩餐の時には〈モルゲン・フリー〉くらゐのものだらう――たまらない。」

殊に、イリヤ・イリイーチは馬車の支度をさせるワーシカの聲が聞えないやうな月曜日のことを一番多く夢見る。その朝は、母親がお茶の時に莞爾々々しながら彼を迎へて、愉快なニュースを知らせる。

「今日は行かないでもいゝよ。木曜日が大きなお祭だから、三日の間に行つたり來たりしても詰らないから。」

或は、時によると俄かにイリユーシヤに斯う言ふ、

「今日から先祖の週間だから――勉強をしなくつてもいゝ。油揚のパンでも燒きませうねえ。」

でなければ、母親は月曜日の朝凝つとイリユーシヤを視詰めて言ふ、

「どう云ふ譯か、お前の眼は今日は曇つてる。加減が惡くはありませんか？」そして頭を振る。

狡い子供は、何ともないのだけれども默つてゐる。

「この週間は家にゐなさい。」と、母親は言ふ。「彼處へ行つても――何にもなりやしない。」

で、家の者は皆な、學問と先祖の土曜日とは、決して衝突り合ふべきものでないとか、或は木曜日のお祭は、まる一週間の勉強をさせない闘であるなどゝ言ふやうな信念を有つて了ふ。

小旦那を見る下男や下女でさへ、時によるとこんなことを言ふことがある。

「ほー、甘つ垂れさん！　何時獨逸人のとこへ行くんだね？」

或る時など、一週間の中頃か初め頃に、突然獨逸人のところへアンティーブカが例の馬車でイリヤ・イリイーチを迎へに來る。

「マリヤ・サウェーシナ樣、或はナタリヤ・フアデーウナ樣、或はクゾーフコフ樣がお子樣達と一緒にいらつしやいましたから、家へお歸り下さい！」

イリユーシヤは三週間くらゐ家の客になつてゐる。が、さうするともう受難週間まで間もない。さうするとお祭がある。さうすると家族の誰かゞ何故か、フォマの週間までは勉強するものではないと決める。夏まで　では二週間しかない。行く必要はない。夏になると、獨逸人も休むだらうと云ふので、一層のこと秋まで延して了ふ。

斯うしてイリヤ・イリイーチは半年くらゐ遊ぶ。そして此の時分に彼は非常に生長する！　非常に肥る！　非常によく眠る！　が、土曜日に稀逸人のところから歸つて來た時には、子供が痩せて蒼白めてゐたと言つて、家では誰もこれに滿足しない。

「罪だ！」と、父親と母親とは言ふ。「學問は逃げて行くものではないが、健康は買ふことが出來ない。健康は人の一生で一番大事なものだ。あの通り、彼が勉强をして歸ると、病院からでも歸つたやうだ。あんな肥つた子が、すつかり痩せて了ふんだから……ほんとにまだ惡戯時で、駈け廻つてゐたいのだ！」

「さうだ。」と、父親は言ふ。「勉强は合はないのだね。山羊の角を折るやうなものだ！」

斯うして優しい兩親は、子供を家に止めて置く口實を始終搜してゐる。口實はお祭でなくても何でもある。冬は寒く夏は暑くて行けない。時によると雨が降る。秋には雪や霰が降ることも口實になる。どうかすると、アンティープカが何故か疑はしく見えることがある。彼は醉つてゐるのか醉つてゐないのか分らないが、兎に角、何故か怖ろしい眼附で見てゐる。災難がないにしても、何處かで彼は口論をしたり、喧嘩をしたりしさうである。

而もオブローモフ家の人達は、自分達の眼にも此の口實が道理に見えるやうにする。殊に、シトーリツの眼に道理と映ずるやうに努力する。シトーリツは決して甘えることを許さぬ嚴格家であつた。

プロスタコフやスコティーニンなどの時代は、疾くに過ぎ去つた。「學問は光にして、無學は闇なり」と云ふ諺は、古本商人が持つて來た書物と一緒に村々に擴がつた。

老人達は文明の利益を知つたが、それもたゞ外部の利益だけであつた。彼等は皆なが人々の間に伍するやうになつたこと、つまり官位も十字章も金も學問によらなければ獲られないことを見た。古い書記や、事務に虐げられ、舊い習慣と規則と原則との中で年老いた事務家が、段々役に立たなくなつて來たことをも知つた。

文字の智識だけでは足りない、今迄聞いたこともないやうな他の學問も必要であると云ふ不吉な噂が傳はるやうになつた。九等官と八等官との間には、一つの深淵が開け、その深淵の橋は卒業證書であつた。

舊い役人や習慣い子や收賂の寵兒などは、次第に跡を斷つやうになつた。まだ死なない多くの者は、不良分子として追放され、他の者は法廷に引き出された。一番幸福であつた者は、物事の新らしい制度に對して片手を振りながら、好都合な時機に甘く占めた自分の隅へ逃げ込んだ者であつた。

オブローモフ家の人達はこれを悟つた。また教育の利益をも理解した。が、併しそれはたゞ露骨な利益の方だけであつた。彼等は學問の內的要求と云ふことに就いては、漠然とした考へを有つてゐるに過ぎなかつた。だから、彼等は矢張りイリューシャの爲めには、光輝ある特權を得たいと思つてゐたのであつた。

彼等はイリューシャの爲めに刺繍をした制服を空想し、彼の國會議員を想像した。母親などは、縣知事になることまで想像してゐた。が、彼等は斯う云ふものを出來るだけ安價に、種々な狡猾な方法で手に入れ、教育や名譽の路上に投げ出されてゐる石塊や障碍物を竊かに迂廻し、苦勞なくそれを飛び越えたいと思つてゐた。例へば、餘り勉强せずに、心身を悲しませずに、子供の時分に得た祝福された肉附を失はずに、そし

て豫定された形を保存したまゝ、イリユーシヤが「凡ての學問と凡ての技術」とを習得したと云ふ證書を得たいと思つてゐた。

斯う云ふオブローモフの教育方針は、シトーリツの方針とひどく衝突するものであつた。兩方は激しく爭つた。シトーリツは眞直ぐに露骨に、そして頑固に相手を言ひ敗かしたが、相手の方は先に言つた狡猾手段やその他の手段でシトーリツの攻撃を避けてゐた。

勝敗はどうしても決しなかつた。獨逸人の執拗がオブローモフ家の人達の頑固と强情とに勝ちさうなものだが、獨逸人の方にも面倒なことがあつたので、勝利は孰れとも決らなかつたのである。その面倒な事と云ふのは、シトーリツの息子がオブローモフを甘やかして、彼に竊つと日課を教へたり、彼の代りに譯を付けてやつたりしたと云ふことであつた。

イリヤ・イリイーチは家庭の有樣やシトーリツの所にゐた時分の生活を判然と夢見た。

彼が自分の家で眼を醒すと、彼の蒲團の傍にはもうザハールが立つてゐた。後の彼の有名な從僕ザハール・トロフィムイチである。

ザハールは乳母がしたやうに、彼に靴下を穿かせたり、靴を穿かせたりした。が、もう十四歳にもなつたイリユーシヤは、横になつたまゝ、ザハールに交る〴〵兩足を差し出すことしか知らなかつた。そして少しでも穿かせ方が氣に喰はぬと、足をザハールの鼻先に突きつけるのであつた。

若し不滿なザハールがそれを訴へようと考へようものなら、彼はなほ年上の者達から木片のお見舞を受けるのである。

それから、ザハールは頭を掻き、イリヤ・イリイーチの機嫌を害はないやうに、用心しながら彼の手を袖に通して上衣を着せる。そして朝起きたら顏を洗つたり、種々なことをしなければならぬと言ふ。

イリヤ・イリイーチは何か欲しいと思へば、たゞ一寸瞬きをすればいゝ。さうすれば、四五人の下男共が彼の希望を實行する爲めに駈け廻る。彼が何かを落しても、自分でそれを拾ふに及ばない。何か足りないものがあつても、自分でそれを持つて來なくても、それを取りに駈け出さなくてもよい。どうかすると彼は身輕い子供のやうに、自分で駈け出し、自分でそれを爲ようとすることがある。が、そんな時には、父親と母親と、それから三人の叔母との五つの聲が叫ぶ。

「どうするの？　何處へ行くの？　そら、ワーシカ、そら、ワーニカ、そら、ザハールカ、何をしてゐる？　オイ！　ワーシカ！　ワーニカ！　ザハールカ！　お前達は何を見てゐるんだ？　間抜奴！　速くしろ！……」

斯う云ふ具合に、イリヤ・イリイーチは自分のことを自分ですることが出來なかつた。

終に彼は、自分でしない方が餘程樂だと云ふことを知つて、怒鳴り方を覺えた。

「おい、ワーシカ！　ワーニカ！　あれをお呉れ、これをお呉れ！　それは厭だ、これをお呉れ！　駈けて行つて持つて來い！」

程なく彼は兩親の優しい配慮にも飽きた。

彼が階段や屋敷内を走つてゐると、彼の背後には十人くらゐの絶望的な叫び聲が聞える。「あゝ、ああ！

止めて呉れ、止めてお呉れ！　倒れて怪我をする……待て、お待ちよ！」

彼が多などに玄關に出ようとか、或は通風口を開けようとか思ふと、再た叫び聲が聞える「アラ、何處へ行くの？　どうして開けられるものか？　走つちやいけない。出ちやいけない。お開けでない。危ないよ。感冒をひくよ……」

斯うして溫室の中にある外國の小花のやうに甘やかされたイリューシャは、迷惑ながら家の中にばかり入つてゐた。そして硝子の中で徐々と元氣なく生長したのである。外部へ出ようとする力は、內部に向ひ、何の活氣もなく萎れて了つた。

が、時によると、彼は眼を醒して非常に元氣ゝ爽快と愉快とを感ずることがあつた。彼は自分の中で何かが戲れたり、沸騰したりしてゞもゐるやうに感じた。丁度惡魔にでも憑かれて、その惡魔が彼を怒らせたり、彼を屋根に上らせたり、葦毛の馬に乘つて枯草を刈つてゐる草場へ駈け出させたり、或は塀の上に馬乘をさせたり、村の犬をけしかけさせたりするのかとさへ思はれた。さう云ふ時には、彼は急に村中を駈け廻つたり、それから谷路を走つて野原へ行つたり、樺林に行つたり、二三度跳ねて窪地の底へ駈け込んだり、子供達と一緒に雪投げをして自分の力を試したりしたくなるのであつた。

惡魔は斯うして鍛錬する。彼は丈夫になる。終には凝つとしてゐられない。で、多でも帽子を被らず、俄かに階段から飛び降りて屋敷に出る。其處から門の外へ飛び出す。兩手に雪の塊を抱へて子供の群の方へ駈けて行く。

爽やかな風が、彼の顏を切るやうに吹く。寒氣が彼の耳を引き千切るやうである。口と喉へ冷たい空氣が流れ込む。彼の胸は喜びに充ち、――彼は足の向く方へ駈け出す。そして自分も叫んだり、大聲に笑つたりする。

其處には、大勢の子供がゐる。彼は雪を投げる――が、當らない。熟練してゐない。が、もつと雪を取らうとする途端に、彼の顏には大きな雪の塊が衝突る。彼は倒れる。慣れないので、彼は痛みを感ずる。しかし愉快で、彼はハッハッと笑ふ。彼の眼には涙が浮んでゐる……

家の中では、大騷ぎである。イリューシャがゐないのだ！　叫び聲と、騷ぎ聲が聞える。ザハールカは屋敷に駈け出る。彼に續いてワーシカもミーティカもワーニカも皆な夢中になつて屋敷の中を駈け廻る。

彼等に續いて、その衣服の裾を咬へながら二匹の犬が駈ける。犬は周知の如く、走る人を冷淡に見遁すことの出來ない者である。

人々は叫んだり泣いたりしながら、犬は吠えながら、村ぢうを駈け廻る。

遂々子供達のところへ駈けつけて、正當の裁判を始める。或る子供の頭髮を引きむしり、或る子供の耳を引つ張り、或る子供の頸筋を摑んだ揚句、彼等の父親をも引き出して嚇す。

それから小且那を捉へ、持つて行つた革囊で包み、それから父親の毛革の外套で包み、なほ二枚の蒲團に包んで、悲しく手に抱いて家に連れて來る。

家の者達は、彼が死んだものと思ひ、もう會へないと思つて落膽してゐたが、彼が生きてゐるばかりか、

傷さへしてゐないので、兩親は非常に喜ぶ。その喜びは筆紙に盡し難い。先づ神樣に感謝をし、それから薄荷や接骨木などを飲ませ、なほ晩になると木莓を飲ませて、三日の間寢せて置く。また雪投げをして遊ぶことが、却つて彼のためになるのに。

十

オブローモフの鼾がザハールに聞えると、彼は音を發てないやうに靴つと寢樓梯から飛び降りて、爪立で玄關へ出た。そして主人を錠で閉ぢ籠めて置いて、自分は門の方へ行つた。

「やア、ザハール・トロフィムイチ、よく來たれ！　暫くあなたを見なかつたねえ！」門の傍に居つた馭者や從僕や女房達や子供達が種々な聲で斯う言つた。

「旦那はどうしたね？　何處かへ出かけたかね？」と、屋敷番が訊いた。

「眠つてるだよ。」と、ザハールは沈んだ調子で言つた。

「どうしたんだ？」と、馭者が訊いた。「こんなに早くから……加減が惡いのかね？」

「へッ、何が加減が惡いだ！　醉つぱらつただよ！」と、ザハールはそれを信じてゞもゐるかのやうな聲で言つた。「酷いぢやねえかね、一人でマデラ酒を一本半も飲み、クワスを二升も飲んで、それから今寢たんだよ。」

「何と云ふことだ！」と、馭者は嫉ましさうに言つた。

「どうしてあの人は今頃そんなに醉つぱらつたんだらうねえ？」と、一人の女が訊いた。

「タチヤナ・イワノウナ、さうぢやないよ。」と、ザハールは藪睨みのやうな眼付で彼女を見ながら答へた。「今に始まつたことぢやねえや。全く何の役にも立たなくなつたんだ――そんなことを言つても、胸がむかむかすらア！」

「丁度妾の女主人と同じだね！」と、彼女は溜息を吐きながら言つた。

「だが、タチヤナ・イワノウナ、彼の女は今日何處へか行くだらうかねえ？」と、馭者は訊いた。「俺は一寸其處まで行つて來てもいゝかしら？」

「何處へも行くものか！」と、タチヤナは答へた。「自分の大事な男と一緒にゐるのだよ、きりもなくいちやついてさ。」

「その男は、お前のとこへ始終來るねえ。」と、屋敷番が言つた。「あの野郎、毎晩だ、皆な出る者は出て了ひ、歸る者は歸つても、彼奴はいつも一番後になつて、その上何故玄關を閉めたかつて怒るんだ……俺は彼奴の爲めにあの玄關の番をするんだよ！」

「ほんとに爲樣のない奴だ」と、タチヤナは言つた。「あんな人間はありやしない。種々なものを彼女にやつてさ。彼の女は孔雀の雌のやうにお洒落をして、勿體ぶつた歩き方をするんだよ。自分がどんな下袴を穿き、どんな靴下をはいてゐるかを誰かに見せるやうにさ。氣恥かしくて、見てもゐられない！　類は二週間も洗はないで顏には塗りつけるし……たまにや罪だけれど、（あゝ、貧乏女！　頭に頭巾でも被つて、巡禮して修

道院へでも行つたらどうだ……)なんて考へるよ。」

ザハールの外、皆な笑つた。

「タチヤナ・イワノウナ、全くさうだよ！」と、皆な同意した。

「全くだよ！」と、タチヤナは續けた。「どうしてお前さん達はあんな女を出入りさせるんだね？……」

「お前さんは、何處へ行くんだ？」と、誰かゞ彼女に訊いた。「お前さんの持つてゐるのは何の包だね？」

「裁縫屋へ衣服を持つて行くのさ。お洒落さんの御用でね。どうです、廣いでせう！　ドゥニャーシャと二人で圓を縫ひ合せて見たんだけれど、手縫ひでは三日經つても出來やしないよ。皆な折り曲げて了つてね！　さア、もう行かなけりやならない。左樣なら。」

「左樣なら、左樣なら！」と、或る人達は言つた。

「左樣なら、タチヤナ・イワノウナ、」と、馭者は言つた。「晩に待つてるよ。」

「さア、どうなるか分らないね。行けたら行くよ。……左樣なら！」

「では、左樣なら。」と、皆な言つた。

「左樣なら。……皆さん御機嫌よう！」と、彼女は出て行きしなに答へた。

「左樣なら、タチヤナ・イワノウナ！」と、馭者は更に後から叫んだ。

「左樣なら！」と、彼女は甲高い聲で遠くから叫んだ。

「ザハールは彼女が出て行つて、自分の饒舌る番が來るのを待つてゐるかのやうであつた。彼は門の傍の鐵の柱に腰掛け、歩いて行く人や馬車に乘つて行く人を陰險な顏付をして茫然と眺めながら、兩足を動かし始めた。

「ザハール・トロフィムイチ、今日はお前さんの旦那はどうしてゐるね？」と、屋敷番は訊いた。

「平常の通り、脂肪の所爲で、ぷん〳〵怒つてるだよ。」と、ザハールは言つた。「お前の爲にお前のお蔭で俺いつも辛い目にばかり會ふだ。いつも室のこつてねえぷん〳〵怒るだよ！　ひどく引越を嫌つてねえ……」

「俺はそんなこと知らないよ！」と、屋敷番は言つた。「俺の室なら何年でも住んで貰ふが、俺は家主ぢやないからね……家主の命令だ……俺が家主だといゝが、俺は家主ぢやないんだ……」

「あの人は怒鳴るのかね？」と、誰かの馭者が訊いた。

「怒鳴るも何も、とてもやり切れたもんぢやねえだ！」

「どうしてだ？　いつも怒鳴つてゐても、あの人はいゝ旦那だよ！」一人の從僕は斯う言つて、圓い煙草匣を軋らせながら徐々と開けた。ザハール以外の皆なの手は、煙草の方へ突き出された。皆なは匂を嗅いだり、嚏をしたり、唾を吐いたりした。

「怒鳴つても結構だよ」と、その男は續けた。「よけいに怒鳴る程、よけいにいゝんだ。いくら怒鳴つても、打つたりなんかしないからねえ。俺は或る旦那に仕へてゐたことがあつたが、あんな人はないよ。直ぐに頭髮をひつ摑むんだ。」

ザハールは、その男がその馭論を終るのを蔑視むやうに待つてゐた。そして馭者の方へ向いて續けた、

「お前そんな悪口を言ふけんども」と、ザハールは言つた。「そんなものぢやねえだよ！」
「手がつけられないのかね？」と、屋敷番は訊いた。
「さうだ！」と、ザハールは瞬きをしながら、意味ありさうに嘆れ聲を出した。「手がつけられねえだ。堪らねえだ！　そればかりぢやねえ、歩くことも知らねえ、金を拂ふことも考へねえ、何もかも打ち壞してばかりゐるだよ。掃除することも知らねえで、盗んだり、食つたり……チエ、いやになつちまう！……今日なんか散散虐めて、ひどいことを言ふだ！　かうだよ！　この前の週間から一片のチースが殘つてゐたゞ。犬に投げて遣るのも恥かしいくらゐさ。人間がそんなものを喰ふもんか。それを訊くから（ありやしねえ）と言ふと斯うだ（お前を絞め殺してやる、煮えた油の中へ入れて、眞赤に燒けた火箸で引き裂き、白楊の杙をお前に打ち込んでやらなけりやならない！）だつてさ。しよつちうぷん〳〵怒つてるだ……兄弟、お前達、どう思ふだ？　近頃俺、あの男の足をお湯で洗つてやつてるんだが、それにあんなに怒鳴るんだ、飛び退かなかつたら、俺拳で胸を突かれたらう。いつもこんな風だ！　本當に突かれる所だつたよ……」
　馭者は頭を振つた。が、屋敷番は言つた。
「いや、それは元氣のいゝ旦那だ！　癖が面白い！」
「怒鳴るだけ。偉い旦那だよ！」と、例の從僕も矢張り冷淡に言つた。「怒鳴らない者の方が惡いや。凝つと視てゐて、急にお前、頭髪をひつ掴んで見ろ、何のことだか分りやしない！」
「そればつかりぢやねえ。」と、ザハールは自分の言葉を遮ぎつた從僕には、少しも注意せずに言つた。「今までまた片足は生きてゐねえだ、いつも匂油ばかり塗つてゐるだ。譯の分らねえ人だよ！」
「面白い旦那だよ！」と、屋敷番は言つた。
「いや、困つたもんだ！」と、ザハールは續けた。「何時か人でも殺すだよ。屹度殺すだよ！　何でも一寸した詰らねえことを言つても、禿頭と云つて怒鳴るだ……そしてもう譯もなにも聞かねえだ。今日なんかも新らしい言葉を考へ出したゞよ。（毒々しい人間）だつて言ふだ！　口から出まかせだ！」
「それが何だ？」と、例の從僕はまた言つた。「怒鳴るやうな者はいゝ方だ。そんな者には神樣が健康を與へるがいゝ……が、いつも默つてゐて、傍にでも行くと、凝つと見てゐて、飛かゝつて來るやうな、俺の居つたとこの旦那のやうぢや困る。怒鳴るくらゐ、何でもありやしない……」
「それは好き勝手だが」と、ザハールは頼みもしない反對に對して腹立たしさうに言つた。「俺はお前の考へと異ふだ。」
「旦那は（禿げた）何と言つて怒鳴るだ、ザハール・トロフィムイチ、」と、十五歳ばかりのコザックが訊いた。「馬鹿野郎とでも言ふんかね？」
　ザハールは彼の方へ徐々と頭を向けて、彼に曩よりとした眼を注いだ。
「俺の顔を見ろ！」と、ザハールはやがて憤然として言つた。「若いくせに、ひでえこと言ひやがる！　將軍樣の息子でもないくせに！　前髪を掴んで投り出すぞ。彼方へ行け！」
　コザックの子供は二足ばかり後にさがつて立留まり、莞爾々々しながらザハールを見た。

「人を馬鹿にしやがつて」と、ザハールは憎々しさうに呶れ聲を出した。「待て。ひッ捉へたら、貴樣の耳を引き千切つてやらア、其處齒を露いて見やがれ！」

その時、從僕用の燕尾服を前をあけて着て、肩紐をつけて、脚絆を穿いた大きな從僕が車寄から駈け出して來た。彼はコザックの子供に近寄り、平手打を一つ見舞つてから、馬鹿野郎と言つた。

「なんです、マトウェイ・モセーイチ、なんです、あなたほ？」と、不意を打たれて悸々してゐるコザックの子供は、片頰を押へて癈疾的な瞬きをしながら言つた。

「何ッ！　貴樣、まだ愚圖々々抜すか？」と、從僕は答へた。「俺は貴樣を捜して家ぢう駈けずり廻つたんだ。ところが、こんな處にゐやがる！」

彼は片手で子供の頭髪を掴み、自分の方へ頭を屈めて、三度同じくらゐに徐々と規則的に、彼の頰を拳で打つた。

「旦那が五度も呼鈴を鳴らしたんだ、」と、彼は窘めるやうに附け足した。「俺はお前の爲めに、この仔犬の爲めに怒鳴られた。行けッ！」

彼は命令するやうに、片手で階段の方を指差した。男の兒は暫く不思議さうに佇立つたまゝ、二度瞬きをして從僕を眺めた。そして彼が同じ事を繰り返すだけで、他に何にも言はないのを見て取つたので、頭髪を一振りして、何事もなかつたやうな風をして、階段の方へ行つた。

これは、ザハールにとつて非常に痛快なことであつた！

「さうだ、さうだ、マトウェイ・モセーイチ！　もつと、もつと！」と、彼は喜びながら憎々しく言つた。「ああそれぢや足りねえ！　マトウェイ・モセーイチ！　有難う！　大分痛かつたらう……あの（禿げ頭の惡魔）奴！　もう馬鹿にやア出來めえ？」

召使達はハッハッハッと笑つた。彼等はコザックを敲いた從僕と、これを憎々しく喜んだザハールとに親しく同情したが、誰もコザックには同情しなかつた。

「それだ、それだ。その言ひ方も遣りかたも、俺の以前の主人は、全くその通りだつた。」と、また例の從僕は言ひ始めた。そしてザハールの話を遮ぎつて了つた。「お前さんが少し樂しんでやらうと考へようものなら、奴さん直ぐお前の考へを立派に察して了ひ、傍へ來て、ぐつと掴んで、今マトウェイ・モセーイチがアンドリューシカにしたやうなことをするんだ。たゞ怒鳴られるだけなら、何んでもありやしない！　（禿げた惡魔）と言つて怒鳴るのは面白いことだ！」

「お前の主人もお前を引つ掴むといゝに」と、馭者はザハールを指差しながら彼に答へた。「だがお前の頭はフェルトだから、旦那はザハール・トロフィムイチの何處を掴むだらう？　頭はまるで南瓜のやうだからな……頰骨の上にあるこの二つの顴骨を掴むか。それで何か掴めると云ふもんだ！……」

皆なはハッハッハッと笑つた。が、ザハールは馭者の冗談で敲かれた程に驚いた。彼はこれまでたゞこの馭者とだけ親しい話を交してゐたのである。

「ぢや、俺も旦那に言つてやるべえ。」と、彼は馭者に對して憎々しさうに呶れ聲を出し始めた。「お前をひッ

掴む所が見つかるだよ。旦那はお前の顕髯を撫でるだ。どうだえ、まるで氷柱のやうな顕髯ぢやねえだか！」

「他の馭者の顕髯を撫でるやうになりや、お前の主人も大したもんだ！　いや、お前こそ自分の顕髯を大事にするがいゝ。時々撫でつけてね。でないと引き抜かれる時に痛いぞ！」

「なに、この詐僞師を馭者にするたア何だ？」と、ザハールは嗄れ聲を出した。「お前に馬車を引かせても、まだ俺の主人にや勿體ねえや！」

「なんだ、あんな主人が！」と、馭者は森々しく言つた。「何處であんな者を掴り出して來たんだ？」

彼自身も屋敷番も床屋も從僕も惡口の擁護者も皆なアハッハッと笑つた。

「笑へ、笑へ、主人に言ふだから！」と、ザハールは嗄れ聲を出した。「だがお前は」と、彼は屋敷番の方へ向いて言つた。「何故この泥棒共をやり込めねえで、笑つてるだ。お前は何の爲に此處に出しやばつてるだ？　騒ぎを鎭めるのが役ぢやねえか。それにお前は何だ？　よし、俺主人に言ふべえ。待て、覺えてろよッ！」

「よし、分つた、分つた、ザハール・トロフィムイチ！」と、屋敷番はザハールを鎭めようとしながら言つた。

「彼の男がお前に何をしたんだ？」

「彼奴、俺の主人に無禮を言つたゞよ。」とザハールは馭者を指差しながら熱心に反對した。「彼奴は、俺の主人がどんな人だか知つてゐるだか？」と、彼は敬意を示しながら訊いた。「貴樣なんか、」と、彼は馭者の方へ向いて言つた。「夢でもあんな旦那を見るこたア出來めえ。良い人で、智慧があつて、立派な人だ！　だが、お前の主人は、まるで碎に食べ物をあてがはねえ馬車馬みてえなもんだ！　汚ない馬に乘つて屋敷を出るとこんざア、まるで乞食のやうで、見るのも恥かしいや。クワスに大根を入れて食つてやがるくせに。お前の着てる外套を見るがいゝや。穴だらけぢやねえか！……」

馭者が着てゐた外套には、一つも穴はなかつた。

「貴樣のこれが分らねえか、」と、馭者はザハールの言葉を遮ぎつて、ザハールの脇の下から覗いてゐる襯衣の端を手速くぐいと引つ張つた。

「もういゝよ、いゝよ！」と、屋敷番は二人の間に兩手を擴げながら言つた。

「よし、お前は俺の衣服を引つ張つたな！」と、ザハールは益々襯衣を引き出しながら叫んだ。「待て、俺は主人に見せて來る！　兄弟だち、見て置いて呉れよ、彼奴が何をしたか。俺の衣服を引き裂いたんだから！……」

「俺ぢやねえよ！」と、馭者は少し怖毛立つて言つた。「そりや、主人が引きさばいたんだらう……」

「主人が引き裂いたんぢやねえ！」と、ザハールは言つた。「主人は良い人だ。黄金だ、旦那ぢやねえ、勿體ないことを言ふな！　俺は主人の傍に居れば、天國に居るやうだ。何の不自由もねえ。生れてから馬鹿野郎と言はれたこともねえ。安樂に暮してるだ。食べる時も主人と一緒だし、行きたい處へは何處へでも行けるだ——この通りだ……そして田舎には俺の家もある、自分の野菜畑もある。穫り入れた穀物もある。百姓共も皆な俺の自由になる！　俺は支配人だ。執事だ。だがお前達は自分の……」

彼は憎々しさの餘り、十分な聲で自分の反對者を言ひ込めて了ふことが出來なかつた。彼は力を入れる爲

めに、そして毒々しい言葉を考へ出す爲めに、一寸、息を繼いだ。が、餘り怒つてゐたので、それを考へ出せなかつた。

「よし、待て、お前はどうして俺の衣服の辨償をするだ。お前のを引き裂くぞ！」と　最後に彼は言つた。

主人を餌に生きたザハールを引懸けた。名譽心と自尊心とを搖り動かした。心服心が眼を醒して、力一ぱいに現はれたのである。ザハールは自分の相手ばかりか、相手の主人と、あるかどうか分らないその主人の親戚と知人とにまで罵倒を浴せたいやうな氣持であつた。彼は罵倒する時には、以前馭者と話をした時に聞き覺えた主人達に對する讒言や惡口を爲くべき正確さで繰り返した。

「だが、お前達も主人も何んと云ふ呪はれた貧乏者だ、猶太人だ、獨逸人より惡いや！」と、彼は言つた。「お前達の祖父がどんな人間だつたか知つてるか。古着屋の番頭ぢやねえか。昨夜なんかお客がお前のとこから出て行つたが、俺は詐僞師か何かゞお前の家に出入してるんだらうと思つてただ。見るのも氣の毒だ！　お母アも矢つ張り古着屋で、盜んで來た古着を賣つてたゞ。」

「いゝよ、もう澤山だ！」と、屋敷番は中に入つた。

「だがな！」と、ザハールは言つた。「俺のところの旦那は、お蔭樣でな、大黑柱だよ。友達はな、將軍樣や伯爵樣や公爵樣だ。それにどんな伯爵でも旦那に會へると云ふ譯のものぢやねえだ。人によつちや客間に待たせられる……著述家なんか始終來る……」

「おい、兄弟、その著述家といふのはどんな者だい？」と、屋敷番は爭を止めようと思つて訊いた。「役人のことかね？」

「さうぢやない。自分の好きなことを考へ出す人だよ。」と、ザハールは說明した。

「そんな人達は、お前のとこで何をするんだい？」と、屋敷番は訊いた。

「何をするつて？　煙管を貰ふ者もあるし、シエリー酒を飲ませて貰ふ者も……」ザハールは斯う言つたが、皆なが嘲けるやうに笑つてゐるのに氣が附いて、言葉を止めた。

「だが、お前達は、幾人あつても皆な惡漢だ！」と、彼は皆なを藪睨みに見ながら速口に言つた。「他人の衣服を引裂いたりしやがつて！　俺は主人に言ひ附けて來るだ！」と、附け足して、彼は家の方へ急いで行つた。

「止せよ、待て、待て！」と、屋敷番は叫んだ。「ザハール・トロフィムイチ！　麥酒屋へ行かう。どうか來て臭れないか……」

ザハールは途中で立止つて、急に後を振り返つた。そして召使達を見ずに、なほ急いで街道に出て行つた。彼は誰の方へも見向きもせずに、向側にある酒屋の扉口まで行つた。彼は其處で振り返つて、陰鬱な眼を皆なに向け、なほ陰鬱に皆なを手招きして、自分の後について來るやうに言ひ、自分は扉の中に姿を隱した。

他の者も皆な散々になつた。或者は麥酒屋へ行き、或者は家へ行つた。そしてたゞ從僕一人殘つた。

「でも、主人に言ふと困つたことになる！」と、彼は徐々と煙草匣を開けながら、冷靜に思案した。「何處から見ても良い旦那だが、あれで怒鳴るんでなア！　でも、怒鳴るくらゐ何でもありやしない。或る旦那は凝つと見てゐて、急に頭髮を……」

十一

四時を一寸過ぎた頃、ザハールは軈つと音を發てないやうに玄關を開き、爪立をして自分の室へ入つた。其處で彼は主人の書齋の扉口に近寄り、先づ扉に耳を押し靠け、それから腰を折つて鍵の穴に眼を持つて行つた。

書齋の中には、穏やかな鼾が響いてゐた。

「眠つてる」と、彼は囁いた。「起こさなけりやなんねえ。もう程なく四時半になるだ。」

彼はゴホンと咳をして、書齋へ入つた。

「イリヤ・イリイーチさま、もし、イリヤ・イリイーチさま！」と、彼はオブローモフの枕頭に立つて、靜かに言つた。

鼾は續いてゐた。

「矢張り眠つてる！」と、ザハールは言つた。「宛然で石工のやうだ。イリヤ・イリイーチさま！」

ザハールは輕くオブローモフの袖を引つ張つた。

「起きなせえましよ。四時半でがす。」

イリヤ・イリイーチは唸つてこれに答へたゞけで、眼を醒さなかつた。

「起きなせえまし、イリヤ・イリイーチさま！　何と云ふ恥かしいことでがすだ！」と、ザハールは聲を高めながら言つた。

答はなかつた。

「イリヤ・イリイーチさま！」と、ザハールは主人の袖を引きながら言つた。

オブローモフは少し頭を動かし、辛つと片眼を開けてザハールを見た。中風病者がよく斯うした見方をするものである。

「其處にゐるのは誰だ？」と、オブローモフは嗄れ聲で訊いた。

「俺でがすよ、起きなせえましよ。」

「彼方へ行け！」と、オブローモフは唸つて、再た重い眠に沈んだ。

鼾の代りに、鼻の音が響き出した。ザハールは彼の裾を引つ張つた。

「何だ？」と、オブローモフは急に兩方の眼を見開いて、脅すやうに訊いた。

「お前さま、起こせつて言はつしやつたゞよ。」

「そりや知つてる。お前は自分の義務を果したのだから、彼方へ行つて居れ！　後は俺の勝手だ……」

「行かねえだ」と、ザハールは再たオブローモフの袖を引きながら言つた。

「いゝよ。五月蠅い！」と、オブローモフは短かく言つた。そして頭を枕に沈めて、鼾をかき始めた。

「いけねえだよ、イリヤ・イリイーチさま」と、ザハールは言つた。「俺を喜ばしてお呉んなせえよ。眠つちやいけねえだよ！」

彼は主人を搖つた。

「おい、世話を燒くな、邪魔をするな」と、オブローモフは兩方の眼を開けて諭すやうに言つた。

「ちや、自分の世話を燒くがいゝだ。後で何故起こさなかつたと言つて怒らつしやるだもの……」

「おい、おい！　お前は何と云ふ人間だ！」と、オブローモフは言つた。「たつた一分間でいゝから眠らせて呉れ。一分間ぐらゐ何だ？　俺は自分で分つてゐるんだよ……」

オブローモフは俄かに眠りに誘はれて默つた。

「眠ることしか知らねえだ！」と、ザハールは主人には聞えないと信じて言つた。「まるで赤楊の丸太見たいに眠つてる！　何の爲に此の世の中に生れて來たゞ？　もし、起きなせえましよ！　斯う言つてゐやすだよ……」と、ザハールは咆えた。

「何だ？　何だつて？」と、オブローモフは頭を擡げて脅すやうに言つた。

「旦那さま、何故起きねえだ？」と、ザハールは優しく答へた。

「いや、お前が今言つたことは何んだ――え？　お前は何を言つたんだ――え？」

「何だアね？」

「失敬なことを言つたらう？」

「それは、お前さま、夢でがすよ……きつと夢でがすよ。」

「お前は俺が眠つてゐると思つてゐるのか？　俺は眠つてるのぢやない、皆な聞いてゐるんだ……」

けれども、彼は再た眠つた。

「これだ」と、ザハールは絶望的に言つた。「あゝ、何んと云ふ木偶だ！　丸太のやうに轉がつてるだ？　見るのも氣持が悪い。ほんとに結構な人間だ！……チェ！」

「起きなせえよ、起きなせえましよ！」と、彼は急に吃驚したやうな聲で言つた。「イリヤ・イリイーチさま！周圍の人達が何をしてゐるか見るがいゝだよ……」

オブローモフは急いで頭を上げて周圍を見廻したが、深く溜息をして再た横たはつた。

「五月蠅くしないで呉れ！」と、彼は勿體らしく言つた。「お前に起こせと言ひ附けたが、もう其の言ひ附を取り消す――いゝか、俺の思ふ時に、俺一人で目を醒す。」

時によると、ザハールはそのまゝにして、斯う言ひ殘して行くことがある。

「勝手に眠るがいゝだ、馬鹿々々しい！」

が、また時によると、强情を張ることもある。今も强情を張つた。

「起きなせえよ、起きなせえよ！」と、彼は喉一ぱいの聲を出して、兩手でオブローモフの裾と袖とを摑んだ。

オブローモフは突然起ち上つてザハールを怒鳴りつけた。

「待てッ、主人が眠がつてゐる時には、どう云ふ風に騷がすものか敎へてやる！」と、彼は言つた。

ザハールは急いで彼の傍を逃げ出した。が、彼がまだ三足も逃げないうちに、オブローモフはすつかり眠

氣から醒めて、欠伸をしながら身體を伸した。

「クワス……を持つて來い……」と、彼は欠伸の合間に言つた。

その時ザハールの背後から、誰かの甲高い笑ひ聲が響いた。二人は振り返つた。

「シトーリッ！　シトーリッ君か！」と、オブローモフはお客へ飛びつきながら嬉しさうに叫んだ。

「アンドレイ・イワヌイチさまだよ！」と、ザハールは莫爾々々しながら言つた。

シトーリッは腹を抱へて笑ひ續けた。彼は今演ぜられた場面をすつかり見てゐたのであつた。

第二編

一

シトーリッは父親の血統によつて半分だけ獨逸人で、其の母親は露西亞人であつた。彼は正教を信奉してゐた。彼の本來の言葉は露西亞語であつた。彼は此の言葉を、母親と書物と大學の聽講席と竹馬の友なる村の子供達と話好きな彼等の父親達とモスクワの市場とで學び、獨逸語の方を父親と書物とから承け繼いだのである。

シトーリッは父親が管理してゐたウェルフリョーウォと云ふ村で生れ、其處で生長し、其處で教育された。八歳の時から彼は父親と一緒に地圖を學んだ。ヘルデルやウイランドの綴字によつて聖書の詩文を研究した。百姓や町人や職人などの無學な計算に總計算を作つてやつた。が、母親と一緒には聖書物語を讀んだり、クルイロフのお伽噺を學んだり、デンマーク綴字法を研究したりした。

また彼は教鞭を遁れて、他の子供達と一緒に、小鳥の巣を壞しに駈けて行つたりした。だから、教場にゐる時や或は祈禱の時など、彼の衣匣の中から雛鳥の鳴聲が聞えることがよくあつた。

またこんな事もあつた。晝餐後、父親は庭の木蔭に腰掛けて、煙草を喫んでゐる。母親はジャケットを編

むか或はカンバスに向つて刺繍をするかしてゐる。と、突然街路の方から騒々しい叫び聲が聞えたと思ふ間に、大勢の人がどや〳〵と家の中へ流れ込む。

「何でせう？」と母親は驚いて訊く。

「再たアンドレイを伴れて來たんだらう。」と、父親は冷淡に言ふ。

扉がバタンと開くと、百姓や百姓の女房や子供達の群が、庭の中へ亂れ入る。實際、アンドレイを伴れて來たのである。彼の姿を見れば、靴を脱ぎ、衣服を引き裂き、鼻を傷つけてゐる。之が他人の子供の時もある。

母親はアンドリューシヤが半晝夜も姿を見せないと、屹度不安らしく周圍を見廻してゐた。若し父親のいゝ加減な外出禁止がアンドリューシヤの外出を妨げるならば、母親は彼を自分の傍へ止めて置いたに相違ない。

母親は彼を洗つてやる。上衣や下衣を着換へさせる。で、アンドリューシヤは半晝夜位淸楚した服裝をして行儀よく歩いてゐる。が、晩方か或は翌る朝までには、再た衣服を汚したり、引裂いたりして、何處の子供なのか分らないやうになつて、誰か伴れられて來る。百姓が枯草を積んだ荷車に彼を乗せて來ることもあれば、漁師と一緒に舟の網の上に眠つて來ることもある。

母親は涙を流したが、父親は平氣で、その上笑つてゐる。

「立派な大學生になるよ。立派な大學生に！」どうかすると父親は斯う言ふことがある。

「そんなことがあるものですか、イワン・ボグダヌイチ。」と、母親は訴へた。「彼は一日でも生傷をつけずに

歸つたことはないんですよ。此間など血の出るほど鼻を打ち切つて來るんですもの。」

「自分の鼻や他人の鼻を一度も打ち切つたことのないやうな子供ぢや仕樣がないぢやないか」と父親は笑ひながら言つた。

母親は散々に泣いた揚句、ピアノの前に腰掛けて、鬱さ晴しにヘルツを彈く。涙は滾々と湧き出して、樂鍵の上にポタ〳〵と落ちる。が、其の時アンドリューシヤが來る。或は誰かに伴れられて來る。彼は元氣よく生々と話して、母親を笑はせる。それに、彼は實に悧口な子供であつた。程なく彼は母親のやうにテレマークを讀んだり、母親と一緒に四つの手でピアノを彈いたりするやうになつた。

一度など、彼は一週間も行方不明になつたことがある。母親は眼を泣き腫らしてゐた。が、父親は平氣で、相變らず庭園の中を歩きながら、煙草を喫んでゐた。

「若しオブローモフの息子が行方不明になつたのなら、」と、父親はアンドレイを捜しに行つて吳れといふ妻の願に對して言つた。「俺は村の人全部と土地の警察とに頼んで捜して貰ふが、アンドレイなら歸つて來るよ。實に偉い大學生だ！」

翌る日になると、アンドレイはもう自分の寢床の上に、安らかに眠つてゐた。寢臺の下には、誰かの獵銃と一斤ばかりの火藥と散彈とが横はつてゐた。

「お前、何處へ行つたの？　何處から鐵砲を持つて來たの？」と、母親は問を浴せた。

「何故でもない！」と、息子はたつた之れだけ答へた。

父親はコルネリイ・ネポートの獨逸語譯は出來たかと訊いた。

「まだ！」と息子は答へた。

すると、父親は片手で彼の襟を掴んで門の外へ突き出し、彼の頭に帽子を被せて、背後から足で彼を蹴飛ばした。

「歸つて來るなッ。」と、彼は附け加へた。「今度來る時は譯譯を持つて來い。それも一章だけぢやいけない、二章だ。そしてお母さんには、言ひ附かつた通り、フランスの喜劇中の一役を敎へるんだ。でないと來ちやならない！」

アンドレイは一週間經つて歸つて來た。そして譯譯も持つて來れば、役目も敎へた。

彼が生長すると、父親は發條附の荷馬車に彼を乘せ、彼に手綱を持たせて、先づ製造場に、次に畑に、次に街の商店と官廳に、次に或る粘土を見せに馬車を驅つた。其處で父親は粘土を撮んで臭を嗅ぎ、時によると舐めて見て、息子にも臭を嗅がせたり、粘土と云ふ物はどんなもので何に使ふかと云ふことなどを說明したりした。それを見に行かない時には、苛性加里や樺油を採取する處や獸油を煮る處を見せに伴れて行つた。

十四か十五になるとシトーリッは、荷馬車か或は馬に乘り、鞍に袋をぶら下げて、たつた一人で父の依頼を受けて、街へ行つたことも度々あつた。けれども、何事かを忘れたり、間違つたり、よく見なかつたり、見遁したりするやうなことは、決してなかつた。

「Recht gut, mein lieber Junge!」（良い子だ、汝！）と、父親は報告を聞いて言つた。そして其の廣い掌で息子の

肩を輕く敲きながら、依頼の輕重によつて二留とか若くは三留とかを息子に與へた。

母親は其後長い間かゝつてアンドリューシヤから煤や汚點や粘土や獸油を洗ひ落した。

母親は此の勞働的實際的な敎育を餘り好まなかつた。彼女は自分の息子が、親のやうな獨逸式の町人になるのを恐れてゐたのであつた。彼女は凡ての獨逸國民を特許された町人の群と見て、獨逸人の野卑と獨立心と狡猾とを嫌つてゐた。獨逸人は之等の性格を、數世紀間に作り得た町人の權利として、到る處に發揮してゐるが、それは丁度自分の角を持つてゐる牡牛が、それを勝手に隱すことが出來ないやうなものである。

彼女の眼から見ると、凡ての獨逸國民の中に、紳士と云ふ者は一人もなかつた、またあるはずもなかつた。彼女は獨逸人の性格の中に、柔和と優美と親切とを少しも認めてゐなかつた。つまり、彼女は上流社會に樂しい生活を爲るもの、或る規則を脫せしめるもの、一般的な習慣を破壞させるもの、なほ規律に從はせないものを獨逸人の性格の中に認めなかつたのである。

實際、此の無作法者達は齷齪しながら、自分達の定めたもの、自分達の頭に取り入れたものを固く握つて、若し規則づくめで行くことなら、壁に額を衝突けることさへ厭はぬと云つたやうな人間である。

彼女は、さる金持の家で家庭敎師を勸めたことがあるので、外國にも行つたこともある。彼女は獨逸全國を旅行して、凡ての獨逸人を短かいパイプを咬へ、始終唾を吐いてゐる番頭と職人と棒のやうに眞直な將校と兵卒と、沈んだ顏附をしてゐて、たゞ下等勞働や勞働で金を儲けることや、陳腐な秩序や退屈な生活の法則や衒學者的な義務遂行などにのみ巧みな役人との群に——角張つた牙振と大きな無細工な手と町人らしい

晴々した顔附と粗末な言葉遣ひとを有つた町人の群に入れてゐた。

（どんなに獨逸人を着飾らせても）と、彼女は考へた。（獨逸人はどんな手薄な白い襯衣を着ても、漆塗の靴を履いても、また黄色い手袋を篏めてさへ、矢張り靴革で裁つた人間のやうで、眞白いカフスの下からは、荒くれた赤味のある手が突き出てゐるし、華美な上衣の下からは、麵麭職人でなければ、厨僕のやうな身體が覗いてゐる。そして此の荒くれた手が錐を持つたり、時によると管絃樂の弓を持つたりするのだから堪らない。

併し、母親は自分の息子が、黒い身體の町人なる父親の血統を受けてゐると思ひながらも、矢張り其の息子の中に貴族の理想が仄見えてゐるやうに思つた。自分の息子は露西亞の貴族の息子で、色も白く、身體の格好も整つてゐて、自分が露西亞の金持の家や獨逸以外の外國で見たことのある子供、即ち小さい手と足とを持ち、綺麗な顔をし、晴々した活潑な眼を持つた息子であると思つてゐた。

ところが、其の息子はその父親のやうに、水車場で砂礫を掻き廻したり、工場や畑から歸つて來たりした。彼の衣服は、魚油や肥料で汚れてゐた。その手も赤く汚なく荒れてゐた。食慾など猿のやうに旺んであつた。

母親は五月蠅くアンドリューシャの爪を切つてやつた、頭髪を編んでやつた、華美な襟やシャツを縫つてやつた。街へ行つて上衣を註文してやつた。ヘルツの沈んだ音を聽かせた。小花や詩的生活のことを歌つて聞かせた。軍人や作家の華々しい使命を囁いた。他の人達が憧れてゐる高尚な役目を彼と一緒に空想した。

しかし、此の淡い空想は、算盤の音や百姓共の油染みた受取書の整理や職工との應對などの爲に破壞されなければならなかつた。

母親はアンドリューシャが街へ乘つて行く荷馬車や、彼が父親から貰つた膠布製の外套や、羚羊の革で造つた綠色の手袋など――種々な勞働生活の醜い附屬物さへ怨めしく思つた。

不幸にも、アンドリューシャは十分な教育を受けて父親の小さい塾の助教師にされた。

そればかりか、父親は彼に職人として、全く獨逸流に、月に十留づゝの俸給を與へ、其の俸給の受取書を帳簿に書かせた。

だが善良な母親よ、安心するがいゝ。お前の息子は露西亞の土地で育つたのだ――牛の角のやうな町人根性と砂礫を掻き廻す手とを持つた仕事好きな人々の間で育つたのではない。近くには、オブローモフカ村がある。其處では、絶えずお祭のやうな日が送られてゐる。其處では、勞働は肩から軛のやうに辷り落ちてゐる。其處では、旦那は夜明と同時に起きない。製造場へ行かない。魚油と獣油とを塗つた車輪や發條の傍を歩かない。

それに、ウェルフリョーウォ村には、一年の大半は空家になつて扉が閉まつてゐる一軒の家がある。其の家の中に度々惡戯兒のアンドリューシャは入つた。家の中には、長い大廣間や美術室があつた。壁には薄黒い肖像畫が懸つてゐた。其の肖像の樣子はごつ〳〵してゐない。その手は、堅く大きくない。アンドリューシャはその肖像に疲れたやうな空色の眼や綺麗に粉をかけた頭髪や白くて優しい顔やふつくりした胸や慄へるやうなカフスの中から拔け出て、劍の柄に傲然と載せられた青い血管の見える優しい手を見た。其處に、錦欄と天鵞絨と、レースとを着て、歡樂と贅澤との中に無益に流れ去つた多くの人々を見たのである。

アンドリューシャはさうした肖像の中に、華やかな時代と戰爭と名譽との歴史を見た。彼は此の空家の中

に、昔噺を讀んだ。其の昔噺は、彼の父が一喫してゐる時に、ベッ〳〵と唾を吐きながら何百回となく物語つたサクソニヤでの生活のことではない、つまり、大蕪や馬鈴薯や市場や街などの間で行はれた生活のことではない。

一年の中に三度此の城のやうな家は、俄かに人間に滿されて、活々とした樂しい踊りに沸き返つた。長い廊下には毎夜燈火が輝いた。

公爵と公爵夫人が家族と一緒に來たのである。公爵は盛りを過ぎた白髪の老人で、羊皮の紙を張つたやうな顏と憂鬱な飛び出た眼と禿げこんだ大きな額とを有つてゐた。彼は三個の勳章を着け、金製の嗅煙草匣や頭に紫水晶を鏤めたステッキを持ち、天鵞絨の靴を履いてゐた。公爵夫人は容貌と云ひ、背加減と云ひ、一體の姿と云ひ、實に立派な婦人で、其の傍に誰もまだ近寄つた者はあるまい。公爵自身さへ、五人の子供を有つてゐるにかゝはらず、夫人を抱いたり、夫人に接吻をしたりしたことはあるまいと思はれる。

夫人は、彼女が一年に三度見舞ふ世界より一段高いやうに思はれた。彼女は誰とも話をせず、何處へも出かけずに、隅の綠色の室の中に、三人の老女と一緒に坐つてゐた。彼女は屋根のある廊下づたひに庭を通つて會堂へ行くだけであつたが、會堂でも御立の蔭の椅子に腰掛けてゐた。

その代り、家ぢうの者は、公爵と夫人とを除く外、皆な快活な連中であつた。で、アンドリューシャは子供らしい綠色の眼で突然に三つ或は四つの種々な身分を見たり、發刺とした智慧で此の種々な人達の型を、假裝舞踊の樣々な人々でも見るやうに、無意識に貪り見たりした。

其處には、ピエール公爵とミーシェリ公爵とが居つた。ピエール公爵は、直ぐアンドリューシャに、騎兵隊や步兵隊ではどんな日に鐘を鳴らすかと云ふことや、龍騎兵や輕騎兵のサーベルや拍車のことや、各聯隊にどんな毛色の馬がゐるかと云ふことや、不名譽にならない爲に、學問を終つたら屹度入營しなければならないことを敎へた。

も一人の公爵ミーシェリはアンドリューシャと知己になると直ぐに、彼を相手に拳を固めて奇妙な眞似をした。その拳はアンドリューシャの鼻を敲いたり、腹を突いたりした。そして之は英國流の拳闘だと言つた。

三日も經つと、アンドレイは田舍者の元氣と筋骨逞ましい手とで、英國流と露西亞流に從ひ何の練習もなしにミーシェリの鼻を挫いた。そして二人の公爵からオーソリィチを得た。

まだ二人の公爵令孃も來てゐた。一人の方は十一歲で、もう一人の方は十二歲であつた。何方も背が高くすらりとしてゐて、綺麗に着飾つてゐた。令孃達は誰とも話をせず、誰にも頭を下げなかつたが、その癖百姓共を怖がつてゐた。

家庭敎師の M-lle Ernestine（エルネスチン孃。）も來てゐた。此の婦人はアンドリューシャの母親のとこへ珈琲を飲みに來ると、アンドリューシャに頭髮を編むことを敎へた。彼女はどうかするとアンドリューシャの頭を抱へて膝の上に載せ、痛い程に强く髮を編み、それから白い手でアンドリューシャの兩頰を押へて、優しく接吻することもあつた。

それから、磨き臺の上で嗅煙草匣や釦を磨く獨逸人も來てゐた。また日曜日から日曜日まで酒ばかり飲ん

である音樂教師もゐた。女中の一隊もゐた。また犬や小犬の群もゐた。

之等の者で、家の中は一ぱいになつてゐた。村には、騒ぎ聲や吠聲や、何か敲く音や叫び聲や、樂器の音などが滿ちてゐた。

一方オブローモフカ村と他方公爵のお城との終暢安樂な貴族の生活は、獨逸流の氣分と出會した。從つてアンドレイもまた立派な大學生にも、また下卑た俗物にもなり得なかつた。

アンドリューシヤの父は農業家であり、機械學者であつた。彼は小作人なる自分の父親から農業の實地を學び、サクソニヤの工場で機械學を學んだ。が、更に殆んど四十人近くの教授を網羅してゐる近くの大學で、四十人の賢人から說明して貰つた事を教授すべき使命をも受けた。

それ以上彼は學問をしなかつた。そして頑固に以前の智識を繰り返しながら、何か事業をしなければならないと決心して、父親の許へ歸つた。父親は彼に百タレールと新らしい旅行袋とを與へ、彼の好む處へ旅立たせた。

其の時からイワン・ボグダノヴイチは故郷にも父親にも會はなかつた。彼は六年間、瑞西や墺太利を旅行し、露西亞には二十年間も暮して、自分の運命を祝福したのである。

彼は大學に學んだので、自分の息子も矢張り大學に入れなければならぬと決めた。が、彼はそれが獨逸の大學でないことに頓着しなかつた。露西亞の大學が自分の息子　一生に大變革を作り、自分が息子の生活に故意（わざ）と置いた軌道から息子を遠ざけることにも頓着しなかつた。

で、彼は之を非常に單純に遣つて退けた。彼は自分の祖父から軌道を取つて、物尺で測つたやうに將來の自分の孫までそれを續けた。そしてヘルツの變調と母親の空想と物語と公爵の城にある美術室と婦人室とが、獨逸式の狹い軌道を、彼の祖父も彼の父親も彼自身もまだ夢にさへ見たことのない廣い路に改造すると云ふことを信じて安心してゐた。

殊に、彼は此の點に於て衒學者でなかつた。彼は自說を固守しなかつた。彼は息子の行くべき他の路を、自分の頭の中に描いて見ることさへ出來なかつた。

彼は此の事に就てあまり心配をしなかつた。彼の息子が大學から歸つて來て、三ヶ月も家に居つた時、彼は息子にウェルフリョーウォ村ではもう何もすることはない、それにオブローモフもペテルブルグ市へ出て行つたから、お前もペテルブルグ市へ行けと言つた。

が、何故息子はペテルブルグ市へ行かなければならないか、又何故息子はウェルフリョーウォ村に留まつてゐて、土地の管理を手傳ふことが出來ないか、と云ふことに就いて、老人は自問したことがなかつた。彼はたゞ彼自身が學業を終つた時、彼の父親が彼を手離したことだけを記憶してゐるに過ぎなかつた。

で、彼も息子を手離した。之が獨逸の習慣であつた。其時分、母親はもう生きてゐなかつたので、誰も彼に反對する者がなかつた。

イワン・ボグダノヴイチは息子を發（たた）たせる日に、當座の生活費として息子に紙幣で百留を與へた。

「縣の街まで馬で行つて」と、彼は言つた。「其の街にゐるカリンニコフから三百五十留受け取つて、馬は其

の人のとこに預けて置くのだ。若しカリンニコフが居なかつたら、馬を賣ればいゝ。其の街では近く定期市が開かれるから……素人にでも四百留には賣れる。モスクワまで四十留と、モスクワからペテルブルグまで七十五留――だから十分に殘る筈だ。それから後はお前の勝手だ。お前は俺と一緒に仕事をしたので、俺が幾らかの資本を有つて居ることを知つて居るだらう。けれども、俺が死ぬまでは、決してそれを當にしてはならぬ。俺は頭の上に石が落ちるやうなことさへなけりや、まだ二十年くらゐは生きてゐるつもりだ。燈明はかん〳〵と燃えてゐる。燈明の中には、まだ澤山に油がある。お前は立派な教育を受けて居る。お前の前には、種々な經歴が開かれて居る。官途に就かうが商賣をしようが、それとも又著作家にならうが、それは俺の知つたことぢやない。何でもお前が一番面白いと思ふものを選んだがいゝ……」

「はい。私はそんな事を皆な一緒にやつて見ようと思ひます。」と、アンドレイは言つた。

父親は力一ぱいにアッハッハッと笑つて、馬でさへ痛い程息子の肩をポンと敲いた。が、アンドレイは平氣である。

「よし〳〵。だが、若し自分の思つた通りに行かず、自分の路を急に探し出すことが出來なかつたら、レインゴリドのところへ行つて相談をするがいゝ。レインゴリドはよく教へて呉れる。アヽ！」と、彼は指を上にあげ、頭を振り動かしながら附け加へた。「其の男は……其の男は……（彼はレインゴリドを褒めようとしたが、適當な言葉が見附からなかつた。）俺達は一緒にサクソニヤから來たんだ。四階建の家を有つてゐる。番地を教へて置かう……」

「要りません、言はずに置いて下さい。」と、アンドレイは反對した。「私は自分にも四階建の家が出來た時に、其の人のとこへ行きます。今のところ其の人の厄介にならずにやつて行きます……」

父親は再た彼の肩を敲いた。

アンドレイは馬に飛び乘つた。鞍には二つの袋が結び附けられてゐた。其中の一つには、膠布製のマントが入つてゐた。釘づけにした厚い長靴やウェルフリョーウォ村の布で造つた幾枚かの襯衣や父親の注意によつて買ひ入れた品物も見えてゐた。も一つの方には手薄い羅紗で造つた華美な燕尾服やふは〳〵した毛深い外套や一ダースの薄い襯衣や母親の注意を記念してモスクワに註文した編上げ靴などが入つてゐた。

「ぢや！」と、父親は言つた。

「では！」と、息子は言つた。

「すつかり支度が出來たかな？」と、父親は訊いた。

「すつかり出來ました！」と、息子は答へた。

彼等は自分の眼で相手の心を見徹しでもしたやうに、お互に默つたまゝ見合つてゐた。

其の傍には、好奇心な近所の人達が、管理人の息子の旅立を見ようとして、口を開けたまゝどや〳〵と集まつてゐた。

父と子とは、お互に手を握り合つた。アンドレイは馬を駈けさせた。

「まるで犬の兒見たいだ。涙ゝ流しやしねえ！」と、近所の人達は言つた。「ほら、鳥が二羽塀の上であんな

に悲しさうに鳴いてらア。アンドリューシヤの爲に鳴いてるんだ——まあ待てよ……」

「鳥があの男に何んだ？　彼の男はイワン・クバールのやうに毎晩林の中をぶら〳〵と一人でイワン・クバールのとこへ行くんだ。兄弟、彼奴らにこんな事は何でもねえだ。露西亞人の手におへねえことだ！」

「でも、老人の異教人は偉いもんだよ！」と、一人の母が言つた。「猫の子を街路に投り出すやうに、抱きもしなければ、泣きもしねえでよ！」

「待てよ！　待てよ、アンドレイ！」と、一人の老人が叫んだ。

アンドレイは馬を止めた。

「あゝ！　心から言ひ度いことがあるんだよ！」と、群衆の中で感心した者があつた。

「何だね？」と、アンドレイは訊いた。

「馬の腹帶が緩んでゐる。緊めた方がいゝよ。」

「シャムシェーフカ村まで行つて自分で緊めるよ。愚圖々々しちやゐられないんだ。明るいうちに着かなけりやならないから。」

「ぢや！」と、父親は片手を振つて言つた。

「では！」と、息子は頭を一寸下げて繰り返し、馬に拍車を加へようとして、少し身體を屈めた。

「あゝ、お前さんは犬だ。ほんとに犬だ！　まるで他人のやうだ！」と、近所の人達は言つた。

が、突然群衆の中から、大きな泣聲が響いた。誰か女が堪へきれなかつたものと見える。

「あゝ、もし可愛い旦那樣！」と、彼女は頭巾の端で眼を拭きながら言つた。「可哀想な孤兒さん！　お前さんには、生みのお母さんがないので、誰もお前さんを祝福して呉れやしない……美しい旦那樣、妾があなたに十字を切つてあげませう……」

アンドレイは彼女の方に馬を寄せて馬から飛び降り、老婆を抱いて再た馬に乘らうとした——が、老婆が彼に十字を切つて接吻をすると、彼は俄かに泣き出した。彼は老婆の熱情的な言葉の中に、母親の聲を聞いたらしい。そして母親の優しい姿が一寸彼の前に現はれたのである。

彼は程なく涙を拭くと、更に強く老婆を抱いて馬に飛び乘つた。彼は馬の横腹を蹴いて、雲のやうな塵の中に消えてしまつた。兩側からは、三匹の番犬が夢中に彼を追ひかけながら頻りに吠えた。

二

シトーリツはオブローモフの同年者で、もう三十歳を超えてゐた。彼は官途に就いたこともあつたが、今では退職して自分の仕事をしてゐた。而も實際金を儲けて家さへも有つてゐた。彼は外國に貨物を發送する或る會社に關係してゐたのである。

彼は絶間なく活動してゐた。會社はベルギーやイギリスに代理人を派遣しなければならぬ時には、屹度彼を派遣した。また何かの案を立てたり、新思想を事業に應用したりする時にも、矢張り彼を選んだ。而　彼は世間にも接近するし讀書もする。何時讀書をするのか——誰も知らない。

彼は純イギリス種の馬のやうに、全身骨と筋と神經とで組み立てられてゐた。彼は痩せてゐた。彼の頬は殆んど無く、たゞ骨と筋肉ばかりで脂ぎつてふつくりとした處は、少しもなかつた。顏色も穩かな淋しい色で、少しも紅味がなかつた。眼も僅かに綠色を帶びてゐるくらゐであつた。けれども、表情には富んでゐた。

彼の行動には、無駄がなかつた。彼は腰掛けてゐる時には、靜かに腰掛けてゐた。が、活動する時には、必要なだけの表情と身振りとを用ひた。

彼は肉體に無駄を作らなかつたやうに、自分の精神作用にも、實際的方面と精神の纖細な要求との均衡を求めてゐた。そして此の二つの方面は、時々喰ひ違つたり、絡まつたりすることはあつたが、矢張り並行して進み、決して縺れて解くことの出來ないやうな面倒な結び目になることはなかつた。

彼は實着に、そして勇敢に進んでゐた。彼は豫算生活をしてゐた。そして一刻千金の思ひで一日を費すやうに努力しながら、餘分な時間と勞力と精神力と感情に對して不斷に勤勉な管理者として生活してゐた。

彼は悲哀や歡喜を丁度手足を支配するやうに支配し或は天氣の好惡に對するやうに感じてゐた。

彼は雨が降つてゐる間傘をさすやうに悲愁が續いてゐる間だけ苦しんだが、それも怖々した謙遜な心で苦しむのではなく、寧ろ感激と誇とを感じながら苦しんだのである。そして凡ての苦痛の原因は、自分自身にあるから、どんな苦痛でもよく之を忍び、自分の苦痛を上衣か何かのやうに他人の針に掛けなかつた。

それから、彼は歡喜を、路傍で手折つた小花のやうに、手の中で凋まぬ間だけ樂しみ、凡ての歡樂の終りに横はつてゐる苦い一滴まで盃を飲み干すやうなことは決してしなかつた。

人生に對して單純な、つまり率直な有りのまゝの見解を有たうと云ふのが、彼の不斷の問題であつた。彼は次第に此の問題の解決に向つて行く間に、此の問題の解決の困難を知つた。そして自分の行く先に屈曲を認めながら、其處に眞直な路を作ることが出來た時など、いつも內心に誇と幸福とを感じた。

《單純な生活をすることは、智慧を要することで、同時に困難なことだ！》と、彼は度々獨語つて、生活の絲が何處で曲り、何處で斜になり、何處で誤つた複雜な紛れ目に入り始めてゐるかを、遽だしく見るのであつた。

彼が一番怖れたのは想像であつた。此の想像と云ふ兩頭の伴侶であつた。此の伴侶は一方には親しい顏を有ち、他方には憎みの顏を有つてゐた。想像は之を餘り信じない時は友であり、其の甘い囁きの下に安心して眠る時は敵である。

彼は凡ゆる空想を怖れてゐた。で、若し空想の領分に入る時は、洞窟の中に入るやうな氣持で、Ma solitude, mon hermitage, mon repos,（我が孤獨、我が寢室の宿、我が休息の場所。）と云ふ表札を持つて、何時何十分に出て來ると云ふことを知つた上で入つた。

だから、神祕な謎のやうな空想が、彼の精神（こゝろ）の中に場所どることは出來なかつた。まだ實驗や實際的眞理の解剖に附されないものは、彼の眼には視覺の僞瞞と映じてゐた。つまり、見る機關の網膜に光線や色彩が種々に反射したもの、或は實驗を經ない一事實として映じてゐた。

彼には、奇蹟の領分を探究したり、千年も先の謎や發見の野原の中をドンキホーテ流に駈け廻つたりする

ことを好む耽美心（デーレッタンチーズム）がなかつた。彼は頑固に神祕の闔の傍に立ち止まつて、赤兒のやうな信仰も自惚漢のやうな疑惑をも表はさずに、法則の出現と同時に神祕の鍵を持つてゐた。

彼は想像に對するやうに感情に對しても精密で用心深かつた。彼は度々此の感情の中に陷つたので、感情作用はまだ Terra incognita（知られざる國）であると云ふことを意識してゐた。

彼は知られざる範圍の中で、紅い虚僞と眞白い眞理とを巧みに區別し得た時など、熱心に運命に感謝した。彼は、小花で巧みに蔽はれた虚僞に躓づいて倒れなかつた時にも、若し心臟が強く熱病的に鼓動したゞけであれば、悲しまなかつた。若し心臟が血に灑がれなければ、若し額に冷たい汗が滲み出なければ、そして若し彼の生活の上に、永い間長い蔭が横たはらなければ、彼は非常に喜んだ。

彼は或る絶頂に立ち留まつてゐることが出來ると云ふことに、自分の幸福を感じた。また彼は感情の駿馬に乘つて疾驅する場合に、感情の世界と虚僞及び情操の世界とを區別し、眞理の世界と笑ふ可き世界とを劃してゐる細い一線を飛び越えなかつたと云ふことと、其の反對に飛び歸る場合に、荒んだ心と冷靜と危惧と詮索心と心臟の萎縮との乾いた砂漠に飛び込まなかつたと云ふことに自分の幸福を感ずるのであつた。

彼は魅惑されながらも、足の下に大地を感じてゐたし、又極端に陷つた場合、其の極端から遁れて自由になるだけの十分の力をも感じてゐた。彼は美に眩惑されるやうなことはなかつた。だから、男子の品位を忘れもせず、また卑下もしなかつた。彼は火のやうな歡喜を感じたことがなかつた代りに、女の奴隷になつたこともなく、美人の《足下に横たはつたこともなかつた》。

彼は偶像を有つてゐなかつた。その代りに、彼は精神力と體力とを保つてゐた。その代りに、彼は貞操の誇を有つてゐた。彼からは或る爽快と力とが流れ出てゐた。だから、どんな無躾な女でも、彼の前に出ると知らず識らず愼しみの念を感じない譯にゆかなかつた。

彼は此の珍重な性質の價値を知つてゐたので、其の性質を惜みながら費つた。で、皆な彼を利己主義者だとか冷血漢だなどゝ言つた。彼もまた自分が情熱を制御したり、自然で自由な精神狀態の限界から飛び出ないやうにしたりし得ることを責めるばかりか、どうかすると力一ぱいに沼の中へ飛び込んで、自分と他人（ひと）との生活を破壞するやうな他人を羨望と驚愕とを感じながら、辯解することがあつた。

「情熱は、情熱は凡てを辯解するものだ。」と、彼の周圍（まはり）の人達は言つた。「だが君は自分の利己主義に閉ぢ籠つて、自分ばかりを守つてゐる。それは一體誰の爲めになるんだ。」

「何れ誰かの爲めに守つてゐるのさ。」と、彼は遠方を見ながら沈んだ調子で言つた。が相變らず情熱の詩を信じもしなければ、情熱の荒々しい現はれやその破壞の跡に捉はれもせず、人生の嚴密な理解と生活狀態との中に、人間の生活と希求との理想を何時までも見ようとしてゐた。

彼を攻擊すればするほど、彼は自分の頑固の中に《閉ぢ籠つた》。少なくとも議論したゞけでさへ淸教徒のやうな狂熱に陷るのであつた。彼は《人の普通の使命は、一年の四期、卽ち年齡の四期を一つも飛び越えずに生きて行き、生命を盛つた器を臨終の日まで持つて行き、その器から一滴も無駄に生命を零さないことであ

る。火が穏かに、そして靜かに燃えるのは、詩の焔を漂はす怖ろしい火事に優る。』と言つてゐた。また彼は其の結論として『若し自分で自分の信念を證據立てることが出來れば、幸ひであるけれども、自分の信念の立證と云ふことは、非常に困難なことであるから、其の立證は到底望み得ない。』と附け加へてゐた。

が、彼自身は矢張り自分の選んだ路を頑固に歩いてゐた。彼が何事かに就いて、病的に苦しさうに煩悶してゐるのを見かけた者はなかつた。見たところ、彼は疲れ果てた心臟の惱みを味はつたことがないものゝやうであつた。彼は精神を惱ましたことがなかつた。彼は複雜で面倒な事情や新らしい事情に衝突つても、落膽しなかつたばかりか、寧ろ以前の知人に對するやうに、之等の事情に近づき、一度住んだ場所のやうに、之等の事情を通り拔けた。

どんな事に出會しても、鍵番が帶に下つてゐる鍵束の中から、どの扉の爲に入用な鍵でも直ぐに選び出すやうに、彼は直ぐに當面の出來事の爲めに必要な方法を用ひた。

彼が一番尊んだのは、目的を達するに執拗なるべきことであつた。之は彼の眼に映ずる性格の特徴であつた。そして彼は此の執拗を有つてゐる人ならば、それが假令詰らない目的を有つてゐようと、決して尊敬することを辭さなかつた。

「此の人こそ人間だ！」と、彼は言つた。

彼が自分の目的に向つて進んでゐることは、附け加へる必要はない。彼は凡ての障碍物を乘り越えて、勇敢に進んだ。たゞ彼が目的を棄てるのは、彼の前途に壁が出來るか或は越える事の出來ない深淵が開けた時

だけであつた。

彼は眼を閉ぢて深淵を飛び越えたり、夢中に壁に攀ぢ上つたりするやうな勇氣を有つてゐなかつた。彼は深淵や壁を測つて、若しそれを越える確かな方法が無ければ、後歸りをして、人が彼のことを何と言はうが一向頓着しない。

斯うした性格を有つ爲には、シトーリッが有つてゐたやうな雜多な要素が要るらしい。我國の活動家は、昔から五六枚のステロ板に鑄込まれてゐた。彼等は氣懈さうに眼を半ば開いて周圍を見廻しながら、社會と云ふ機械に手を着けた。そして居睡をしながら此の機械を普通の軌道によつて動かし、その片足を先人が殘して行つた足跡に立てゝゐた。が、彼等の眼は突然居睡から醒めた。活潑な大きな足音や活々した聲が聞えた……幾人のシトーリッが露西亞人の名を冠して現はれるだらう！

斯うした人間がどうしてオブローモフと親しかつたのだらう？　オブローモフの態度と云ひ、遣り方と云ひ、生活狀態と云ひ、皆なシトーリッの生活に反對を叫ぶものであつた。が、之は既に解決された問題で、何でも正反對は、共鳴の動機にならないまでも、決して共鳴を妨げるものでないと云ふことは、既に昔の人が考へた所である。

のみならず、彼等二人を結び附けたものは、幼年時代と學校——この二つの強い發條であつた。それからオブローモフの家庭で、獨逸人の子供に豐かに注いだ露西亞流の快い濃厚な愛嬌であつた。それからシトーリッがオブローモフに對し肉體的にも精神的にも有してゐた強者としての役目であつた。が、最も強く二人

を結び附けたものは、オブローモフの天性の根柢に横たはつてゐる純潔で明るい善良な本源であつた。それはオブローモフが良いと思つたものと、此の單純で素直で永久に信用する心の叫びに對して應答する凡てに對して深い同情を有つものであつた。

此の明るい子供らしい心を、偶然にまたは故意に一瞥した者は、それがたとへ暗黑な惡意を有する人であつても、オブローモフとの應對を拒絶することは出來なかつた。また假令事情が彼に近づくことを妨げても、彼のことは美しい記憶にだけでも固く留まつてゐた。

アンドレイは度々仕事を中止し、世俗的な交際や晩餐會や舞踏會を斷つてまでもオブローモフを訪問して、其處の大きな長椅子に腰掛け、氣懈い談話のうちに、悸々した心を落着かせたり、落膽した心を引き立てたりした。そしてその時アンドレイは何時も莊麗な客間から自分の家の粗末な屋根の下へ歸つて來た時や、美しい南國の自然から子供の時分に散歩した樺林へ歸つて來た時に感ずるやうな安らかな情緒を味ふのであつた。

三

「イリヤ、今日は。久し振で會つて嬉しいよ！　どうだね、その後は？　壯健かね？」と、シトーリツは訊いた。

「いや、アンドレイ、どうもよくない。」とオブローモフはほつと溜息を吐いて言つた。「ちつとも壯健でないんだ！」

「ぢや、病氣かね？」と、シトーリツは心配らしく訊いた。

「眼丹が出來たんだよ。漸く先週に右の眼から一つ取れたと思ふと、今度は他のがまた出來たんだ。」

シトーリツは笑ひ出した。

「たつたそれだけか」と、シトーリツは訊いた。「それはあんまり寢過ぎたからだよ。」

「いや《たつたそれだけ》ぢやない。嘈囃にも苦しんでゐるんだ。君はこの前醫者の勸告を聞いた筈だねえ。《外國へ行くがいゝ。でないとよくない。ひよつとしたら、中風になるかも知れないから。》つてさ。」

「で、君はどうするのだね？」

「行かない。」

「何故？」

「だつて、聞いて呉れ。奴さん《あなたは何故か山の中でゞも暮した方がいゝから、エヂプトかアメリカへでもお出でなさい……》だなんて言ふぢやないか。」

「それが何だ？」と、シトーリツは冷淡に言つた。「エヂプトには二週間で行けるし、アメリカには三週間で行けるんだ。」

「ぢや、アンドレイ、君も矢張り行けと言ふのだね！　一人の理解者が來たと思つたら、其の男も發狂してるんだ。アメリカやエヂプトなんかへ行く者があるものか！　英國人かね、奴等はさう運命づけられてるんだ。

英國人は自國内では何處にも生活をしやうがないんだ。だが我國の者で誰が行くものか。生命を惜しいとも思はない絶望家か何かなら兎に角だが。」

「實際、一種の手柄だよ。車か船にでも乘つて、清潔な空氣を吸つて、外國の土地や市街や習慣や其他種々な珍らしいものを見るのだ……ねえ、君！　君の仕事と言ふなアどんな事だ、オブローモフカ村でどんな用事があるんだ？」

「あゝ！……」と、オブローモフは片手を振つて言つた。

「どうしたんだ？」

「生活が攪亂されてるんだよ！」

「それは結構なことだねえ！」と、シトーリッは言つた。

「何が結構だ！　こんな結構なことが、始終頭を撫でゝ臭れた日にや、まるで學校で溫柔しい生徒が亂暴者に附け纏はれて、そつと抓られたり、額の眞上から突然砂をぶつかけられたりするやうなものだ……やりきれたもんぢやない。」

「君は無闇に――溫柔しくなつたね。どうしたんだ？」と、シトーリッは訊いた。

「二つの災難に出會したんだ。」

「どんな？」

「すつかり破産して了つたんだ。」

「と云ふのは？」

「今、君に村長の手紙を讀んで聞かせよう……手紙は何處にあるんだ？　ザハール、ザハール！」

ザハールは手紙を捜し出した。シトーリッは手紙に眼を走らせながら笑つた。村長の字の間違ひが可笑しかつたらしい。

「此の村長は、何と云ふ悪者だ！」と、シトーリッは言つた。「百姓共を逃がして置いてそれを訴へてゐるんだ！　一層のこと百姓共に旅行券を渡して、四方八方へ逃して遣つた方がいゝぢやないか。」

「冗談ぢやない。そんなことをしたら、百姓共は皆な出て行つて了ふ。」と、オブローモフは反對した。

「出て行かして置くさ！」と、シトーリッは無雜作に言つた。「其處に居つて利益があると思ふ奴は逃げ出しやしないよ。百姓に利益がなければ、君にも利益はない。そんな者を留めて置いてどうする？

「君は飛んでもないことを考へ出すね！」と、オブローモフは言つた。「オブローモフカ村の百姓共は、皆な溫柔しい隱居染みた奴ばかりだよ。奴等が動搖する筈はない……」

「君は知らないんだね。」と、シトーリッは遮ぎつた。「ウェルフリョーウォ村では棧橋を作りたがつてるんだ。砂利路を通ずる計畫もあるんだ。だから、オブローモフカ村も大街道の近くになる。それに街では定期市を作つてゐるしね……」

「あゝ、大變だ！」と、オブローモフは言つた。「さうなつた日にや大變だ！　オブローモフカ村はあんな靜かな邊鄙な處にあつたのに、定期市とか大街道とかゞ出來たら大變ぢやないか！　百姓共は街へ出かけて行く、

村には商人共がどし〳〵入り込む――何も彼も滅茶滅茶だ！　それこそ災難だ！」

シトーリッは笑つた。

「さうだらう、災難ぢやないか！」と、オブローモフは續けた。「今迄百姓共は善いことも惡いことも何も聞かうとせず、たゞ自分の仕事ばかりしてゐたんだ。どんなものにも、心をひかれるやうなことはなかつた。ところが、近頃は奴等墮落してゐる。お茶や珈琲を飲んだり、天鵞絨の股引を穿いたり、ハーモニカを吹いたり、ピカ〳〵した長靴を履いたり……碌なことはありやしない！」

「成程、さう云ふ譯なら、無論、餘り結構なことはない。」と、シトーリッは言つた。「ぢや、君、村に學校を建てちやどうだ！……」

「早くはないかね？」と、オブローモフは言つた。「百姓に學問は有害だからねえ。百姓に學問をさせると、百姓をしなくなるよ……」

「さうぢやない、百姓に百姓の爲方を敎へるんだ――君は變人だねえ！　だが、聞き給へ。眞面目な話だが、君は是非今年村へ行つて來る必要があるね。」

「實際だ。が、僕の計畫がまだ悉皆出來上らないのでね……」と、オブローモフは悸々と言つた。

「計畫なんか要りやしないよ！」とシトーリッは言つた。「君が行きさへすればいゝのだ。どうすればいゝかと云ふことは、現場を見りや分る。君は餘程以前から何か頻りに計畫してゐたが、まだ悉皆出來上らないのかね？　一體何をしてゐるんだ？」

「だつて、君、僕の仕事は、村の事ばかりぢやないのだからねえ。まだも一つ災難があるんだよ。」

「どんな？」

「追ひ立てを喰つてるんだ。」

「追ひ立てを喰ふとは？」

「たゞ引越して呉れつて言ふだけさ。」

「ぢや、何でもないぢやないか？」

「どうしてだ？　僕はこんな心配をすると、手も足も出なくなる。たつた一人であれも爲なけりやならないし、これも爲なけりやならない。彼方には、勘定を爲なけりやならない、其處には支拂ひがある、此處にも支拂ひがある。それにこんどは引越だ！　金錢が恐ろしくかゝるんだ。僕自身も何處へ行つていゝか分らない！　そのうちに、金錢が一文も無くなつて了ふ……」

「意氣地のない男だねえ、引越に困るなんて。」と、シトーリッは吃驚して言つた。「金錢の話が出た序だが、君のとこに澤山あるかね？　五百留だけ貸して貰ひたいんだ。今直ぐに送金しなけりやならないんだ。明日會社から持つて來るが……」

「待つて呉れ！　考へて見るから……此間村から千留送つて來たが、今殘つてゐるのは……まア、待ち給へ……」

オブローモフは抽斗を一つ一つ捜し始めた。

「此處に……十留、二十留、此處に二百留ある……それから此處に二十留ある。まだ此處に銅貨があつた筈だが……ザハール、ザハール！」

ザハールは以前のやうな順序で寢煖爐から飛び降りて、室へ入つて來た。

「其處の卓子の上に、十哥銀貨が、二つあつたが、何處へ遣つた？　昨日俺が置いたんだが……」

「何を仰しやりやすだ、イリヤ・イリイーチ樣、十哥銀貨二つはお前樣受け取らつしやつたゞよ！　俺其處に十哥銀貨が二つ無いとお前樣に言つといたぢやねえだか……」

「無い筈はない！　蜜柑を買つて剩錢を呉れたんだから……」

「誰かに渡して、忘れて御座るだよ。」と、ザハールは扉口の方へ振り向きながら言つた。

シトーリツは笑ひ出した。

「成程、君等はオブローモフ家の人達だ！」と、シトーリツは詰責つた。「自分のポケットに幾らの金錢が入つてゐるか、知らないのだからねえ！」

「だが、先刻、ミヘイ・アンドレイチにどの錢を遣つただ？」と、ザハールは思ひ附いた。

「あゝ、さうだ、タランチエフも十留持つて行つた。」と、オブローモフは生々した調子でシトーリツに言つた。「僕はすつかり忘れてゐた。」

「何故君はあんな畜生を家へ入れるんだ？」と、シトーリツは言つた。

「入れやしねえだよ！」と、ザハールは遮つた。「だが、自分の家か居酒屋にでも來るやうに、入つて來やすだ。且那樣の襯衣でもチョツキでも持つて行く。それに何んと云ふ口の利き方だ！　此間なんざア、燕尾服を借りに來て、（俺に着せろ！）つて言うだ……アンドレイ・イワヌイチ樣、お前樣に少し彼奴を懲らしめて貰ひてえもんだがなア……」

「ザハール、お前の事ぢやない。彼方へ行け」と、オブローモフは嚴然として言つた。

「僕に書簡紙を一枚呉れ。」と、シトーリツは言つた。「手紙を書かなけりやならない。」

「ザハール、紙を持つて來い。アンドレイ・イワヌイチが要るんだ……」と、オブローモフは言つた。

「紙はねえだよ！　先刻もお前樣、捜したぢやねえか。」と、ザハールは玄關の間から答へて、室へ入つて來なかつた。

「切れ端か何かでいゝんだ！」と、シトーリツは强請つた。

オブローモフは机の上を捜したが、切れ端もなかつた。

「ぢや、名刺でもいゝ！」

「名刺は餘程以前から無い。」と、オブローモフは言つた。

「君は一體どうしたんだ！」と、シトーリツは皮肉に反駁した。「君は仕事の準備をしたり、計畫を書いたりしてゐるのだらうが、それにしてもどうか聞かせて呉れ、君は何處へ行つてゐるのだ？　誰に會つてゐるのだ？」

「何處へ行くつて？　餘り何處へも行かない。大方家に腰掛けてゐる。例の計畫のことが心配でしやうがな

いんだ。それに借間のこともあるしさ……が、有難いことには、タランチェフが熱心に捜して呉れるのでねえ……」

「誰か君の許へ來るかね？」

「來るとも……あのタランチエフと、も一人アレクセーエフが來る。先刻は醫者も寄つて行つたよ……ペンキンも來たしね、スディビンスキイやウォールコフも……」

「君の所には、書物がないやうだね。」と、シトーリッは言つた。

「書物は此處にある！」と、オブローモフは卓子の上に横たはつてゐる書物を指差しながら言つた。

「何と云ふ書物だね？」と、シトーリッは書物を見て訊いた。（アフリカ旅行記）だね。だが、君が讀みかけた頁には、黴が生えてるぢやないか。それに新聞も見えない……新聞を讀んでるかね？」

「いや、活字が小さいので、眼を惡くするから……それに必要もないからねえ。若し何か新らしい事でもあれば、一日の中に四方からそれを聞かして呉れるんだ。」

「イリヤ、冗談を言ふなよ！」と、シトーリッは驚異の視線をオブローモフの方へ向けて言つた。「君自身は何をしてるんだ？　煉粉の塊りのやうにドクロを卷いて寢てゐるぢやないか。」

「アンドレイ、全く煉粉の塊りのやうなもんだ。」と、オブローモフは悲しさうに答へた。

「でも意識してゐると云ふことは辯解になるかねえ？」

「いや、之は君の言葉に答へたまでさ。僕は辯解するんぢやないよ。」と、オブローモフは溜息を吐きながら

言つた。

「こんな夢から出る必要があるね。」

「以前には出ようと試みて成功しなかつたが、今では……何の爲に出るんだ？　何にも呼び出すものがない。精神も飛び出さうとしない。智慧は安眠してゐる！」と、オブローモフは些か悲し氣に言葉を結んだ。「だが、こんな話は止さう……それよりか君は今何處から來たんだね。」

「キエフ市からさ。二週間經つと外國へ出かけるのだがね、君も行つたらどうだ……」

「よし、伴れて行つて呉れ……」と、オブローモフは決心した。

「ぢや、卓子に向つて、願書を書いて、明日それを出し給へ……」

「もう明日直ぐに！」と、オブローモフは我に歸つて言ひ始めた。「馬鹿に急ぐんだねえ。宛然誰かに追はれてゐるやうだ！　考へた上で相談をしよう。だが、彼方へ行つてどうなるだらう！　先づ第一に村へ行つて、外國行きは……後にしよう……」

「何故後にするのだ？　醫者も命じたぢやないか？　君は先づ脂肪と身體の重量を捨て給へ。さうすれば、精神の眠りも飛び去るよ。身體と精神に體操をさせる必要がある。」

「いや、アンドレイ、そんなことをすれば、僕は益々疲れるばかりだ。僕は健康を害ねてゐるのだからね。だから、寧ろ僕には構はずに、君一人で行つて呉れ……」

シトーリッは横たはつてゐるオブローモフを見た。オブローモフもシトーリッを見た。

シトーリツは頭を振つた。オブローモフは溜息を吐いた。
「君は生きるのが懶いと見えるね？」と、シトーリツは訊いた。
「アンドレイ、實際さうだよ、懶いんだ。」
アンドレイの頭の中には、どうしたならばオブローモフが生々するだらうか、オブローモフの生々した處は、何處に在るのだらうかなどゝ云ふ疑問が廻轉した。然し、彼は默つたまゝオブローモフを眺めてゐた。が、俄かに笑ひ出した。
「どうしたんだ、君の穿いてゐる靴下は、片方は絹で、片方は木綿ぢやないか？」と、シトーリツはオブローモフの兩足を指差しながら俄かに言つた。「それにどうして襯衣を裏返しに着てゐるのだ？」
オブローモフは足を見て、次に襯衣を見た。
「實際だ。」と、オブローモフはおど〳〵しながら承認した。「あのザハール奴、僕を苦しめに來てゐるやうなものだ！　君には僕がどのくらゐザハールに困つてゐるか分るまい！　喧嘩はする、馬鹿なことは言ふ、その癖仕事は些つとも爲ないのだ！」
「ねえ、イリヤ・イリイーチ！」と、シトーリツは言つた。「僕は決して君を此のまゝにして置きはしないよ。一週間も經つたら、君は自分を見て驚くに違ひない。晩になつたら、僕と君に就いて考へてゐる僕の計畫を詳細に話さう。だが今は衣服を着給へ。いゝかね、うんと君を搖り動かすからね。ザハール！」と、彼は叫んだ。
「イリヤ・イリイーチに衣服を着せて呉れ！」

「何處へ行かうといふのだ？　今直ぐに、タランチエフとアレクセーエフとが晩飯を食ひに來るのだ。それから彼の人達の希望は……」
「ザハール、」と、シトーリツはオブローモフの言葉には耳も貸さずに言つた。「主人に衣服を着せて呉れ。」
「へい、アンドレイ・イワヌイチ樣、只今丁度靴を磨いて居りやすだ。」と、ザハールは機嫌よく言つた。
「何ッ？　お前は五時までに靴を磨いて置かなかつたのか？」
「磨いて置きやしたとも、もう先週のうちに磨いて置きやしたゞ。けれど旦那樣外戸に出ねえだで、再た曇つて了ひやしたゞよ……」
「ぢや、其まゝ持つて來い。それから俺の鞄を客間に入れて呉れ。俺は此處に宿るんだ。僕は直ぐに衣服を着るから、イリヤ、君も支度をし給へ。晩飯は何處か途中で食はう。それから二三軒訪問をするのだ。そして……」
「でも君……あまり突然ぢやないか……まあ待つて呉れ……一寸考へて見る……それに僕は髯も剃つてゐないい……」
「何も考へるこたアないよ。たゞ後頭部でも梳きつけて置きやいゝ……途中で髯は剃れる。僕が案内をするよ。」
「どんな家へ行くんだね？」と、オブローモフは悲しさうに叫んだ。「知らない人の許ぢやないかね？　何を考へ出すんだ！　僕はイワソ　ゲラシモーウィチの許へ行きたいのだ。三日も行かなかつたからね。」

「イワン・ゲラシモーウィチと云ふのは誰だね？」
「以前、僕と一緒に勤めてゐた男さ……」
「あゝ、あの白髪頭の監察官だらう！　どうしてあんな處が面白いのだ？　あんな木偶と一緒に時間を潰すとは、餘程君も好事家だよ！」
「アンドレイ、君は他人を滅多に悪く言はなかつたのに、どうしたんだ。それに、あの男は良い人物なんだ。たゞオランダ式の襯衣さへ着て歩かなけりやねえ……」
「君は彼の男の許へ行つて何を爲るんだ？　彼の男と何の話をするんだ？」と、シトーリッは訊いた。
「彼の男の許にゐるとねえ、君、何だか整然として居心地が良いのだ。室は小清楚してゐるし、長椅子は腰掛けると頭まで埋まつて、人が見えなくなるくらゐとつぷりと沈むしね。窓はきずたと神仙掌とですつかり覆はれてゐる。一打以上のカナリヤと三匹の犬がゐるしねえ。その犬がまた馬鹿に良い犬たんだよ！　卓子には、始終前菜が乗つてゐる。寫眞版はいつも家庭の光景を描いてゐる。行くと最後、歸るのが厭になる位だよ。何事も心配もせず、又考へもせずに腰掛けて居れるのだ。自分の傍に人がゐるのは分つてゐる……無論餘り悧口な人間ぢやない。だから其の人と理想の交換をしたり、思想の交換をしたりすることは出來ないさ。その代り狡猾な人間ぢやない。人の良い親切な野心のない人間だ。人を中傷するやうなことは、決してしない！」
「君等は何を爲るんだね？」

「何を爲るつて？　僕が行くと、長椅子の上に兩脚を組んで對坐するさ。先生は煙草を喫してゐる……」
「で、君は？」
「僕も矢張り煙草を喫んだり、カナリヤの囀り聲を聞いたりしてゐる。そのうちにマルファが沸湯器を持つて來る。」
「タランチエフにイワン・ゲラシムイチか！」と、シトーリッは眉を窄ませながら言つた。「さあ、速く衣服を着給へ。」と、彼は急かせた「では、タランチエフが來たら斯う言つて呉れ、」と、彼はザハールの方に向いて附け加へた。「僕等は家で飯を食はなんだつてね。それからイリヤ・イリイーチは夏ぢう家では飯を食はないし、秋になれば種々な仕事があるから、お前達に會ふことは出來ないつてね……」
「申しやすとも忘れずにすつかり申しやすだ。」と、ザハールは答へた。「か、晩飯はどうして置きやすべえ？」
「お前も誰かと一緒に身體の爲めになるやうな物を食べるがいゝ。」
「畏まりやした、旦那樣。」
十分間も經つと、シトーリッは衣服を着換へ、髯を剃り、頭髪を梳つて出て來た。が、オブローモフは憂鬱に蒲團の上に坐り、徐々と襯衣の胸を合せてゐた。が、釦は巧くかゝらなかつた。彼の前には、ザハールが皿か何かを持つてゐるやうな恰好で、汚れた靴を持つたまゝ、片膝を衝いてゐた。主人が襯衣の胸を合せて了つたら靴を履かせようと待つてゐるのであつた。
「まだ靴を履かなかつたのか！」と、シトーリッは吃驚して言つた。「さア、イリヤ、速く、速く！」

「だが、何處へ行くんだ？　そして何の爲にさ？」と、オブローモフは憂はし氣に言つた。「僕は何も彼も知つてゐるよ。僕は隱退してゐるんだ、行きたくない……」

「速くし給へ、速く！」と、シトーリツは急がせた。

四

もう大分遲かつたが、彼等は何處かへ行つて用を達した。それからシトーリツは或る採金業者を晩飯に誘つた。次に此の採金業者の別莊へお茶を飲みに行つた。其處には、大勢の知人達が集まつてゐた。オブローモフは孤獨の眞つたゞ中から突然に人の群へ入つた。彼等が家へ歸つたのは、もう深夜であつた。

翌日も其の翌日も斯う云ふ具合に送られた。で、此の週間は忽ち閃めき去つた。オブローモフは反對した、訴へた、議論をした。が、矢張り何かに引きつけられるやうに、自分の親友の行く處には何處へでも隨いて行つた。

或時、何處からか夜遲く歸つて來た時、オブローモフは何時もより激しく此の俗事に反對した。

「もう幾日となく、」と、オブローモフは夜衣を着ながら唸つた。「靴を脫いだことがない。足が痛くなつた！君達のこんなペテルブルグ生活は厭だよ！」と、彼は長椅子の上に横たはりながら續けた。

「ぢや、君はどんな生活が好きなんだ？」と、シトーリツは訊いた。

「此處のやうなこんな生活は厭さ。」

「此處の何がそんなに氣に入らないんだ？」

「何も彼も皆なだ。永久の競爭も、だらけた情慾、殊に貪慾の永久の遊戯も、人生行路の奪ひ合ひも、虛僞も、無駄話も、お饒舌の浴せ合ひも、足先から頭まで見廻すことも皆な厭だ。奴等が言つてる事を聞いてゐると、頭が昏々して胸が惡くなる。皆な見たところは賢明さうで、品位ある顏附をしてゐるが、（此の人はあれを貰つたよ。その人は租借權を得たよ）（驚いたね、どうしてだ？）などゝ誰か叫ぶのが聞える。此奴は昨日倶樂部で負けたんだ。彼奴は三千留儲けたよ！）だつてさ。怠屈だ、怠屈だ、怠屈だ！……何處に人間らしい處があるんだ？　何處に完全な人間がある？　何處に人間の完全が隱れてゐるのだ？　どうしてその完全はあんな下らないものと交換されるのだ？」

「世間と社會とは、何事かをしなけりやならないのだ。」と、シトーリツは言つた。「誰でも自分の趣味を有つてゐる。其處に生活が……」

「それが世間だ。社會だ！　アンドレイ、君は僕を故意と此の世間と社會とに追ひ込んで、其處に生活したいと云ふ希望を益々破壞しようとしてゐるらしいねえ。生活か、生活は結構だ！　だが、其の生活の中に、何を捜したものだらう？　理智と感情との興味を捜すのかね？　だが、君、見給へ、凡ての人達を自分の周圍に廻轉させる中心が何處にある？　そんなものは、ありやしない。深みがあつて人の肺腑を貫くやうなものは、何もないのだ。皆な死人だ。眠つてゐる人間だ。僕よりも惡い。之が世間と社會との會員なんだ！何が彼等を生活に入れるのだ？　彼等は横はつてゐない。蠅のやうに飛び廻りながら毎日眠つてゐる。どう

云ふ譯なのだ？　客間に入つても、お客達が立派に並んでゐるのを、溫柔しく考へ込んで――骨牌でもして
ゐるのを見ることは出來ない。何も言ふ事はない。實に立派な人生問題だ！　活動を求める智慧にとつて立
派な實例だ！　これでも彼等は死人ぢやないのだらうか？　彼等は坐つたまゝ一生涯眠つてゐるのだと言へ
ないだらうか？　僕が家に寢てゐて、三頭馬車や骨牌で頭を搔き亂さないのは、どうして彼等の爲ることよ
り惡いのだらう？」

「そんな話はもう陳腐なことで、もう何百遍となく話し合つたことぢやないか。何かも些と新らしい事はな
いかね？」と、シトーリッは言つた。

「だが、我國の立派な若者は何を爲てゐるのだらう？　ネフスキイ街道を歩いたり、馬車で駈けたり、舞踏
したりしながら眠つてゐるのぢやないだらうか？　毎日々々の空虛な變轉だ！　見給へ、傲慢に、妙に威張
つて、蔑すむやうな眼附で、誰某は自分達のやうな衣服を着てゐないとか、自分達のやうな名前や稱號を有
つてゐないなどゝ思ひながら、人々を見下してゐるぢやないか。そして不幸な彼等は、自分達が民衆より偉
いのだと想像して、（吾々は吾々以外に誰も務めたことのない務めをしてゐる。吾々は吾々以外の者の入るこ
とを許されなかつた日公爵家の舞踏會の時に、前列の安樂椅子に腰掛けた。）などゝ考へてゐる……そしてお
互に落ち合ひさへすれば、野獸のやうに飲んだり喧嘩をしたりする！　これが生きた眠らない人間と言へる
だらうか？　が、獨り若者ばかりぢやない。中年の連中を見給へ。集ると、お互に飲み食ひをする。其處に
は親切もなければ、善意もなく、お互の親密もないのだ！　午餐會や晩餐會に集つても、何の喜びもなく、

たゞ料理人や客間を褒めたり、手の蔭で愚弄したり、足を突出して他人の邪魔をしたりするくらゐで、役所
に居るやうに冷淡なものだ。一昨日の午餐會で、（あれは馬鹿だとか、これは背が低いとか、誰は盜人だとか、
誰は狂人だ）などゝ歸つた人の棚卸しが始まつた時、僕は何處を見てゐて良いか分らなかつたよ。一層卓子
の下へでももぐり込まうかと思つた程であつた。これこそ本當の闘犬だ！　奴等はこんな事を言ひながらも、
（お前も扉の外に出ると、矢張り斯う云ふ惡罵を浴せるぞ）と云つたやうな眼附をして、お互に見合つてゐる
んだ……こんなことなら、何の爲めに奴等は落ち合ふのだらう？　何の爲めにあんなに固くお互に手を握り
合ふのだらう？　眞實の笑も、同情の閃きもありやしない！　何でも大きな位置と名前とを引合に出さうと
してゐる。（俺の許には、しかゞの人が來た。そして俺は誰某の許へ行つた。）と言つて自慢し合つてゐる…
…これがどうして生活なんだ？　僕はこんな生活は厭だ。僕はこんな生活の中で、何を學ぶことが出來るだ
らう。何を誘き出すことが出來よう？」

「ねえ君、イリヤ、」と、シトーリッは言つた。「君は昔の人が言ふやうなことを言つてゐるよ。昔の書物に
は、大概そんなことが書いてあつたものさ。が、それもいゝ。少くとも議論をして、眠つてゐないからねえ。
で、それから？　も少し續けたらどうだね。」

「何を續けるんだ？　まあ見給へ、此處には誰も爽やかで健康な顏色をしてゐる者はないぢやないか。」

「それは氣候の所爲だよ。」と、シトーリッは遮つた。「第一、君の顏なんか皺だらけぢやないか。それに君は
駈け廻らずに、何時も寢てばかしゐる。」

「晴やかな落着のある顔附をした者は、一人もゐやしない。」と、オブローモフは續けた。「皆な或る重苦しい心配と悲哀とに感染して、病的に何物かを捜してゐる。彼等は眞理や幸福の實を自分の爲めにも他人の爲めにも見附けることが出來ず……友人の成功を妬んで蒼くなつてゐる。或者は、明日裁判所に行かなければならぬ心配がある。事件はもう五年も續いて、しかも相手の方が勝つてゐる。彼は五年間頭の中にたつた一つの考へと希望とを有つてゐたのだ。それは、相手を倒して、相手の倒れた上に自分の幸福を建てようと云ふのだ。五年間、歩いたり、腰掛けたり、待合室で溜息を吐いたりすること――これが人生の理想であり、且つ目的なのだ！　また或者は、毎日出勤して、五時まで腰掛けてゐなければならぬ運命にあることを零してゐる。かと思ふとまた或者は、斯うした恩惠に與からないことを頻りに歎息してゐる……」

「イリヤ、君は哲學者だ！」と、シトーリツは言つた。「皆な齷齪してゐるのに、たゞ君にだけは何物も要らないのだからねえ！」

「其處で、此の顔の黄色い眼鏡をかけた一紳士がだれ、」とオブローモフは續けた。「何とか云ふ議員の演說を讀んだかと頻りに僕に訊ねるのだ。僕は新聞を讀んでゐないからと言ふと、先生僕に對して眼を露いて見せた。それから話はリユードウイク・フイリツプのことになり、先生、此の人を自分の生の父親か何かのやうに言ふんだ。それから、何故フランスの公使はローマを去つたか、僕がそれをどう思つてゐるかと纍みかけて訊く。斯うして一生涯自分に世界中の毎日のニユースと云ふ重荷を負はせ、聲の出る間は一週間でも叫んでゐる！　今日は、メクメート・アリが軍艦をコンスタンチノポルに派遣したが、何の爲めだらうなどゝ頭を捻る。明日は、ドン・カルロスが成功しなかつたと言つて頻りに恐慌する。彼處では運河を掘つてゐるとか、此處では軍隊を東方へ送つたなどと言つて、先生躍起になつてゐる！　そして自分自身に軍隊を向けられでもしたかのやうに顏色を失つて走せ廻つたり、叫んだりしてゐる。彼等は種々樣々なことを縱横から考へたり、想像したりする。が、自分自身のことを考へるのは退屈なんだ。これは彼等の興味を唆らないのだ。しかも彼等の叫び聲の下には、永久に眼醒めない眠が横はつてゐる！　が、それに對して彼等は無關心だ。彼等は自分の帽子を被つて歩かないのだ。彼等は自分の仕事を有つてゐないのだ。彼等は何處へでも突進して行くが、何處に行くと云ふ當もない。此の抱擁力の下に空虛と凡てに對する同情の缺乏とが潜んでゐる！　地味な苦痛の多い小徑を選んで、其の小徑を進み、其處に深い軌道を刻み附けると云ふこと――これは無論退屈で見榮のしないことだからねえ。其處では、博識と云ふことなど、何の役にも立たない。また誰かの眼に塵を入れることも出來ないのだ。」

「でも、イリヤ、僕等は突進しなかつたよ。僕等の地味な苦痛の多い小徑と云ふのは何處にあるんだね？」と、シトーリツは訊いた。

オブローモフは俄かに默つた。

「僕は計畫だけを……終らう……」と、彼は言つた。「奴等は勝手なことを爲るがいゝさ！」と、彼はやがて悲しさうに附け加へた。「僕は奴等には干渉しないよ。また何物をも求めはしない。僕はたゞ此處に常規的な生活を見ないまでだ。實際あれは生活ぢやない。あれは、生活の常規と自然が人間に目的として示した生活の

理想と破壊だ……」

「その生活の常規とか理想とか云ふのは何だね？」

オブローモフは答へなかつた。

「ぢや、君はどんな生活を描きたいのだ？」と、シトーリツは問ひ續けた。

「僕はもう描いたよ。」

「どう云ふ風に？　どうか聞かせて呉れ、どう云ふ風に？」

「どう云ふ風につて？」と、オブローモフは仰向になつて天井を眺めながら言つた。「さうさ、先づ村に行かうと思ふんだ。」

「それは、勝手さ」

「計畫はそれだけぢやない。次に僕は一人ぢやなく妻と一緒に行くんだ。」

「おい！　どうしたんだ！　何を待つてるんだ？　まだ三四年は誰も君のとこへ來やしないよ……」

「それは仕方がないさ、だが、それは運命ぢやないんだ！」と、オブローモフは溜息を吐きながら言つた。

「財産が許さないのだ。」

「そんなことがあるものか、オブローモフカ村があるぢやないか？　三百人の百姓があるぢやないか！」

「あれが何だ？　妻と一緒にどうして暮して行ける？」

「二人で、どうして暮して行くつて？」

「子供が生れるぢやないか？」

「子供達は育てゝやれば、自然に何とかなる。たゞその方向さへ決めてやれば……」

「いや、貴族から職人は出來やしないよ！」と、オブローモフは冷淡に遮つた。「それに子供の外にどうして二人で暮せる？　妻と二人と云ふのは、たゞ言ふだけで、實際は結婚をすると、直ぐ僕の家には百姓の女房共がやつて來るのだ。此の家庭を見給へ。親戚の女や親戚でない女や家政婦でない女など、たとへ一緒に暮さないまでも、毎日珈琲を飲んだり、晝飯を食つたりしにやつて來る……三百人の百姓でどうしてこんな寄宿舍を養つて行ける？」

「よし、ぢや、君に更に三十萬留も呉れる者があつたら、君はどうするかね？」と、シトーリツは強い好奇心に驅られながら訊いた。

「直ぐに貸付銀行へ預けて、」と、オブローモフは言つた。「利子で暮すさ。」

「そんな銀行は利子が安いよ。どうして何處かの會社、速い話が僕等の會社にでも預けないんだ？」

「駄目だよ、アンドレイ、僕は瞞されやしないよ。」

「瞞すものか。君は僕を信じないのかね？」

「決して信じない。君の言ふことは當にならないからねえ。だが、そんな事でもあつてくれても惡くはないんだが。今、僕は一文なしで閉口してゐるんだ。銀行なんかに用事がありやしない。」

「まあいゝ、呉れたら君はどうする？」
「其時は新築の靜かな家に行くさ……周圍（あたり）には心持の良い人達が、例へば君が住んでゐる……だが、君は一つ處に凝つとしてゐられないのだね……」
「ちや、君は何時までも凝つとしてゐるつもりなんだね？　何處へも行かないつもりだね？」
「決して何處へも行かない！」
「然し、若し生活の理想が一つ處に坐つてゐることなら、どうして人々は到る處に鐵道を敷いたり、汽船を走らせたりしようとするのだ？　イリヤ、そんな事を中止するやうにと云ふ議案でも出さうか。僕等は何處へも行かないのだから。」
「僕等が乘らなくても、乘る者は澤山あるよ。支配人や執事や商人や役人や暢氣な旅行者など、際限なく歩きたがる連中が澤山にゐるからね。勝手に旅行させて置くがいゝ……」
「ちや、君は一體何者なんだ？」
オブローモフは黙つてゐた。
「君は社會のどう云ふ部類に屬してゐると思つてゐるのだ？」
「ザハールに訊いて見たまへ。」と、オブローモフは言つた。
シトーリツは言葉通りにオブローモフの希望を實行した。
「ザハール」と、彼は叫んだ。

ザハールは眠さうな眼附をして遣つて來た。
「此處に寢てゐるなア誰だ？」と、シトーリツは訊いた。
ザハールは俄かに眼を醒まし、藪睨みで不審らしくシトーリツを見て、それからオブローモフを見た。
「誰だとは何故でがすだ？　お前樣に見えねえだか？」
「見えない。」と、シトーリツは言つた。
「妙な人でねえか？　これは旦那のイリヤ・イリイーチ樣だに。」
シトーリツは笑つた。
「よし、彼方へ行け。」
「旦那樣！」と、シトーリツは繰り返して、アッハッハッと腹を抱へて笑つた。
「いや、ゼントルマンだよ。」と、オブローモフは悲しさうに言ひ直した。
「いや、いや、君は旦那樣だ！」と、シトーリツは笑ひながら續けた。
「どんな違ひがあるんだ？」と、オブローモフは言つた。「斯う云ふ旦那をゼントルマンと云ふんだ。」
「ゼントルマンと云ふのは、」と、シトーリツは言つた。「靴下も自分で履くし、靴も自分で脱ぐ旦那のことだよ。」
「それは英國人だ。英國人には召使が少ないからさ。だが、露西亞人は……」
「それより、續けて君の生活の理想を描寫し給へ……さア君の親しい友達が周圍（まはり）に居る。で、それから？

君は自分の一生涯をどう云ふ風に送るつもりだね？」

「ではねえ君、朝起きるだらう。」と、オブローモフは頭の後部に兩手を敷きながら言ひ始めた。彼の顏には平和の色が漲つた。彼はもう村にゐるやうな氣持である。「天氣は好く、空は眞青で、一片の雲もない。」と、彼は言つた。「計畫によると、僕の家の一方は、東向の露臺で、庭と畑とへ向いてゐる。他の一方は、村の方へ向いてゐる。妻が起きるのを待つてゐる間、僕は寢卷を着て、朝の空氣を呼吸する爲に庭の中を歩き廻る。其處にはもう園丁がゐる。僕は彼と一緒に花に水を遣つたり、灌木や大木の枝を鋏んだりする。また妻の爲めに花束を作る。それから、浴室か河かへ水浴に行く。歸つて來ると――露臺はもう開けてある。妻は上衣を羽織り輕い頭巾を被つてゐる。頭巾は辛つと頭に乘つてゐて、も少しで辷り落ちさうになつてゐる……妻は僕を待つてゐる。（お茶が入りましたわ）と、彼女は言ふ。何と云ふ接吻だらう！　何と云ふお茶だらう！　何と云ふ平和な安樂椅子だらう！　僕は卓子の傍に腰掛ける。卓子の上には堅パンやクリームや新らしい牛酪が載つてゐる……」

「それから？」

「それから、悠たりとしたフロックコートか或は上衣のやうなものを着て妻の腰を抱いて、一緒に長くて薄暗い並木路へ入る。靜かに考へ沈みながら默つて歩くか、或は考へや空想を語つたり、幸福の瞬間の脈搏を算へたり、心臟の感激と鼓動を聞いたり、自然の中に同感を求めたり……徐々と河や畑へ行つたりする……河は輕く波立つてゐる。穗は風の爲めに波打つてゐる。熱さが激しい……小舟に乘る、妻が櫂を取る、櫂を辛つ

と持ち上げる……」

「イリヤ、君は詩人だ！」と、シトーリツは遮つた。

「さうだよ、生きてゐるうちは詩人さ。何故つて、生活は詩だからね。其の詩を破壞することは、人々の勝手だ！　次には果樹園へ入る。」と、オブローモフは描かれた幸福の理想を呼吸しながら續けた。

彼はもう疾うから描いてゐた光景を想像の中から抽き出し、それに感激して止め度もなく饒舌つた。

「桃と葡萄とを見廻り。」と、彼は言つた。「食卓に出すべきものを言ひ附け、やがて家へ歸つて、淡白りと朝飯を濟し、そして客を待つ……其處にマリヤ・ペトロウナとか何とか云ふ女から妻に宛てゝ書物や樂譜と一緒に手紙が來る、或は贈物としてアナナスが來る。でなけりや、自分の溫室に非常に大きな水瓜が熟する――良い親友に明日の晩餐にと云つて送つて遣る。そして僕も其處へ出かけて行く……此の時、料理部屋では大騷動をしてゐる。料理番は雪のやうに白い前掛を着け頭巾を被つて忙しさうにしてゐる。一つの燒鍋をかけるかと思ふと、他の燒鍋を下ろす。彼方で火を熾してゐるかと思へば、此方では粉を捏ねてゐる。彼方では水を振つてゐる……小刀の音もする……青物を切る音もする……彼方ではアイスクリームを廻してゐる……晝飯前の料理部屋を覗いて見ると面白い。燒鍋を開けたり、匂を嗅いだり、肉入パンを丸めたり、クリームを取つたりしてゐる。それから長椅子の上に横になる。妻は聲高に何か新らしい物を讀む。二人は讀むのをやめて、議論をする……が、其の時客が來る。例へば、君が細君と一緒にさ。」

「ぢや、君は僕にも妻を持たせるのだね？」

「屹度持たせる！　まだ二三人の親友が來る。皆な同じやうな顔附をしてゐる。昨日言ひ殘しの話を始める。冗談が出るか或は雄辯な沈默や默想や――それは位置を失つた爲めでもなければ、元老院の仕事の爲めでもなく、希望の飽滿からなのだ――歡樂の逡巡が始まる。居ないものに對し、口角泡を飛ばすやうな罵倒を開くことはない。君が扉の外に出ると直ぐに君にも其の罵倒を約束するやうな眼附を投げつける者もない。皆な愛すべき人物だ。皆な善良な人達だ。パンを鹽皿に入れるやうな者もない。話相手の眼には同情が見える。冗談の中にも誠意がある。嘲笑惡罵と云ふやうなものはない……皆な眞心から交際をする。眼や言葉に現はれることは、心にあることなのだ！　午餐が濟むと、モーカ珈琲が出る。吊露臺に上つて……」

「君が僕に描いて見せるのは、祖父や父親時代の事と同じだ。」

「いや、そんな筈があるものか、」と、オブローモフは憤慨せんばかりに答へた。「何處にそんな處がある？　僕の妻はジャムや茸などを食べやしない。束絲を算へたり、田舍の手織布を解いたりしやしない。娘の頰を敲きもしない。樂譜や書物や大ピアノや華美な家具などは、昔見ることの出來なかつたものだ。」

「だが、君自身は？」

「僕自身は去年の古新聞を讀みはしない。古風の馬車に乘りもしない。素麵も雁も食べない。英國倶樂部か公使館かで料理人を教育してやるさ。」

「それから？」

「それから、涼しくなつたら、荷車に沸湯器とデザートとを載せて、樺林か、でなければ畑の草刈場に行き、積草の間に絨毯を敷き、愉快にオクローシカやビフテキなどを食べる。百姓共が野良から遣つて來る。鎌を肩に擔いでさ。其處には、枯草を積んだ荷車が這ふやうに動いてゐる。馬も車も枯草に覆はれて見えない。上の方の積草から、花を附けた百姓の帽子や子供の頭が突き出てゐる。彼處では、跣足になつた一群の百姓の女房達が鎌を持つてガヤ〳〵と何事か饒舌つてゐる……突然主人達を見附けると、靜かになつて、丁寧にお辭儀をする。其中で日に焦けた頭を出し、衣服から肱を露き出し、怯々と伏眼にした狡猾さうな一人の女房は、表面だけは主人の愛嬌を避けるやうにしてゐるが、その實自分は幸福を感じてゐる……チエ！……妻が見ないで呉れるといゝが！」

オブローモフ自身もシトーリツも腹を抱へて笑つた。

「そのうちに畑は濕々して來る。」と、オブローモフは言葉を結んだ。「暗くなる。霧は海をひつくり返したやうに、裸麥の上に擴がる。馬は肩を振り、蹄で地面を掻く。家に歸る時になる。家ではもう燈火が輝き出す。料理部屋では、五本の小刀の音がする。茸の燒鍋とカツレツと果實とを持つて來る……音樂が始まる……Casta diva……Casta diva!」と、オブローモフは歌つた。「僕は Casta diva を冷靜に想ひ起すことは出來ないのだ。」Ca vatina の初を歌つて了ふと、オブローモフは斯う言つた。「此の女は心から泣いてゐる！　此の音の中には、何とも言へない悲調がある。誰も知らない……周圍には何もない……たゞ彼女一人である……神祕が彼女を引き附ける。神祕は彼女を月に委ねる……」

「君は此の歌曲が好きなのだね？　大いに愉快だね。オリガ・イリインスカヤは之を上手に歌ふよ。君を紹

介しよう――聲も好いし、歌ひ方など素敵だ！　しかも彼女は魅力のある子供のやうだ！　尤も、僕は或は偏した批評をしてゐるかも知れない。僕には彼女に對して弱點があるのだから……けれど、それは兎に角、君は捉はれちゃ不可ないよ、捉はれちゃ。」と、シトーリッは附け加へた。「さア、其の次を話し給へ！」

「さア。」と、オブローモフは續けた。「まだ何があるかなア？……もう大概こんなものだ！……お客は皆なそれ〴〵傍屋や假屋へ散々になる。が、夜が明けると、或者は魚釣りに行き、或者は獵銃を持つて出かける。が、或者は相變らず凝つと自分の室に腰掛けてゐる。」

「手に何も持たずに？」と、シトーリッは訊いた。

「君なら何が要るかね？　ぢや、手巾でも持つてるといゝさ。どうして君は凝つとして暮すことが出來ないのだらう？」と、オブローモフは訊いた。「え？　それぢや生活ではないと云ふのかね？」

「一生涯さうしてかね？」と、シトーリッは訊いた。

「白髮が生え、棺の中に入るまでさ。それが生活なんだ！」

「いや、それは生活ぢやない！」

「どうして生活ぢやないのだ？　斯うした生活に何の不足があるのだ？　考へて見給へ、君はまだ蒼白い顏をした受難者も憂慮も、元老院や取引所や、株式や報告書や、大臣の宴會や位階や、食費の增加などに關する問題も見ないんだよ。談話は心からのものばかりだよ！　君には引越の必要が決してないんだよ――たゞ引越をしないと云ふ一事が、どのくらゐ價値のある事か分りやしない！　でも生活でないと云ふのかね？」

「それは、生活ぢやない！」と、シトーリッは頑固に繰り返した。

「ぢや、君はこれを何と思ふんだ？」

「それは……（シトーリッは考へた。そして此の生活の名稱を捜した。）さうだねオブローモフ主義とでも言ふかね。」と、彼は遂々言つた。

「オブ……ロ……モフ主義！」と、オブローモフは徐かに言つて、此の異樣な言葉に驚き、此の言葉を一綴宛に分解して見た。「オブローモフ主義！」

オブローモフは異樣な顏附をして凝つとシトーリッを見詰めた。

「君の考へによると、生活の理想は、何處にあるのだ？　何故オブローモフ主義でないのだ？」と、オブローモフは靜に悸々と訊いた。「誰でも僕の空想してゐるものを捉へると云ふ譯に行かないだらうか？　さうぢやない。」と、彼は元氣よく附け加へた。「それに君等の遣つてゐる奔走や慾望や、戰爭や商業や、政治などの目的も、平和の建設ぢやないか。失はれた樂園の理想に向ふことぢやないか？」

「でも、君のオブローモフ主義はユートピヤだねえ。」と、シトーリッは反對した。

「誰でも休息と平和とを求めてゐる。」と、オブローモフは辯解した。

「皆ぢやない。君自身だつて、十年間の生活の中にそれを求めなかつた。」

「ぢや、僕が何を求めたと云ふのだ？」と、オブローモフは過去を思ひ耽りながら不滿らしく訊いた。

「考へて見給へ。君の書物と君の飜譯とは何處にある？」

「ザハールが何處かにしまつてゐるのだ。」と、オブローモフは答へた。「何處か其處らの隅に轉がつてるだらうよ。」

「隅に！」と、詰責るやうにシトーリツは言つた。「では、（力の有らんかぎり務めなけりやならない。何故つて、露西亞に涸れざる泉を掘り出すには、手と頭とが要るからだ。）之は君の言葉だ。（更に樂しい休息をする爲めには、働かなけりやならない。が、休息すると云ふことは、生活の他の方面、つまり技巧的で華やかな方面を、卽ち藝術家や詩人の生活方面を生活することの意味である）と云ふ君の思想も、矢張り其の隅に轉がつてゐるのだらう。矢張りザハールがさう云ふ思想を皆な隅に押し込んで了つたのかね？　君は書物を讀んで了つたら、よりよく自分の國を知り、そして愛する爲めに、外國を旅行したいと言つたのを覺えてゐるかね？（凡ての生活は思想と勞苦だ）と、君は其時言つたぢやないか、（勞働は、たとへ裏面的で且つ暗黑でも、然し斷たるべからざるものである。自分の仕事を爲たと云ふ意識を持つて死にたい。）どうだ？　此の思想は、今何處の隅に轉がつてゐるんだ？」

「さうだ……さうだ……」と、オブローモフはシトーリツの一言々々に不安らしい返事を與へながら言つた。「確かに憶えてゐる……はてな……どうだつたか知ら、」と、彼は突然過去のことを想ひ出して言つた。「アンドレイ、僕等は最初スウヰツルを徒歩で旅行し、ヴェスキヤ山上で足を炙り、ヘルクランに下つて、歐羅巴を縱橫に旅行するつもりだつたね。も少しで發狂する所だつた！　隨分馬鹿々々しい事だ！」

「馬鹿々々しい事だつて？」と、シトーリツは詰責るやうに言つた。「君はラファエルのマドンナ（コルレヂの夜）の寫眞版と、（ベルウェデルのアポルロン）とを見た時に、（あゝ！　こんな獨創を見たり、ミケル・アンゼロやテイチアンの作物の前に立ち、ローマの地を踏んでゐると云ふ恐怖から聲が出なくなつたりするやうなことは、とても出來ることぢやない。數世記經つても、マートルやキパリスや橙などをその生地で見ることは出來やしない。たゞ果樹園で見るだけだ。伊太利の空氣を呼吸することも、空の靑藍色を味ふことも出來ない！）などゝ涙を流しながら言つたぢやないか。隨分壯麗な花火を頭から打ち出したぢやないか！　馬鹿々々しい事だらうねえ！」

「さうだ、さうだ、憶えてゐる！」と、オブローモフは過去を思ひ出しながら言つた。「君は其時、僕の手を取つて（それを見ない間は決して死ないやうに約束しよう）と言つたねえ。……」

「さうだ、憶えてゐる！」と、シトーリツは續けた。「それに、君は或時僕の聖名祭を記念する爲めにセイを譯して持つて來たことがあつたが、其の譯は今も僕のところに保存してある。また君は數學の敎師と一緒に閉ぢ籠つて是非圓と正方形とを修得しようとしたが、途中で止して了つた……英語も勉强し始めた……が、矢張り君は遣り通さなかつた！　僕が外國旅行を計畫して、獨逸の大學を見物しようと言つた時なんか、君は飛び立つて僕を抱き嚴かに僕に手を差し伸べながら（アンドレイ、君の友なる僕は、君と一緒に何處へでも行くよ。）と言つた――之は皆、君の言葉だ。君は今迄餘り技巧家ではなかつた。どうしたんだ、イリヤ？　僕は二度も外國へ行き、我々の大智識の後でボンやイエナやエルランゲンなどの大學で溫柔しく勉强をして來た。それから自分の財産として、歐羅巴を研究した。だが、此の行き方――之は贅澤だ、誰でも此の方法を取る

ことは出來ない。又取らなければならぬものでもない。が、露西亞はどうだらう？　僕は露西亞を見て、初めて努力する氣になつたのだ……」

「でも、何時か努力を止めなけりやなるまい。」と、オブローモフは言つた。

「決して止めない。何の爲めに止める必要があるんだ？」

「君の資本が二倍になつた時にさ。」と、オブローモフは言つた。

「たとへ資本が四倍になつても、決して止めない。」

「それは、何故だ」と、オブローモフは暫く默つてゐた後で言つた。「若し君の目的が君を永久に安心させず、やがて君を平和と休息とから遠ざけるものであつたら、君は何の爲めにそんなに齷齪してゐるのだ？……」

「それは、田舍のオブローモフ主義だよ！」と、シトーリツは言つた。

「それなら、勤務で社會に名譽と地位とを得、次に尊敬の中に活動を止め、相當の休息を樂しむのは、どうだ？……」

「それは、ベテルブルグのオブローモフ主義さ！」と、シトーリツは反對した。

「それなら、何時生活するのだ？」と、シトーリツの言葉を悲むやうにオブローモフは反對した。「何の爲めに一生涯苦しむのだ？」

「勞働其者の爲めで、それ以外何の爲めでもない。勞働は形式であり、內容であり、少くとも僕の生活の要素であり、目的である。ところが、君は生活から勞働を放逐してゐる。さうした生活は、何に似てゐるだらう？　これが最後かも知れないが、兎に角僕は君を起たせようと試みてゐるのだ。若し君が今後もさうして此處にタランチエフやアレクセーエフなどゝ一緒に坐つて居れば、君は全く亡びて了ふ。そして自分さへ面倒になる。此時を逸すれば永久に機會は來ない」と、彼は結んだ。

オブローモフは吃驚したやうな眼附でシトーリツを見ながら、彼の言ふことを聞いてゐた。親友から自分の前に鏡を立てられたかのやうに、オブローモフは自分を知つて驚いた。

「アンドレイ、そんなに僕を罵るな。それより實際に僕を助けて呉れ！」と、オブローモフは溜息を吐きながら言ひ始めた。「僕は自分でもこれに苦しんでゐるのだ。若し君がせめて今日だけでも、自分自身の爲めに墓を掘つてゐる僕を見、自分の爲めに泣いてゐる僕の言葉を聞いてくれたら、こんな罵倒は君の舌から出る筈はない。僕は何も彼も知つてゐる。何も斯も分つてゐる。が、力と意志とが無いのだ。僕に自分の意志と智慧とを呉れ。僕を君の好きな處に伴れて行つて呉れ。僕は屹度君の後に隨いて行くが、一人では一寸動けない。君が（此時を逸すれば永久に機會は來ない）と言つたのは本當だ。もう一年經つと、もう取り返しがつかなくなる！」

「君、君はイリヤかね？」と、アンドレイは言つた。「僕の記憶するところによると、君は細そりした元氣のいい子供で、毎日ブレチステンカからクドリノまで歩いて行つたものだ。其處の小さい庭で……君は二人の姉妹を忘れやしまいね？　ルーソーやシルレルやゲヨーテやバイロンを忘れはしまいね？　君は斯うした書物を姉妹のところへ持つて行つて、彼女達の持つてゐるコツテニやジヤンリスの小說を取り上げ……彼女達の

前で大いに勿體ぶつて彼女達の趣味を淳化しようとしたぢやないか？……」

オブローモフは蒲團から飛び起きた。

「アンドレイ、君もそんな事を憶えてゐるんだね？　どうして僕が忘れるものか！　僕は彼女達と一緒に空想もし、將來に對する希望を囁き、計畫や思想や……それから感情さへも、君から笑はれないやうに靜かに發展させたことがある。ところが、そんなものは皆な死んで了つた。其後一度も繰り返されなかつた！　あれは皆な何處へ行つたのだらう……どうして消えて了つたのだらう？　僕には合點が行かない！　嵐も動搖も僕には無かつたのに。僕は何も失はなかつた。如何なる軛も僕の良心を束縛しやしない。僕の良心は鏡のやうに澄んでゐる。何の打擊も僕の自愛心を殺しはしない。が、どうしたのか、此の通り何も彼も亡びて了うたのだ！」

オブローモフは溜息を吐いた。

「アンドレイ、君は僕の生活の中に、今迄一度も救助的の火や破壞的の火が燃えたことがないことを知つてゐるだらうねえ？　僕の生活は、朝のやうではなかつた。朝になると、次第に色彩と光とが消える。やがて朝は、他の人々に見るやうに、晝に變つて行く。暑さが焰のやうに燃える。何も彼も沸騰する。光り眩ゆい眞晝に活動をする。それから次第に靜まり、次第に蒼白めて、凡ては自然に次第々々に夕闇の中に消えて行く。ところが、僕の生活は夕暮から始つたのだ。妙ちやないか。けれどもこれは斯うなんだ！　僕は自覺した最初の瞬間から、自分がもう消えつゝあることを感じたのだ。先づ僕は役所で書類を書いてゐるうちに幻滅し

始めた。次に書物を讀んで眞理を知り、其の眞理を實生活にどう云ふ具合に應用したものかと思ひ惑つた時に幻滅した。噂や虛言や罵り合や悪辣な讒誣や空言などを聞いたり、目的も同感もない會合によつて友情が保たれてゐるのを見たりした時に、僕は友人なるものに對して幻滅した。ミーナの爲にも幻滅したり、力を失なつたりした。ミーナには自分の收入の大部分を拂つて、彼女を愛してゐると想像してゐたのだ。僕は憂鬱で氣懈い心持を抱き、穴熊の皮で作り襟にラッコ皮を附けた外套を着てネフスキイ大街を逍遙した時に、それから晩餐會の時に、立派な花婿になるやうに僕に好意を示された招待日に幻滅した。街から別莊に、別莊からゴロホーワヤ街道へ移つた時にも、春を牡蠣と鰕とで、秋と冬を寢床で、夏を散歩で、一生涯を他の人達のやうに氣懈い平和な微睡で決定した時にも、幻滅して、生命と智慧とを少しづゝ消失させた。……自愛心――之は何に消費されたらう？　有名な裁縫師に衣服を註文することにだらうか？　兎に角、自愛心は生活の鹽だよ！　そることにだらうか？　ペー公爵から握手を受けることにだらうか？　兎に角、自愛心は生活の鹽だよ！　その自愛心は何處へ行つたのだらう？　僕は此の生活を理解しなかつたのだらうか、それとも此の生活は何の役にも立たないのだらうか？　僕は良い何ものをも知らなかつた。誰も僕にそれを見せて呉れなかつた。君は丁度彗星のやうに輝やかしくパッと現はれると、すぐに消えて了つた。僕は何も彼も忘れて、幻滅したんだ……」

シトーリツはオブローモフの言葉にもう輕卒な嘲笑で答へなかつた。彼は聞きながら氣むづかしい顏附をして默つてゐた。

「君は先刻僕の顔が晴々してゐないばかりか、皺だらけだと言つたねえ。」と、オブローモフは續けた。「さうだ、僕はずた〳〵に着古した外套なんだ。けれども、それは氣候の所爲でもなければ勞働の所爲でもない。それは、十二年の間僕の內部に閉ぢ籠められてゐた光が、出口を求めて出ることが出來なかつた爲めに、自分の牢屋を燒いたからだ。此の光は、自由になり得ずに消えた。親愛なアンドレイ、僕は斯うして十二年間過したのだ。だからもう醒めようと云ふ氣は、更になかつたのだよ。」

「君は何故飛び出さず、何處へも逃げずに、默つたまゝ自滅するのだ？」と、シトーリツはもどかしさうに訊いた。

「何處へ？」

「何處へ？　百姓達を伴れてウォルガ河へ行つてもいゝぢやないか。彼處へ行けば、もつと活動もあるし、何か興味や目的や努力などもある。僕ならシベリヤかシトハ邊へ行くがねえ。」

「君は直ぐに亂暴な方法を敎へて吳れるから困るよ！」と、オブローモフは悲しさうに言つた。「それに僕は一人ぢやないのだからねえ。見給へ、ミハイロフやペトロフやセミョーノフやアレクセーエフやステパーノフなど……數へきれやしない。一家一大隊ぐらゐあるのだ！」

シトーリツはまだ前の告白に感動させられて、默つてゐたが、やがて溜息を吐いた。

「でも、何とかなるよ！」と、彼は言つた。「僕はこのまゝ君を見棄てることは出來ない。僕は先づ此處から君を外國へ案內し、それから村へ伴れて行かう。さうすれば心配も少なくなるだらうし、煩悶する必要もなくなるだらう。そして其處で仕事を見附けるんだ……」

「さうだ、何處かへ出かけよう！」と、オブローモフも思はず叫んだ。

「明日は先づ外國行旅行券を心配して、それから支度に取りかゝるさ……僕は君から離れないよ——いゝかね、イリヤ？」

「君は直ぐに明日と出るねえ！」と、オブローモフは空想から醒めたやうに反對した。

「では、君は（今日のうちに出來ることを明日まで延し）たくないのだね？　無闇に急ぐぢやないか！　今日はもう遲いよ。」と、シトーリツは附け足した。「だが、二週間後には僕等はもう遠くへ行つてゐるんだ……」

「何を言ふのだ、君、二週間の後になんて、冗談ぢやない、餘り急だよ！……」と、オブローモフは言つた。「もつとよく考へてから支度をさせて吳れ……三頭馬車もどんなのが要るだらう……三ヶ月くらゐ餘裕がなけりゃ。」

「三頭馬車など何になるんだ！　國境まで郵便車で行くか、それともリュベークまで汽船で行くのだ。その方がどのくらゐ便利か知れない。外國にさへ入れば、到る處に鐵道があるからねえ。」

「だが、借間やザハールやオブローモフカ村などは、どうするのだ？　何とか處置しなけりやなるまい。」とオブローモフは辯解した。

「それが、オブローモフ主義だよ、オブローモフ主義だよ！」と、シトーリツは笑ひながら言つたが、やがて蠟燭を取り、オブローモフに挨拶をして寢室へ去つた。「此時を逸すれば永久に機會は來ないよ——いゝか

ね！」と、彼はオブローモフの方へ振り向き、自分の後の扉を閉めながら附け足した。

五

（此時を逸すれば、永久に機會は來ない）オブローモフが翌朝目を醒すと直ぐに、此の怖ろしい言葉が彼の頭に浮んだ。

彼は寢床から起き、三度ばかり室の中を歩き廻つて、客間の方を覗いて見た。シトーリツは腰掛けて何か書き物をしてゐた。

「ザハール！」と、オブローモフは叫んだ。

煖爐から飛び降りる音が聞えなかつた。ザハールは來なかつた。シトーリツが彼を郵便局へ遣つたのである。

オブローモフは埃だらけになつた卓子の傍へ近づき、椅子に腰をトし、ペンを採つてインキ壺の中に浸したが、インキはなかつた。紙を捜したが、紙もなかつた。

彼は考へ込んだまゝ一本の指で埃の上に機械的に何か書いた。さて何を書いたのかとよく見れば、其處には「オブローモフ主義」と現はれてゐた。

彼は現はれた文字を急いで袖で拭いた。彼は昨夜バルタザルが宴會の席で見たやうに、此の文字が火で壁に書かれてゐるのを夢見たのであつた。

ザハールが來た。彼はオブローモフが寢床の上に居らず、最早立つてゐるのに驚きながら、茫然として主人を見た。此の吃驚した鈍い眼の中にも（オブローモフ主義）と書かれてゐた。（再た此の字か）と、オブローモフは考へた（厭な字だ……毒々しい文字だ！）

ザハールは平常の通り、櫛と刷毛と手拭とを持つて來て、頭髪を梳づる爲にオブローモフに近づいた。

「彼方へ行け！」と、オブローモフは腹立たしさうに言つて、ザハールの手から刷毛を叩き落した。が、ザハールは櫛をも床の上に落した。

「もうお寢みなさらねえだか？」と、ザハールは訊いた。「お寢みなさらなけりや俺、蒲團を直すべえ。」

「インキと紙を持つて來い。」と、オブローモフは答へた。

オブローモフは（此時を逸すれば、永久に機會は來ない）と云ふ言葉を考へてゐた。

理性と意力との此の絶望的な叫び聲に聞き惚れてゐると、オブローモフは自分にまだ意志が少し殘つてゐることと自分が此の貧弱な殘餘の意志を何處かへ運び、何かへ入れようとしてゐることとを識つた。

重苦しい考察を續けた揚句、彼はペンを執り、隅から書物を持つて來た。彼は十年間も讀みもせず、書きもせず、また考へもしなかつたことを、一時間のうちにすつかり讀んだり、書いたり、考へたりしたかつたのである。

彼は今、どうしたらいゝだらう？　進んだらいゝだらうか、それとも停まつてゐたらいゝだらうか？　オブローモフの此の問題は、彼にとつて、ハムレットの問題より深刻であつた。進むこと――これは、彼の

肩からばかりでなく、心からも智慧からも慾たりとした夜衣を突然に脱ぎ棄てることである。これは、壁から埃や蜘蛛の巣を掃き落すと同時に、彼の眼からも蜘蛛の巣を掃き落して、健全な視力を恢復することである。

どの方面へ其の第一歩を踏み出すべきだらう？　何から始むべきだらう？　知らない、出來ない……いや……好策を用ゆるのだ、知つてゐる、そして……さうだシトーリツが直ぐ傍に居る。彼が今直ぐに教へて呉れるだらう。

だが、彼はどう言ふだらう？（一週間のうちに、代理人に精密な命令書を書き與へて之を村へ遣り、オブローモフカ村を抵當に土地を買ひ、建築圖案を送り、家を貸し、旅行券を買ひ、半年の間外國へ行き、餘分な脂肪を放散し、大儀な氣分を投げ棄て、以前親友と一緒に空想してゐた空氣で精神を爽快にし、夜衣を脱ぎ捨て、ザハールやタランチエフから離れて生活し、自分で靴下を穿き、靴を脱き、夜だけ眠り、鐵道や汽船で皆なが旅行する處を旅行し、それから……オブローモフカ村に住居を定め、蒔附や收穫はどうすればいゝかと云ふことや、どうすれば百姓は貧乏になつたり、金持になつたりするかと云ふことを研究し、畑へ行き、仕上場や製造場や水車場や船着場などへ行く。さうなれば、新聞や書物も讀める。英國人が何故東方へ軍艦を派遣するかと云ふことを心配するやうになる……）と彼は言ふだらう。

シトーリツの言ふことは、何れこんなことだらう！　之が進むことなのだ……そして一生涯を斯う云ふ風に送れと言ふのだ！　生活の詩的な理想と別れるのだ！　が、それは一種の鍛冶場で、生活ではない。其處には永久に火焔と音響と熱氣と喧騒とがある……何時生活するのだ？　停止してゐた方がよくはないだらうか？

停止すると云ふことは、襯衣を裏返しに着たり、ザハールが寢煖爐から飛び降りる足音を聞いたり、タランチエフと一緒に午餐を食つたり、何事にも無頓着であつたり、アフリカ旅行記を終りまで讀まなかつたり、タランチエフの教母の家で平和に老耄れたりすることだ……

（此時を逸すれば、永久に機會は來ない！）（生か、死か！）だ。オブローモフは安樂椅子から起ち上らうとしたが、一度で足がスリツパに入らなかつたので、再た腰掛けた。

二週間經つと、シトーリツはオブローモフから、直接巴里へ行くと云ふ口約を取つて、英國へ行つた。オブローモフの手には、もう旅行券が入つた。彼は旅行用の外套を註文した。帽子も買つた。事は著しく進捗した。

ザハールは、靴は一足だけ註文して、も一足の方は古靴の底を修繕すればいゝと思慮ある證明をした。オブローモフは蒲團や絹編のヂヤケツや旅行用の化粧箱などを買ひ込み、なほ食糧品を入れる袋さへ買はうとしたが、外國を旅行するのに、食糧品を持つて歩く者はないと、皆なに言はれたので、それだけは思ひ止つた。

ザハールは仕立屋や商店を歩き廻つて、身體ぢう汗みづくになり、店で受け取つた剩錢の中から十哥銀貨や五哥白銅などを澤山に自分の衣匣の中へ入れたが、アンドレイ・イワノウイチやその他旅行に賛成した者達を怨んでゐた。

「彼の人一人で外國へ行つても、何が出來やすべえ？」と、彼は商店で言つた。「開けば、外國では、旦那衆の用を達す者は、皆な女中ださうだが、どうして女中が靴を引張つて吳れやすべえ？　それに、どうして女中が旦那の素足に靴下を穿かせて吳れやすべえ？……」

彼は頬髯が側へ寄る程笑つて、頭を振つた。オブローモフは一生懸命に持つて行く物と家に殘して置く物とを書き附けた。彼は家具やその他の品物をウイボルグスカヤ・ストロナにゐるタランチエフの敎母の家へ運び、三つの室に閉ぢ籠めて、外國から歸るまで保存して置くやうにとタランチエフに賴んだ。

オブローモフの知人達の中では、或者は半信半疑で、或者は笑ひながら、又或者は吃驚して「愈々行くさうだ、大變なことだねえ、遂々オブローモフが動き出したんだよ！」と言つた。

けれども、オブローモフは一月經つても三月經つても出發しなかつた。

出發の前夜彼の脣が腫れたのだ。

「蠅が刺したんだ。こんな脣をして外國へは行けない！」と、彼は言つて、その次の汽船を待つことにした。

その中にもう八月になつた。シトーリツは疾くに巴里へ行つて、根氣よくオブローモフへ手紙を出したが、返事は一本も受け取らなかつた。

どう云ふ譯だらう？　インキ壺のインキが乾き、手紙を書く用紙がないのだらうか？　多分、オブローモフ式の手紙には「趣き」と「居り」とが重複するからだらう。でなければ、オブローモフは「此時を過すれば、永久に機會は來ない」と云ふ叫び聲に嚇かされ、永久に機會を失つて手枕をして寢てゐるのだらう――そしてザハールが彼を起すのに骨を折つてゐるのだらう。

いや、さうではない。彼のインキ壺には、インキが一ぱいに入つてゐる。卓子の上には、手紙も用紙も載つてゐるばかりか、彼の手で書かれた紋章入の用紙さへ載つてゐる。

彼は數行書いて、二度とは「居り」を入れなかつた。彼の文章は自由に書き流されてゐた。處々には、彼が(過にし日)シトーリツと勞働生活のことや旅行のことなどを空想した時のやうに、雄辯な意味深長な文句さへあつた。

オブローモフは七時に起き、書物を讀み、それを何處かへ持つて行く。彼の顏には、睡氣も疲勞も倦怠も現はれてゐない。彼の顏には、赤い血色さへ現はれてゐる。眼には光がある。それは勇氣か、でなければ、少なくとも、一種の自信である。彼は夜衣を着てゐない。タランチエフが彼の種々な家財道具と一緒に、彼の夜衣をも敎母の家に運んで了つたのである。

オブローモフは書物を手にして椅子に腰掛けてゐるか、或は室內用の外套を着て書き物をするかしてゐる。頸には輕い頸卷が卷かれてゐる。襯衣の襟は、ネクタイの上に食み出して、雪のやうに光つてゐる。彼は見事に仕立てられたフロックコートを着て、優美な帽子を被つて出かけて行く……彼は愉快さうに唄つてゐる……どうしてこんな事になつたのだらう？……

今、彼は自分の別莊の窓の傍に腰かけてゐる。(彼は街から幾露里か距てた別莊で暮してゐるのである。)彼の傍には、花束が横たはつてゐる。彼は急いで何か書き物をしてゐたが、間斷なく灌木林の向うにある小徑

を見ては、再た急しさうにペンを走らせてゐる。

と、俄かにオブローモフは、小徑の上の砂を輕く踏んで來る足音を聞きつけた。彼はペンを投げ出し、花束を取つて窓際に駈け寄つた。

「オリガ・セルゲーヴナさんですか？　直ぐに行きます、今直ぐに！」と、オブローモフは言つた。彼は帽子とステツキとを取り、木戸の外に駈け出し、一人の美しい婦人に腕を貸しながら、彼女と一緒に林の中の大きな樅の木蔭へ姿を消した……

ザハールは何處かの隅から出て來て主人の後を見送り、室の扉を閉めて料理部屋へ行つた。

「行つたよ！」と、彼はアニシヤに言つた。

「午餐を食るだらうかねえ？」

「そんなことどうして分るだ？」と、ザハールは眠むさうに答へた。

ザハールは相變らず同じ樣子をしてゐた。例の大きな頰鬚と剃刀をあてたことのない顯髯を生やしてゐた。例の鼠色のチョッキを着てゐた。例の通り、上衣には綻びがあつた。が、彼はアニシヤと夫婦になつてゐた。それは、教母と手を切つた爲めか、それともまた人間は結婚をしなければならないと云ふ信念を得た爲めかであらう。兎に角、彼は結婚をした。が、諺に反して少しも變らなかつた。

オブローモフをオリガとその伯母とに紹介した者は、シトーリツであつた。シトーリツが始めてオブローモフをオリガの伯母の許へ伴れて行つた時には、生憎其處にお客が來てゐた。で、オブローモフは迷惑らしい顏附をし、例の通り氣不味さうにしてゐた。

（手袋は脱ぐ方がいゝだらう。）と、オブローモフは思つた。（それに室の中も溫かいから。俺はすつかり不作法になつて了つた！」

シトーリツはオリガの傍に腰掛けた。オリガは一人茶卓から離れて、洋燈の下にある安樂椅子に背中を凭せて腰掛けてゐた。彼女は自分の周圍に行はれてゐる事には餘り氣を附けてゐなかつた。

彼女はシトーリツが來たのを非常に喜こんだ。彼女の眼は燃えるやうに輝やかなかつたが、そしてまた彼女の頰も血色の焰を見せなかつたが、彼女の顏には穩やかで靜かな光が漂ひ、微笑さへ現はれた。

彼女はシトーリツを親友と呼んでゐた。彼女はシトーリツが好きであつた。と云ふのは、彼は何時も彼女を笑はせて退屈させなかつたからである。が、同時に彼女は彼の前に出ると餘りに自分の子供らしさを感ずるので、幾らか彼を恐れてゐた。

彼女は自分の智慧の中に問題や疑念が生じても、急にそれをシトーリツに訴へようとはしなかつた。シトーリツは彼女よりも餘程進んだ、そしてまた彼女よりも數等高尙な思想を有つてゐたからである。で、彼女の自愛心は、どうかすると自分の未熟や二人の智慧と年齡との懸隔の爲めに煩悶することさへあつた。

シトーリツも矢張り香り高い新鮮な智慧と感情とを有つた美しい女性として、何の慾望もなく彼女を眺めてゐた。彼の眼から見ると、彼女はたゞ大きな希望を起させる美しい赤兒に過ぎなかつた。

けれども、シトーリツは他の女達と話をするよりオリガと話をするのを喜こんで、絶えず彼女と話をした。

何故かと言へば、彼女は無意識ではあつたけれども、單純で自然な生活の路を歩き、幸福な天性と健全で素直な教育とのお蔭で、思想や感情や意志を現はすにも、眼や脣や手を一寸動かすにも、自然のまゝを失つてゐなかつたからである。

これは、彼女が此の路を非常な確信を以て歩き、時々自分の足音以外に自分の信じてゐる（親友）の更に確かな足音を聞き、其の足音を標準に自分の歩みを續けてゐたからであるかも知れない。

それはどうであらうと、兎に角、彼女のやうに單純な心や自然で自由な眼附や言葉や行爲を有つた娘は、實に珍らしい。だから、彼女の眼に（今、私は脣を少し引き締めて考へ始めようとか——私はそんなに醜くくはないとか、彼處を見て吃驚しようとか、輕く飛んで直ぐに皆なを自分の傍へ駈け寄らせようとか、ピアノの傍に腰掛けて足先を少しばかり突き出さう）など云ふやうな考慮を讀むことは、決して出來ない……。

また彼女には、氣取つた樣子も嬌態も虚僞も虚飾も奸計もなかつた！　その代り、彼女の優れた點を認めてゐた者は、殆んどシトーリッ一人であつた。その代り、彼女は波爾踊（マズールカ）が一度終る間さへ、退屈を隱さず一人で坐つてゐることが出來なかつた。その代り、非常に愛想のいゝ若者でも、彼女を見ると、口が重くなり、彼女に何をどう云ふ具合に話したものかと思ひ迷ふのであつた。

或人達は彼女を平凡な凞みのない女だと思つてゐた。何故かと云へば、彼女の舌からは、人生や戀愛に就いての賢明な議論も、素速く豫期しない大膽な臺詞も、讀んだり聞囀つたりした音樂論も、文學論も溢れ出なかつたからである。彼女は口數が少なかつた。何か言つても、餘り偉い事を言はなかつた。——で、悧口で大膽な（漁色家）達は彼女を見遁してゐた。そして反對に意氣地のない人間は、反つて彼女を非常に賢明な女だと思つて、幾らか彼女を怖れてゐた。たゞシトーリッだけは、間斷なく彼女に話をしかけて、彼女を笑はせてゐた。

彼女は音樂が好きであつた。が、たゞシトーリッの言葉によると、どんな聲樂家の歌よりも優れてゐた。が、其の歌は、シトーリッの言葉によると、どんな聲樂家の歌よりも優れてゐた。

シトーリッがオリガの傍に腰掛けると直ぐに、室の中には彼女の笑ひ聲が響き渡つた。その笑ひ聲は、響があつて無邪氣で傳染力が強いので、その笑ひ聲を聞いた者は、皆な理由も分らずに屹度笑ひ出して了ふのである。

けれども、シトーリッは何時も彼女を笑はせる譯ではなかつた。彼女は好奇心を唆られながら三十分もシトーリッのもふ事を聞いてゐるうちに、更に二倍の好奇心に動かされて、その眼をオブローモフに移した。が、オブローモフは彼女の眼で見られると、地の中へでも潜り込みたいやうな氣持になつた。

（あの二人は、俺のことを何と言つてるのだらう？）と、オブローモフは二人を横眼で見ながら悸々（おどゝ）と考へた。彼はもう出て行きたかつたが、オリガの伯母が彼を卓子の方へ呼び寄せ、自分の傍に腰掛けさせたので、對談者達から十字砲火のやうな視線を浴せられた。

オブローモフは怖々とシトーリッの方へ振り向いた——彼はもうゐなかつた。で、オリガの方を見ると、彼女が彼に向けてゐる例の奇妙な視線にはたと出會した。

（まだ視てゐる！）と、彼はおど〳〵と自分の身裝（みなり）を見廻しながら考へた。

彼は自分の鼻が汚れてはゐないかと思つて手巾で顔を拭いたり、襟飾が解けてゐないかとそれに觸つたりした。そんなことは滅多にない。何もかも整然としてゐるらしい。それに彼女が見てゐる！

けれども、召使が茶とビスケットを入れた盆とを彼の方へ出した。彼は自分のどぎまぎした心持を鎭めて平氣になりたかつたので、落着いた心持で乾菓子とビスケットと輪菓子とを一握り摑んだ。彼の傍に並んで腰掛けてゐた一人の娘は笑ひ出した。他の者達も皆な此の一摑みの菓子を面白さうに眺めてゐた。

（あゝ、彼の女が見てゐる！）と、オブローモフは考へた。（此の澤山な菓子をどうしたらいゝだらう？）

彼はオリガが自分の場處を離れて、他の場處へ行つたのを盜み見ると、辛つと安心した。

が、娘の子はオブローモフがその菓子をどう處分するかと矢張り彼に鋭い眼を向けてゐた。

（急いで喰べて了はう）と考へると、彼は急いでビスケットを口の中へ入れた。幸ひビスケットは口の中で融けた。

後には、たつた二つの乾菓子が殘つた。オブローモフは自由に溜息を吐き、思ひ切つてオリガの行つた方を見た。

あゝ！　彼女は半身像の傍に立ち、その臺に凭りかゝつて彼を見てゐる。彼女は自分の場處を離れて、自由にオブローモフを見ることの出來る場處へ行つたらしい。彼女はオブローモフが乾菓子を持ちあぐんでゐるのに氣が附いた。

晩餐の時に、彼女は卓子の向う端に腰掛けて、何やら饒舌りながら食べてゐた。そして、オブローモフには少しも氣を留めないものゝやうであつた。が、オブローモフが、もう彼女は見てゐまいと怪々と彼女の方へ振り向くと、忽ち彼女の視線に出會した。其の視線は好奇心に滿されてはゐるが、然し何となく親しみのある眼附であつた……

オブローモフは晩餐を濟すと、狼狽てオリガの伯母に歸る挨拶をし始めた。伯母は明日の午餐に彼を招待し、シトーリツに之を傳へて貰ひたいと言つた。オブローモフはお辭儀をして、眼を伏せたまゝ客間を通り拔けた。ピアノの後には、直ぐ衝立と扉口があつた。彼はチラリと見ると――ピアノ後にはオリガが腰掛けてゐて、非常に物珍らしさうな眼附で彼を見てゐた。彼にはオリガが微笑んでゐたやうに思はれた。

（俺が昨日、靴下を片ちんばに穿いてゐたことか、或は襯衣を裏返しに着てゐたことかをアンドレイが話したに違ひない！）と、彼は決めた。そして斯うした假定の爲めに不愉快な心持を抱きつゝ家へ歸つた。が、殊に彼を不愉快にしたのは、午餐に招待されたことであつた。彼は此の招待に對して、頭を下げたが、これは承知したと言ふ意味に取られるのである。

此の時から、オリガの執拗い眼附は、オブローモフの頭から離れなかつた。彼は仰向になつて身體全體を延ばして寢たり、一番樂で落着けるやうな身體附をしたりしたが、どうしても眠れなかつた。夜衣も彼には氣持が惡くなつた。ザハールも間が拔けてゐて精にさはつた。埃や蜘蛛の巣さへ厭で堪らなかつた。

彼は幾つかの汚ない額を外すやうに言ひ附けた。其の額は、或る貧弱な藝術家の保護者の世話で買はせられたものであつた。それから自分ではもう暫らく捲き上げたことのない窓掛を直し、アニシヤを呼んで窓を

拭かせた。蜘蛛の巣を拂落した。やがて横向に寢て、一時間ばかりオリガのことを考へた。

最初彼はオリガの容貌を凝つと思ひ浮べたり、彼女の肖像を記憶の中に描いたりした。

オリガは、嚴密に言ふと、美人ではなかつた。彼女は色白ではなかつた。彼女の頰や脣にも、鮮やかな色彩が現はれてゐなかつた。眼にも內心の火が燃え輝やいてゐなかつた。彼女には、珊瑚のやうな脣も眞珠のやうな齒も五歲くらゐの子供に見る繪のやうな手も葡萄の形をした指もなかつた。

けれども、若しオリガを立像にすれば、彼女は優雅と調和との立像になる。幾らか高過ぎるくらゐな身長には、大きな頭がきちんと釣り合つてゐる。大きな頭には、卵形の輪郭の正しい顏が釣り合つてゐる。そして之等は皆な肩と調和し、肩は全身と調和してゐる……

誰でも、たとへ茫乎した人でも、彼女を見た者は皆な、此の嚴密な、考案されたやうな美術的創造物の前に一寸立ち留る。

鼻は心持ち腫れた優美な線を描いてゐた。脣は薄く、多く引き締つてゐた。それは、彼女の思想が斷へず或る何物かに向つて進んでゐる徵候であつた。何事かを物語つてゐる彼女の思想は、何時も生々とした銳どい、そして何物をも見遁さない黑味と灰色とを帶びた蒼い眼の中に輝やいてゐた。眉は彼女の眼に殊に美しさを添へるものであつた。彼女の眉は、虹形になつてもゐなければ、指で引き擽つた二筋の細い糸のやうに眼を取り卷いてゐなかつた。さうだ、彼女の眉は栗色の柔毛から成る殆んど眞直な條で、それも釣合よく並んではゐなかつた。一方の眉は、一方の眉より高かつた。だから一方の眉の上には、一條の小さい皺が寄つてゐた。そして其の皺の中では、何かゞ何事かを物語つてゐるやうでもあれば、其處に思想が潛んでゐるやうでもあつた。

オリガは幾分前方に頭を屈めて歩いた。その頭は、細そりとした傲慢らしい頸の上に、釣り合よく上品に落着いてゐた。また彼女は全身を均整に動かしながら歩いてゐるかゐないか分らない程輕く歩いた……。

（彼の女は昨日、どうして俺をあんなに凝つと視詰めてゐたのだらう？）と、オブローモフは考へた（アンドレイは靴下と襯衣とのことはまだ言はないが、俺に對する彼の友誼や俺達がどんな風に育ち、どんな風に教育を受けたかと云ふことなど――何でも良いことは皆な言つたと誓つてゐた。それに、オブローモフは不幸な男だとか、活動が足りない爲めに、人間にとつて大切なものを皆な失つてゐるとか、人生を素觀してゐる……などゝ、こんなことも話したんだ。）

（ぢや、何を微笑んだのだらう？）と、オブローモフは考へ續けた。（若し彼の女に心臟があれば、彼の女の心臟は鼓動を止めて、同情の餘り血を沸さなければならない筈だ。が、彼の女は……いや、どうでもいゝ！もう考へまい！　もう今日だけしか午餐を食ひには行くまい――今後は一歩も近寄りはしない。）

幾日か過ぎ去つた。彼はオリガの許へ足繁く通つた。

或る天氣の好い朝に、タランチエフは、ウイボルグスカヤ・ストロナの小路にある自分の敎母の所へオブローモフの家具類を皆な運んで了つた。で、オブローモフは三日の間寢床にも入らず、長椅子にも寢床にも入らずに過した。彼がこんなことをしたのは、久し振りであつた。彼はオリガの伯母の許で三日の間午餐を

食べた。

オブローモフは突然に彼女達の別莊の向うに一軒の空き別莊があることを聞き込んだ。で、彼は直ぐにそれを借りて、其處に住むやうにした。彼はオリガと一緒にゐた。彼はオリガと一緒に書物を讀んだり、オリガに花を贈つたり、湖水の畔や山の中を散歩したりした……オブローモフは斯う云ふ人間になつて了つた。

世間には、種々な事があるものだ！　が、どうしてこんな事があるだらう？　ところが、これは斯う云ふ譯である。

例の連中が、シトーリツと一緒にオリガの伯母の許で、午餐を食べてゐる時のことであつた。オブローモフは此の午餐の時にも、前晩と同樣の拷問を感じた。彼はオリガの視線を浴びながら食事をした。そして此の視線が丁度太陽のやうに彼の上に懸つてゐて、彼を燒き、彼を驚ろかせ、彼の神經と血とを戰かせてゐることを知りつゝ、話をした。で彼は葉卷を喫ふと云ふ口實の下に、瞬間だけでも此の斷間なく何事かを語つてゐる執拗な視線から遁れようと思つて、露臺へ出た。

「あれは何だらう？」と、彼は四邊を見廻しながら言つた。「あれは俺を苦しめるのだ！　俺は彼の女の笑ひものにされてゐるのだらうか？　他の誰にもあんな眼附を浴せはしない。あんな笑ひを向けはしない。俺はあまり溫柔し過るから、彼の女はあんな……俺は彼の女に言つて遣らう！」と彼は決心した。「俺は彼の女の爲めに自分の心から見拔かれる事を、一層自分で白狀して了はう。」

と、突然オリガが彼の前に、露臺の闕の上に、現はれた。彼はオリガに椅子を薦めた。オリガは彼の傍に腰掛けた。

「あなた、お退屈なの？」と、オリガはオブローモフに訊いた。

「退屈です」と、オブローモフは答へた。「けれども、さう酷く退屈してゐる譯でもありません……私には仕事があるのです。」

「アンドレイ・イワヌイチのお話によると、あなたは何か計畫を書いてゐらつしやるんですつてねえ？」

「さうです、私は村へ行つて暮したいと思つてゐますから、徐々其の支度をしてゐるのです。」

「ぢや、外國へは？」

「行きます、是非行きます。アンドレイ・イワヌイチの支度さへ出來れば。」

「悅こんでいらつしやるの？」

「さうです、非常に悅こんで……」

オブローモフはちらりとオリガを見た。微笑がオリガの顏を匂つてゐた。その微笑は、彼女の眼を光らせ、彼女の頰に溢れてゐた。たゞ脣だけは、平常の通りに引き締つてゐた。オブローモフは平氣で嘘を言ふ勇氣を持つてゐなかつた。

「私は少し……惰け性で……」と、彼は言つた。「ですが……」

斯う言ふと同時にオブローモフは、彼女が默つたまゝ易々と彼に惰け性の自白をさせた事を怨めしく思つ

た。（此の女と俺とはどんな關係があるのだ？　俺は此の女を怖がつてゐるのだらうか？）と、オブローモフは考へた。

「惰け性ですつて！」と、オリガは幾分捜るやうな調子で答へた。「そんなことがありまして？　男の方が惰け性だなんて――そんなこと私に分らないわ。」

（どうして分らないのだらう？）と、オブローモフは考へた。（單純な事だと思はれるが。）

「私は始終家にばかり坐つてゐるんです。ですから、アンドレイは私が……」

「でも、あなたは種々な物を書いてゐらつしやるのでせう。」と、オリガは言つた。「讀んでゐらつしやるのでせう――あなた、讀んで御覽になつて？……」

オリガは例の通り凝つと彼を見詰めた。

「いゝえ、讀みません！」と、オブローモフは吃驚して突然に口走つた。それは、彼女に試驗をされないうちにと思つたからである。

「何を？」と、オリガは笑ひながら訊いた。

彼も笑つた。

「小説でも讀んだのかとのお尋ねだと思つたからです。私は小説を讀みません。」

「さうぢやないのよ。私、旅行記のことをお訊ねしたのよ……」

オブローモフは眼敏くオリガを見た。彼女の顏は、全體に微笑を湛へてゐたが、脣は……。

（あゝ！　さうだ、此の女は……此の女と話をするには、よほど氣を附けなければ……）と、オブローモフは考へた。

「あなた、何をお讀みなの？」と、オリガは珍らしさうに訊いた。

「私は旅行記が一番好きです……」

「アフリカ旅行記が？」と、オリガは捜るやうに靜かに訊いた。

オブローモフは、自分が何を讀んでゐるかと云ふことばかりか、どんな讀み方をしてゐるかもオリガに悉皆分つてゐるのだと察して、思はず顏を赧らめた。

「あなた、音樂家なの？」と、オリガはどぎまぎしてゐるオブローモフを落着かせようとして訊いた。

此の時、シトーリツが遣つて來た。

「イリヤ！　僕はオリガ・セルゲーヴナさんに、君が非常な音樂愛好家だと言つて、何か……Casta diva でも歌つて貰ひたいと頼んだんだよ。」

「何故君は僕に就いて出鱈目を言ふんだ？」と、オブローモフは答へた。「僕はそれ程音樂が好きぢやないんだ……」

「何を言ふんだ？」と、シトーリツは遮つた。「オブローモフは憤慨してゐるやうだ！　僕はオブローモフを優雅な人物として紹介してゐるのに、自分で狼狽へて幻滅してゐる！」

「いや、僕は愛好家と云ふ役目を御免蒙りたい。此の役目は怪しい、そして六ヶ敷い役目だからねえ！」

「どんな音樂がお好きなの？」とオリガは訊いた。
「そのお尋ねには答へ兼ねます！　まアどんな音樂でもいゝのです！　どうかすると、私は嗄れ聲で唄つて歩く門附を聞いてさへ、滿足に思ふことがあります。また、何かの機會に聞きつけたモチーヴが深く記憶に刻み込まれますが、時によると、歌劇を半分だけ聞いて逃げ出すこともあります。氣分次第で、メイエルベルや渡守の歌にさへ感動することがあるのです！　時によると、モツアルトを聞いても耳が塞がるやうな……」
「オリガ・セルゲーウナさん、何か歌つて下さいませんか。」と、シトーリツは願つた。
「でも、今オブローモフさんは、耳が塞がるやうな氣分ぢやなくつて？」と、オリガはオブローモフの方へ向いて言つた。
「さう言はれると、何かお世辭の一つも言はなければなりませんが。」と、オブローモフは答へた。「元來私はお世辭が言へない方で、若し言へても、そんなことは言ひません……」
「何故なの？」
「若しあなたの歌が不味ければ」と、オブローモフは無邪氣に言つた。「その上で氣持が惡くなるだけのことですから……」
「昨夜の乾菓子の時のやうにね……」と、オリガは俄かに口走つて、自分ながら顏を眞赤にした。彼女は此の事を言ふまいと思つてゐたのであつた。「失禮――惡いことを申しましたわね！……」と、オリガは言つた。

オブローモフは、こんな事を豫期してゐなかつたので、落膽した。
「あまり酷い素破抜き方だ！」と、彼は低い聲で言つた。
「いゝえ、一寸した復讐なのよ！　本當に惡氣で言つたんぢやないことよ。あなたも私にお世辭をおつしやらないから……」
「でも、聞いた上でなけりや分らないんです」
「ぢや、あなた、私の歌をお聞きになりたいんですね？」と、オリガは訊いた。
「いや、聞きたいのはあの男です。」と、オブローモフはシトーリツを指差しながら答へた。
「ぢや、あなたは？」
オブローモフは頭を振つた。
「自分の知らないものを望む譯に行きませんから。」
「イリヤ、君は不作法者だねえ！」と、シトーリツは言つた。「あゝして家に轉々して靴下を穿くことは何を……」
「アンドレイ、さうぢやない。」と、オブローモフはシトーリツに言ひ了らせないやうに元氣よく遮つた。
「（あゝ！　私は非常に喜ばしい、幸福です。あなたは實に見事にお嫌ひになります……）と言ふ資格を私は有つてゐないのです。」と、オブローモフはオリガの方へ向いて續けた。「（私は十分に滿足しました）なんかつてね……。そんな事を言つて何になりますか。」

「ですが、あなたは、少なくとも私の歌をお聞みになることも出來ますわ……物好きにでも。」
「そんなことは出來ません。」と、オブローモフは答へた。「あなたは女優ぢやないんですから……」
「ぢや、私、あなたに歌つてお聞かせしますわ。」と、オリガはシトーリッに言つた。
「イリヤ君、お世辭の支度をして置くがいゝ。」
そのうちに夕方になつた。洋燈が輝やき出した。洋燈の光は、月光のやうにプリューシチ(木の名)の編んだやうな枝を透してゐた。黄昏はオリガの顏や姿の輪郭を隱し、紗の顏覆のやうに、彼女の上に蔽ひ被さつた。前は夕闇の中に隱れ、たゞ柔らかい力のある聲と感情の神經的微動だけが聞えてゐた。
オリガはシトーリッの註文によつて、種々な歌曲と俗曲とを唄つた。或る歌には、苦痛と茫乎した幸福の豫感とが現はれてゐた。又或る歌には、歡喜が現はれてゐた。が、其の聲色には、もう悲哀の芳芽が漂つてゐた。
言葉と音律と純な力強い處女の音色との爲めに、オブローモフの心臟は波立つた。神經は戰いた。眼は歪んで涙を湛へた。と、同時に死にたくなつた。音律から醒めたくなかつた。が、直ぐに心は再た生活を渴望し出した……。
オブローモフは昂奮して、力を失なつた。辛つと涙を止めた。が、猶ほ一層の苦心で彼の精神から迸り出ようとする歡喜の叫びを抑へた。彼は久しくこんな活氣とこんな力とを感じたことがなかつた。その力は、精神の底から湧き出して、活動を始めようとするらしかつた。

若しオブローモフに旅行の支度さへ出來て居れば、此の時、直ぐに彼は外國へ出かけたに違ひない。
最後に、オリガは Casta diva を歌つた。感激と電光のやうに頭の中に閃めく思想と、身體ぢうを走せ廻る針のやうな戰慄と——斯う云ふものがオブローモフを萎縮させた。彼は全く力を失なつて了つた。
「今日は、どうでした?」と、オリガは歌を止めて、突然にシトーリッに訊いた。
「オブローモフが何と言ふか訊いて御覽なさい。」と、シトーリッは言つた。
「あゝ!」と、オブローモフは思はず聲を出した。
彼は突然にオリガの手を握り、直ぐにそれを放して酷くどぎまぎした。
「失禮しました……」と、オブローモフは吃やいた。
「どうです、赦しますか?」と、シトーリッはオリガに言つた。「イリヤ、正直な話が、君は久し振りにこんな感じを味はつたのだらう?」
「こんなものは、若し今朝窓際を覆れ離の門附が通りさへすれば、其時にもう經驗なさるんでしたね……」
と、オリガは正直に、そして諷刺から針を拔いたやうに柔らかく言葉を挿んだ。
シトーリッは詰るやうにオリガをチラリと見た。
「オブローモフは決して窓を開けたことがないのです。だから、戸外で何をやつてゐても聞えやしませんよ。」
と、シトーリッは附け加へた。
オブローモフも詰るやうにシトーリッを見た。

シトーリツはオリガの手を握つた。
「オリガ・セルゲーヴナさん、今日あなたは何時もにない歌ひ方を、少なくとも私が久しく聞かなかつたやうな歌ひ方をなすつたが、その理由は何でせう。さア、之が私のお世辭です！」と、彼はオリガの指に一本づゝ接吻しながら言つた。
シトーリツは歸つた。オブローモフも歸らうとしたが、シトーリツとオリガとが彼を止めた。
「僕には用事があるんだ。」と、シトーリツは言つた。「が、君は寢に歸るんだらう……まだ早いよ……」
「アンドレイ！　アンドレイ！」と、オブローモフは哀願するやうな聲で言つた。「いや、僕は今日斯うしちやゐられない。僕も歸る！」と、彼は附け加へて歸つた。
彼は夜通し眠らなかつた。彼は悲愁と思案に沈みながら室の中を彼方此方と歩き廻つた。黎明になると、家を出てネワ河の畔や街道を歩いた。が、彼が何を感じ、何を考へてゐたかは誰にも分らない。
其後三日經つと、彼は再た夕方オリガの許へ行つた。丁度、他のお客達は骨牌を取つてゐた。オブローモフはオリガと二人でピアノの傍へ行つた。伯母は頭痛がすると言つて、書齋の中でアルコールを嗅いでゐた。
「アンドレイ・イワヌイチがオデツサのお土産にドすつた繪畫帖をお目にかけませうか？」と、オリガは訊いた。「彼の方がお目にかけなかつたこと？」
「あなたは御主人の義務で私を取り做さうとなさるのですね？」と、オブローモフは訊いた。「それには及びませんよ！」

「何故それに及ばないのでせう？　私、あなたが退屈なさらないで、お家にゐらつしやるやうなつもりで、樂々と自由に心持よくなすつて……寢る爲にお歸りにならないやうにしたいのよ。」
（此の女は喰へない惡戲女だわい！）と、オブローモフは思ひながらも、自分の意志に逆らつて、オリガの一擧一動に見惚れてゐた。
「あなたは、私が樂々と自由に、そして退屈しないやうにして下さるんですか？」と、オブローモフは繰り返した。
「さうよ。」と、オリガは昨日のやうにオブローモフを見ながら、いや、もつと好奇心と親密さとを現はして答へた。
「それなら、第一に今のやうにそれから近頃のやうに私を見ないやうにして下さい……」
オリガの眼に現はれてゐた好奇心は二倍した。
「それ、さう云ふ見方をされると、私は益々氣持が惡くなります……私の帽子は何處にあります？」
「どうして氣持が惡いのでせう？」と、オリガは優しく訊いた。と、彼女の眼附は、好奇心の表現を失なつて、ただ親しみと愛嬌とを現はした。
「どう云ふ譯か分りません。が、たゞあなたにあんな眼附で見られると、何んだか他の人に知られたくない、殊にあなたに知られたくない事を、悉皆見拔かれるやうな氣持がするのです……」
「何故でせうね？　あなたはアンドレイ・イワヌイチのお友達でせう。彼の方は私のお友達よ。ですから……」

「ですから、私に就いてアンドレイ・イワヌイチが知つてゐるだけ、あなたもお知りにならねばならぬと云ふ理由はないでせう。」と、オブローモフは言つた。

「理由はありませんけど、知る可能はありますわ……」

「私の友達のお饒舌のお蔭で——あれがあの男の悪いおせつかいなのですよ……」

「ぢや、あなたには秘密があつて？」と、オリガは訊いた「犯罪があるかも知れないわねえ？」斯う彼女は附け加へて、笑ひながらオブローモフの傍をつと離れた。

「或はあるかも知れません。」と、オブローモフは溜息を吐いて答へた。

「さうよ、それは重大犯罪よ」」と、オリガは悸々と靜かに言つた。「片ちんばの靴下を穿くなんて……」

オブローモフは帽子を取り上げた。

「もう落膽しました！」と、オブローモフは言つた。「あなたは、私が氣持よく居れるやうになさるのです！　私はアンドレイには愛想がつきました……彼の男はそんなことをあなたに言つたんですか？」

「あの方は今日其の話をして、散々私を笑はせたのよ。」と、オリガは附け加へた。「あの方は何時も笑はせてばかりゐるの。赦して頂戴ね、もう言はないわ、言はないわ。そしてあんな眼附で見ないやうにするわ……」

オリガは捜るやうな、そのくせ眞面目な顔附をした。

「それから第一に、」と、オリガは續けた。「私、昨日のやうな見方をしないわ。あなたが自由に怒たりとなるやうに。第二に、あなたが退屈なさらないやうにするにはどうすればよいかと云ふことを考へますわ。」

オブローモフはオリガの淺黄色の愛嬌のある眼を眞正面に見た。

「そら、今あなたこそ私を妙な眼附で御覽なすつたわ……」と、オリガは言つた。

實際、オブローモフは眼でなく、催眠術師のやうに寧ろ思想と凡ての自分の意志とでオリガを見た。然し彼は知らず識らずの中に、見まいとする抑制力を失なつて、オリガを見たのである。

（あゝ、何と云ふ美しい女だらう！　世の中にこんな美しい女があるものかしら！）と、オブローモフは吃驚したやうな眼附でオリガを見ながら考へた。（あの白い色、あの眼、あの眼は深淵のやうに暗い。が、其の奥には何か輝やいてゐる。屹度靈だらう！　微笑など書物のやうに讀める。微笑ふと、あの齒が見える。それにあの頭……あの頭が肩の上に落着いてゐる姿の優しさ。宛然小花が搖れてゐるやうだ。そしていゝ香氣を漂はせてゐる……）

（さうだ、俺はあの女から何かを得てゐる）と、オブローモフは考へた。（彼の女から何か俺の中に移つて來るものがある。俺の心臟は、沸き返へるやうに鼓動し出した……心臟の中に、俺は今迄感じたことのないものを感ずるやうになつた……あゝ、あの女を見てゐるのは、何と云ふ幸福だらう！　呼吸さへも詰るやうになる。）

オブローモフの頭の中には、斯うした考へが旋風のやうに廻轉した。彼は矢張りオリガを見てゐた。丁度歡樂の中に恍惚として、無限の彼方と無限に深い淵とを見てゐるかのやうであつた。

「オブローモフさん、もう澤山よ。今度はあなたが私を見てゐらつしやるのよ！」と、オリガは恥かしさう

に頭を脇へ向けて言つた。が、好奇心には抵抗が出來ないので、彼女もオブローモフの顏から眼を放さなかつた。

オブローモフには、オリガの言つたことは、少しも聞えなかつた。

實際、彼はオリガの言葉を聞かずに、矢張り彼女を見詰めてゐた。そして自分の中に何事が起つて來たかを默つて考へてゐた。彼は自分の頭を叩いた。——頭の中にも矢張り何かゞ波打ちながら非常な速力で流れてゐた。彼は自分の考へを捉へることが出來なかつた。考へは、丁度小鳥の群のやうに、バタ〳〵と飛び廻つてゐた。そして心臟の方が、つまり左側の胸が痛いやうな氣持がした。

「そんな妙な眼附で私を見ちやいやよ。」と、オリガは言つた。「私だつて氣持が惡い……あなたも、私の精神から何かを見拔かうとなさるのね……」

「私はあなたの何を見拔けるでせう?」と、オブローモフは機械的に訊いた。

「私にも矢張り、始めたばかりでまだ終らない(計畫)があるのよ。」と、オリガは答へた。

オブローモフはまだ終らない自分の計畫に對する此の暗示を聞いてハツと我に歸つた。

「奇妙ですねえ!」と、オブローモフは言つた。「あなたは惡い女ですが、あなたの眼は良い眼です。女を信じちやならないと昔から言ひますが、實際ですね。女は奸計んで舌で嘘を言ひます。奸計まなくても、眼附と微笑と赤味とそれから卒倒とで嘘を言ひます……」

オリガは印象を强めやうとせず、オブローモフの帽子を靜かに取つて椅子に腰掛け 。

「もう申しませんわ、申しませんわ。」と、オリガは元氣よく繰返した「あゝ失禮なことを言ひましたわねえ。でも、あれは決して嘲笑つたんぢやなくつてよ!」と、オリガは宛然歌を唄ふやうな聲で言つた。そして歌のやうな此の文句の中には、感情が慄へてゐた。

オブローモフは安心した。

「あのアンドレイの奴!……」と、オブローモフは詰責るやうに言つた。

「では、第二に御尋ねしますがねえ、どうすればあなたは退屈なさらないでせうか?」と、オリガは訊いた。

「歌つて下さい!」と、オブローモフは言つた。

「それよ、私、さう云ふお世辭を待つてたのよ!」と、オリガは昂奮して嬉しさうに進つた。「若しあなたが、」と、彼女はやがて元氣よく續けた。「一昨日私の歌を聞いた後で(あゝ)とおつしやらなかつたら、私は夜通し眠らずに泣いたかも知れないわ……。」

「どうしてです?」と、オブローモフは吃驚して訊いた。

オリガは暫く考へてゐた。

「自分にも分らないけれど」と、やがて彼女は言つた。

「あなたは自尊心がお强いからですよ。」

「さうよ。無論その所爲よ。」と、オリガは考へ込んだまゝ、片手でピアノの鍵を敲いて見ながら言つた。

「けれど、自尊心は誰にも澤山にあるものですわ。アンドレイ・イワヌイチは、自尊心は意志を支配する唯

一の原動力だと言つていゝとおつしやつたくらゐですもの。あなたには、其の自尊心が飽度無いのよ。だからあなたは何時も……」

オリガは言つて了はなかつた。

「何ですか？」と、オブローモフは訊いた。

「いゝえ、たゞそれだけ。」と、オリガは口訥つた。「私がアンドレイ・イワヌイチを愛してるのは、」と、彼女は續けた。「あの方が私を笑はせたり、時によるとお話をして私を泣かせたりする爲めでもなければ、またあの方が私を愛して下さる爲めでもなくつて、それは……あの方が他の婦人より餘計に私を愛して下さる爲めだと思ふわ。どうです、大變な自尊心でせう！」

「あなたはアンドレイを愛してゐらつしやるのですか？」と、オブローモフはオリガに訊いて、緊張した探るやうな視線を彼女の眼に注いだ。

「無論ですわ。あの方が私を一番愛して下されば、私もそれだけあの方を愛しますわ。」と、オリガは眞面目に答へた。

オブローモフは默つて彼女を見た。彼女は平凡な溫柔しい眼附でオブローモフに答へた。

「あの方はアンナ・ワシリエウナやジナイダ・ミハイローウナなども愛してゐらつしやるけれど、私ほどではないのよ。」と、オリガは續けた。「アンドレイさんはあの女達とならば二時間も一緒に話してゐられないんです。あの女達を笑はせるやうなこともないわ。心の底から何事も話さないのよ。たゞ、事業のことや劇場のことやニュースのことなどの話をするだけなの。ところが、私には妹に話をするやうに話して下さるんです……いゝえ、娘に話をするやうによ。」と、オリガは急いで附け足した。「どうかして、私が何か一寸分らなかつたり、おつしやる事に從はなかつたり、あの方の意見に同意をしなかつたりする時など、叱り附けたりするのよ。けれど、あの女達を叱つたりなんかなさらないわ。で、私もあの方を一番愛するのだらうと思ふの。自尊心が強いでせう！」と、オリガは沈んで附け足した。「けれど、此の自尊心がどうして私の歌の中へ入つたのかしら？　以前、私の歌は皆なに隨分評判されたものよ。それに、あなたは私の歌を聞くことを厭がつてゐらつしやつたのですもの。殆んど無理にお聞かせしたやうなものですわ。で、若しあなたが私の歌の後で、私に何ともおつしやらずにお歸りになつたら――若し私があなたの顏に何も認めなかつたら……私病氣をしたかも知れませんわ……さうよ、きつとよ。之が自尊心なのねえ！」と、オリガはきつぱりと言つた。

「だが、あなたは私の顏に何か見たんですか？」と、オブローモフは訊いた。

「涙を見ましたわ。あなたはそれを隱さうとなすつたけれど。それは男の方の缺點です――自分の感情を恥ぢるなんて。それも矢張り自尊心よ。而も虛僞な自尊心よ。それより一層のこと男の方は、時には御自分の智慧をお恥ぢなすつた方がいゝわ。その智慧は大概間違つたことを敎へますからねえ。アンドレイ・イワヌイチも矢張り感情を恥ぢてゐらつしやるのよ。で、私、此の話をしたら、私の意見に同意して下さいましたわ。ですが、あなたは？」

「あなた方が同感ならば、無論私も同感です！」と、オブローモフは言つた。
「またお世辭よ！　本當に……」
オリガは言葉に窮した。
「卑劣な男です」と、オブローモフはオリガから眼を放さずに言ひ足した。
オリガは茫爾としてオブローモフの言葉に同意した。
「私があなたに歌をお願ひしたくなかつたのは、自分の卑劣が露顯するのを恐れたからなんです……始めて聞いたのに、何と言へるでせう？　けれども、言はない譯にゆきませんからねえ。同時に怜悧にもなり、誠實にもなるのは六ケ敷いことです。殊に、感情の昂奮してゐる時に、あんな印象を受けた時に、あんな場合にです……」
「私も實はあれほど熱心に歌つたことは珍らしいのよ。あんなに歌つたことはなかつたかも知れませんわ……もう歌はせないで下さいね。私、もう歌ひませんから……いゝえ、も一度だけ歌ひますわ……」と、オリガは言つた。と、其の瞬間に、彼女の顏は昂奮し、その眼は燃え出したやうであつた。彼女は椅子に腰を降し、二三度大聲に調子を取つて歌ひ出した。
あゝ、此の歌の中に何が響いてゐたらう！　希望と雷雨に對するぼんやりした恐怖と雷雨そのものと燃えるやうな幸福と――斯うしたのは皆な歌の中ではなく、彼女の聲の中に響いてゐた。
オリガは長い間歌つた。そして時々オブローモフを眺めながら子供のやうに訊ねた。

「もう澤山？　でなけりや、まだこんなのがあるわ。」彼女は再た歌つた。
オリガの頰や耳は、昂奮の爲めに眞赤になつてゐた。どうかすゐと、彼女の晴々した顏には、俄かに感情の火花が電光のやうに閃めいたり、心の中に遠い未來の生活を味ひでもしたかのやうな成熟した情熱の光が燃え上つたりした。が、此の瞬間的な光は再た直ぐに消えて、再た銀のやうに爽やかな聲が、鳴り響くのであつた。
オブローモフの生活も、矢張り高調してゐることを感ずると同時に、自分がこんな狀態を――一時間でもなく、二時間でもなく、もう何年となく味はつてゐるのだとさへ思つた。
彼等二人の外面は靜かだが、その內部には確かに火が燃えてゐて、二人共同じ戰慄に顫へてゐるに相違なかつた。彼等の眼には、同じ心持で呼び出された涙が溢れてゐた。さう云ふものは皆な情熱の徵候であつた。其の情熱は、何時か露骨にオリガの若々しい心の中に燃え出すに相違ないが、今はまだ一時的に飛び翔ける暗示や、眠つた生活力の覺醒に服從してゐるのである。
オリガは響きのある長い餘韻を殘して歌を終つた。彼女の聲は其の餘韻の中に消えて了つた。オリガは急に歌を止めて兩手を膝に載せると、非常な感激と昂奮とを感じながら、オブローモフを見た。彼はどうしてゐたらう？
彼の顏には、精神の底から呼び醒されたやうな幸福の曙光が輝いてゐた。涙に滿たされた彼の眼は、オリガへ注がれてゐた。

此の刹那、オリガはオブローモフがしたやうに、知らず識らず彼の手を握つた。

「どうなすつて？」と、オリガは訊いた。「何と云ふお顔でせう！　何故そんな顔をなさるの？」

けれども、オリガはオブローモフが何故そんな顔附をしてゐるのかを知つてゐた。で、彼女は自分の力の此の現はれに感心しながら、靜かに得意になつた。

「鏡を御覽なさい。」と、オリガは鏡に映つてゐるオブローモフの顔を指差しながら、莞爾々々として續けた。

「眼は光つてるし、それにねえ、眼には涙が溜つてますわ！　あなた、本當に音樂には深く感動なさるのねえ！……」

「いや、私は……音樂に感じたのではありません……が……愛です！」と、オブローモフは靜かに言つた。

と、オリガは直ぐにオブローモフの手を放して顏色を變へた。オリガの視線は彼女に向けられてゐたオブローモフの視線とぴつたり出會した。オブローモフの視線は凝つと動かずに、殆んど無智を現はしてゐた。斯う云ふ眼附で見てゐる者は、オブローモフではなく情熟であつた。

オリガはオブローモフがついあんなことを口走つたのであることも、彼が自分を制へる力を失なつてゐることも、彼の言つた言葉が眞實であることも知つてゐた。

オブローモフは偶と我に歸ると、帽子を取つた。そして周圍を見廻しもせずに、室の中から駈け出した。オリガはもう物珍らしさうな眼附で彼を見送らなかつた。彼女は長い間、身動きもせず、立像のやうにピアノの傍に衝立つたまゝ、執拗く脚許を眺めてゐた。彼女の胸は苦しさうに上下してゐた……

六

オブローモフが氣懈さうな樣子で頽然と横はつてゐる時やどんよりと微睡んでゐる時や感激の火花を感じてゐる時に、先づ第一に彼の空想の中に計畫されるものは、妻としての女か、でなければ時によると戀人としての女であつた。

オブローモフが空想をしてゐる時に、彼の前に現はれる者は、背の高い恰好のいゝ女の姿であつた。其の女は、胸の上に悠たりと兩手を組み合はせ、靜かではあるが誇りやかな眼附をして、庭のブリューシチ（木の名）の間に姿態なく坐つてゐることもあれば、また頭を肩の上に愛らしく載せ、何事かを思ひ耽つてゐるやうな顏附をして、腰を搖ら〳〵と振りながら絨毯の上か或は並木路の砂の上を身輕に歩いてゐることもある――これがオブローモフの理想であり、歡樂と嚴肅な平和とに滿された全生涯の化身であり、また安靜そのものであつた。

オブローモフは最初此の女が長いヴェールを被り、全身花に包まれて教座の傍に立つてゐるのを夢み、次には妻として羞しさうに眼を伏せながら、寢床の枕頭に立つてゐるのを夢み、最後に母として大勢の子供の中に居るのを夢みるのであつた。

オブローモフは、此の女の脣に現れる無邪氣な微笑や希望に潤まない眼を夢みた。其の微笑は、夫としての彼に對して同情を表し、凡ての他人に對して親愛の情を現はしてゐた。其の眼附は、彼だけには從順で羞

かしさうな色を見せてゐるが、他人に對しては嚴然としてゐた。

オブローモフは此の中に戰慄を見たり、此の女から燃えるやうな空想や思ひもよらぬ涙や疲勞や病氣や、それからまた狂氣じみた突然の歡喜を聞いたりするのを望んだことがなかつた。彼には月も悲哀も要らなかつた。たゞ此の女が突然に眞蒼になつたり、卒倒したり、昂奮狀態に陷つたりしないで呉れゝばいゝと思つてゐた。

「斯うした女に戀人があるものだ。」と、オブローモフは言つた。「それに心配が絶えない。やれ醫者だとか、やれ水だとかつて、宛然種々な病癖の問屋だ。夜も碌に眠れやしない！」

けれども、羞恥を含んだ誇りやかな落着きのある妻の傍には、一人の男が暢氣に眠つてゐる。此の男は、眼を醒すと、例の優しい同情の籠つた眼附で見られるのだと確信して眠つてゐる。此の男の溫かい眼は、二十年若しくは三十年ぶりに、彼女の眼の中に靜かに瞬いてゐるあの優しい同情の光を見出したものらしい。彼は斯うした光を棺に入るまで受けるのである！

（さうだ、凡ての男と凡ての女との祕密な目的は――これではなからうか？――つまり、自分の友の中に、變ることのない平和の相と永久に平らかな感情の流とを見出すことではなからうか？　これが愛の常規で、此の常規から少しでも離れると、直ぐに裏切つたり、冷淡になつたりするのではあるまいか？　此處に我々の苦悶があるのではあるまいか？　自分の理想は一般の理想ではあるまいか？）と、其の男は考へた。（之が兩性の相互關係の完成と說明との王冠ではあるまいか？）

全世界の幸福の爲めに、情慾に正當な出口を與へ、それを河のやうに順序よく流すこと――これは全人類的な問題であり、進歩の絶頂である。凡てのジョールヂ・ザンド達は、皆な此の絶頂に登らうとして路を踏み迷つたのだ。此の問題が解決された曉には、もう裏切りも冷淡もなくなつて、たゞ平和で幸福な心臟が、永久に平らかに波打つだけで、永久に充實した生活と生活を永久に養ふ液汁と永久に健全な道德とが、此處から流れ出るのである。

斯うした幸福の實例はあるが、多くはない。人々は斯うした實例を指して幻影だと言つてゐる。人々は斯うした幸福の爲めに生れなければならないと言つてゐる。けれども、意識してこんな幸福に養はれ、こんな幸福に進んで行けないだらうか？

情慾！　成程、之を詩の中で見ると、立派なものである。俳優が袖なしの上衣を着け、小刀を持つて騷ぎ廻り、やがて殺された者も殺した者も一緒に晩飯を食ふやうな舞臺で之を見ると、立派なものである。情慾が斯う云ふ具合に終つて呉れると結構だが、情慾の後には、兎角煙と臭氣とが殘つて、幸福は殘らない。追憶になるものは、たゞ慚愧と頭髮を掻きむしることだけである。

最後に、若し情慾が斯うした不幸を齎すものならば――情慾のまゝに行動することは、通行の出來ない崩れた山路を無理に通過するのと同じことである。其の路を馬に乘つて通れば、馬は谷底に落ち、騎者は負傷する。懷しい村はもう眼前にある。僞處を見てはならない。危險な場所は速く通過しなければならない……だから、情慾は抑制し、壓迫し、結婚によつて消滅させる必要がある……

若し彼女が突然に燃えるやうな眼附で彼を見るか、それとも泣きながら眼を瞑つて彼の肩に突伏し、やがて眼を開けて、彼の頸を呼吸の窒る程両手で締めつければ、彼は吃驚して女の傍から逃げ出すに違ひない……これは花火である。火藥樽の爆發である。だから其の結果鼓膜が破れ、眼が潰れ、頭髪が燒ける！

けれども、オリガはどんな女であるか調べて見よう！

オブローモフか自分の心中を打ち開けた後、長いこと二人は祕密に會はなかつた。オブローモフは小學生のやうに隱れて、たゞオリガを遠くから見るだけであつた。オリガもオブローモフに對して態度を變へた。が、彼を避けたり、冷淡になつたりしたのではなくして、益々陰鬱になつたのである。

オリガはオブローモフに奇異な視線を放つて彼を困らせたり、彼の怠癖や惰け性や不活潑を惡意なく揶揄つて困らせたりするのを妨げるものが、自分の中に生じたことを悲しく思つたらしい。

オリガには可笑さが込み上げて來た。それは、子供の滑稽な樣子を見ると笑はずにはゐられない母親の可笑さであつた。シトーリツは外國へ出發した。オリガは歌を聞かせる相手がないので退屈になつた。彼女のピアノは蓋をされた――一口に言へば、彼等二人には吸引力と柳とが横たはつたのである。で、二人共懊惱を感じたのであつた。

それにしても、何と云ふ面白い徑路だらう！　彼等の親交は實に單純であつた！　彼等の交際は實に自由であつた！　オブローモフはシトーリツより平凡な男であり、シトーリツのやうにオリガを笑はせないけれども、いや自分で笑はせたけれども、シトーリツより善良な性質を有つてゐた。で、彼はオリガの嘲笑を易易と赦して遣つた。

シトーリツは外國へ出かける時、オリガにオブローモフを賴んで、彼を監督し、彼が家に坐つてゐるのを妨げるようにと願つた。オリガの怜悧な優しい頭には、もう食後にオブローモフを寢せないやうにする、いや、寢せないばかりではなく、壹の間長椅子の上に横たはることさへ許さないやうにする精密な計畫が組み立てられた。それは、オブローモフに話をしかけることであつた。

オリガは、シトーリツが置いて行つた（書物をオブローモフに讀ませたり）、それから毎日新聞を讀ませたり、ニュースの話をさせたり、村へ手紙を書かせたり、領地整理の計畫を書き終らせたり、外國へ行く支度をさせたりしようと空想してゐた――一言で云へば、オブローモフが自分の傍で睡らないやうにしようと空想してゐた。彼女はオブローモフに目的を示し、彼が幻滅を感じてゐる凡ての物に再び愛を感じさせて、シトーリツが歸つて來るまでに全然別な人間にして置かうと空想してゐた。

しかも、今迄誰にも自分の意見を發表したこともなければ、まだ生活らしい生活をしたこともない癆病で無口なオリガは、此の奇蹟のやうな事を實行してゐた！　オリガは――あの轉機の原因であつたのだ！

既に轉機は始まつてゐた。オリガが歌を唱つた瞬間から、オブローモフは以前の彼ではなかつた……

オブローモフは生活し、活動し、生活とオリガとを祝福するであらう。人間を甦へらせること――醫者が絕望の病人を助けたならば、其の醫者は何と云ふ名譽なことであらう！　が、精神的に亡びてゐる智慧と心とを助けることは？……

オブローモフ

オリガは嬉しい誇りの爲めに身慄ひさへ感じた。彼女はオブローモフを指導する事を、天から命じられた日課であると思ひ、オブローモフを內心自分の書記兼圖書係だと思つてゐた。

ところが、さう云ふことが皆な終りを告げなければならない時が突然に來た！　オリガはオブローモフに對してどう云ふ態度を取つてよいか分らなかつた。で、オブローモフに會ふと默つてゐた。

オブローモフはオリガを驚かしたり、辱しめたりしたことを悔いて、たゞ電光のやうな視線と冷靜な嚴命とを待つてゐた。が、そのくせオリガを遠くからでも見やうものなら、身慄ひして脇の方へ逃げて了ふのであつた。

そのうちに、オブローモフはもう別莊の方へ移つた。彼は三日の間、一人で小丘を歩いたり、沼の向うの林へ行つたり、村へ行つたり、百姓家の門の傍に腰掛けて、子供達や山羊の仔が駈け廻るのや、家鴨が池で身體を洗つてゐるのを面白さうに見たりしてゐた。

別莊の傍には、湖水もあれば大きな公園もあつた。が、オブローモフはたゞオリガに會ふのが怖いばかりに其處へは行かなかつた。

（俺を引き摺り出して、叩きつけたのだ！）と、オブローモフは考へた。が、實際に自分が眞理に衝突つたのだらうかとか、たゞ神經に音樂の一時的影響を受けたに過ぎないのだらうかなどゝ自問したことさへなかつた。

氣まづさや羞しさや或はオブローモフが始終しでかす彼の所謂る（恥辱）が、オブローモフに此の情熱の發作が何であるかを解剖させたかつたのである。つまり、彼に取つてオリガは何者であるかと云ふことを批判させなかつたのである。彼はもう餘計なものが、即ち以前になかつた或る土塊が、自分の心に粘着いてゐることを解剖しなかつた。彼の凡ての感じは、一つの塊、即ち恥辱と云ふものに塊まつてゐたのである。

オブローモフの想像の中にオリガがチラリとでも現はれると、其處には例の化身した平和と生活の幸福との理想も現はれるのであつた。其の理想は、オリガの姿とすつかり同じで、此の二つの姿は、お互に寄り添うて、遂に一つの姿に融け合つて了ふのであつた。

「あゝ、俺は飛んだ事をしでかしたものだ！」と、オブローモフは言つた。「何と彼も滅茶々々にしてしまつた！　幸ひ、シトーリツが外國へ行つてゐるので良かつた。オリガが彼に言ふ心配はない。が、若し言ひでもしようものなら、地の中に潜り込まなけりやならない！　愛、涙――こんなものが俺の顏に似合ふだらうか？　オリガの叔母も俺を呼びによこさなくなつた。多分、オリガが言つたんだらう……あゝ！……」

オブローモフは公園の中や其の側の並木路を先へ先へと進みながら斯う考へた。

オリガは、たゞどんな態度でオブローモフと會つたら良いだらうとか、此の事件はどうなるだらうか、何事も無かつたやうに默つてゐた方が良いだらうか、それともオブローモフに何か言はなければならないだらうかなどと心配してゐた。

言ふとすれば、どう言つたものだらう？　冷淡な樣子をして、傲然とオブローモフを見たものか、それとも一層のこと少しも見ずに、傲慢に素氣なく（私はあなたがあんな事をなさらうとは思ひませんでした。あ

なたは私を何だと思つてゐらつしやるのです？　どうしてあんな無禮な事をなすつたのです？……）と言つたものだらうか。ソーニチカは波蘭踊を踊つてゐる時、一人の士官に斯う答へた。が、其實彼女は一生懸命に士官の頭を撹亂しようと焦つてゐたのだ。

（それに、どうしてあれが無禮なのだらう？）と、オリガは自問した。（でも、あの方が本當に感じたのなら、どうして言はずにゐられやう？……けれど、あんまり突然だわ。まだ辛つと知己になつたばかりなのに……他の人なら二度や三度女を見ただけであんな事を言やしないし、また、誰だつてあんなに速く愛を感じやしないわ。あんな事はたゞオブローモフさんだけに出來る事なのだわ……）

けれども、オリガは愛がどうかすると不意に起るものだと云ふことを聞いたり、讀んだりしたことを想ひ出した。

（それに、あの方には情熱と衝動とがあつたわ。今、恥ぢてゐるから、あの方の眼にそんなものが見えないけれど。だから、あれは無禮ぢやない。ぢや、誰の罪かしら？）と、オリガは更に考へた。（無論、アンドレイ・イワヌイチよ。あの方が私に歌を唄はせたんだもの。）

けれども、オブローモフは最初聞くことを望まなかつたのだ――オリガは悲しかつた……で努力した……彼女は顏を眞赤にした――そして有りつたけの力でオブローモフを感動させようとした。

シトーリツは、オブローモフを無感覺な男だとか、何物もオブローモフを捉へることは出來ないとか、何でも皆な彼の中にあるものは消えてしまふなどゝ言つた……で、オリガは何でも皆な消えて了ふかどうかを見ようと思つて熱心に歌つたのである……それまでにない程熱心に唄つたのである……

（あゝ！　さうよ、私が惡かつたのよ。私、あの方に謝罪るわ……だが、何を謝罪らう？）彼女はやがて斯う自問した。（何と言つたら良いかしら。オブローモフさん、私が惡う御座いました。私があなたを誘惑したのです……何だか恥かしいわ！　そんな事ありやしないわ！）と、オリガは昂奮して、片足をトン〳〵と踏み鳴らしながら言つた。（誰だつてこんな考へを起しやしないわ！　……私はどんな結果になるかと云ふことを知つてゐたのでもあるまいし。けれど、若しこんな事が無かつたら、若しもあの方があんな事を口走らなかつたら……其の時はどうなつたらう？）と、彼女は自問した。（分らないわ……）と考へた。

其の日からオリガの心臟は、どう云ふ譯か異樣に波立つて來た。何となく悔恨に堪へられなかつた……それに熱が出て、兩頬には薔薇色の二つの斑點が現はれた。

「昂奮です……一寸した發熱です。」と、醫者は言つた。

（あのオブローモフさんの所氣よ！　あゝ、今後こんな事がないやうに、彼の方に敎へて上げなけりやならない！　ma tante（叔母さん）にはあの方を家から斷るやうに願つて置かう。あの方はぼんやりしてちやいけないのだから……本當にあの方は大膽だわ！）と、オリガは公園を歩きながら考へた。と、俄かに彼女の眼は燃え出した……

急に誰か來たのだ。オリガは足音を聞いた。

（誰か來たな……）と、オブローモフも思つた。

彼等はピッタリ出會した。
「オリガ・セルゲーヴナさんですか！」と、オブローモフは白楊の葉のやうに慄へながら言つた。
「イリヤ・イリイーチさんなの！」と、オリガは悸々しながら答へた。二人は立ち停つた。
「お變りはありませんか？」と、オブローモフは言つた。
「お變りなくつて？」と、オリガも言つた。
「何處へいらつしやるのです？」と、オブローモフは訊いた。
「別段、何處へも……」と、オリガは眼を伏せたまゝ言つた。
「お邪魔をしたんぢやありませんか？」と、オブローモフは訊いた。
「いゝえ、些とも……」と、オリガは不思議さうにチラリと彼を眺めて答へた。
「ぢや、あなたのお伴をしてもいゝでせうか？」と、オブローモフはオリガに燃えるやうな視線を投げて突然に訊いた。
二人は默つて小徑を歩いた。オブローモフの心臟は、教師の定規で叩かれた時にも、校長の怖ろしい眼で睨まれた時にも、また今迄の生活のどんな場合にも、此の時ほど激しく鼓動したことはなかつた。彼は何事か言ひたいので、頻りに努力して見たが、言葉は舌から出なかつた。たゞ心臟だけが、不幸に衝突つた時のやうに、異樣に鼓動してゐた。
「あなたの許へアンドレイ・イワヌイッから手紙が來なくつて？」と、オリガは訊いた。

「來ました。」と、オブローモフは答へた。
「何と書いてあつて？」
「巴里へ來いつて。」
「どうなさいます？」
「行きます。」
「何時？」
「直ぐ……いえ、明日……支度が出來次第。」
「何故そんなにお急ぎなの？」と、オリガは訊いた。
オブローモフは默つてゐた。
「別莊はあなたのお氣に入らなくつて？　それとも……ねえ、何故あなたは外國へいらつしやりたいの？」
（ひどい人だわ！　今度は外國へ行かうなんて！）と、彼女は思つた。
「私はどう云ふ譯か苦痛で、焦々して、何かに燒かれてゐるやうですから。」と、オブローモフはオリガを見ずに囁やいた。
オリガは默つたまゝライラックの小枝を折り、それで顏と鼻とを蔽ひながら、其の匂ひを嗅いでゐた。
「嗅いで御覽なさい、本當に良い匂ひですわ！」と、オリガは言つて、其の小枝でオブローモフの鼻を蔽うた。

「あゝ此處に鈴蘭があります！　一寸お待ちなさい。採つてあげますから。」と、オブローモフは草の上に屈みながら言つた。「この方が餘程良い匂ひです。野の香と森の香とがします。自然よりもつといゝ匂ひです。が、ライラックは大抵家の傍に生えてゐて、枝が斯う云ふ具合に窓の方に伸ひ寄つてゐるだけで、厭な匂ひです。こら鈴蘭の露はまだ乾いてゐませんね。」

オブローモフはオリガに幾本かの鈴蘭を與へた。

「ぢや、あなた、レゼーダ（名）はお好き？」と、オリガは訊いた。

「いゝえ、餘り香が強すぎますから私はレゼーダも薔薇も好きではありません。それに、一體私は花を好かないのです。野原でさへさうですから……室になんか幾ら持つて來ても……芥になるだけです……」

「ぢや、あなたは室の中を清潔にして置くのをお好き？」と、オリガは捜るやうにオブローモフを見ながら訊いた。「埃は嫌ひでせう！」

「嫌ひです。が、私の所の召使と云つたら……」と、オブローモフは咳やいた。（あゝ、性の惡い女だ！）と、彼は獨語のやうに附け加へた。

「あなたは巴里へ直行なさる？」と、オリガは訊いた。

「さうです。シトーリツが待ち兼ねてゐますからねえ。」

「ぢや、シトーリツさんに手紙を持つて行つて下さいましね。私、書きますから。」と、オリガは言つた。

「ぢや、今日下さい。私は明日街へ行きますから。」

「明日？」と、オリガは訊いた。「何故そんなにお急ぎなの？　誰かがあなたを追ひ立ててゞもゐるやうですわねえ。」

「追ひ立てられてるのです……」

「誰に？」

「羞恥心に……」と、オブローモフは囁やいた。

「羞恥心に！」と、オリガは機械的に繰り返した。（さア、今オブローモフさん、實に意外でしたわ……と言はう。）

「ですがねえ、オリガ・セルゲーヴナさん」と、オブローモフは自分を勵まして言つた。「私は、あなたが吃驚してゐらつしやるだらうと……怒つてゐらつしやるだらうと……思つてゐるんです。」

（さア、今だわ……今が言ふ時だわ）オリガの心臓はひどく鼓動し出した。（けれど、あゝ、言へない！）

オブローモフはオリガの顔を見て、彼女がどう出るかを知らうとした。が、彼女は鈴蘭とライラックとの匂ひを嗅いでゐた。そして何と言つて良いのかどうすれば良いのかと思ひ惑つてゐた。

（あゝ、ソーニチカならこんな時には何か考へ出すのだが、私は本當に馬鹿だわ！　何にも言へないわ……困つた事になつた！）と、オリガは考へた。

「私、すつかり忘れてたの！……」と、オリガは言つた。

「私の言ふ事を信じて下さい。全く何の氣もなしにあんな事を言つたのです……私は自分を抑へることが出

來なかつたのです……」と、オブローモフは幾らか大膽に言ひ始めた。「若しあの時、雷が鳴つても、私の上に石が落ちて來ても、私はあれだけは言つたに違ひありません。どんな力でもあれを抑へることは出來なかつたのです……どうか、私があんな事を故意と言つたのだと思はないで下さい。……私はあれを言つて直ぐ自分の不注意な言葉を取り消したいと、どの位心配したか知れません……」

オリガは頭を垂れ、花を嗅ぎながら歩いてゐた。

「あれはどうか忘れて下さい。」と、オブローモフは續けた。「あれは間違ひなのですから、是非忘れて下さい……」

「間違ひですつて？」と、オリガは急に繰り返して顏を上げた。そして花を落した。

彼女の眼は突然に大きく開かれて、驚愕の色に輝いた……

「何故間違ひなの？」と、オリガはまたも繰り返した。

「まあ、どうか腹を立てずに忘れて下さい。私は眞つ正直に言ひますが、あれは、たゞ一時の衝動に過ぎないのです……音樂による。」

「たゞ音樂による！……」

彼女の顏色はさつと變つた。二つの薔薇色の斑點は消えた。その眼は曇つた。

（もうこれつきりだわ！　あの人は不注意な言葉を取り消したから腹を立てることもない！……もうこれで良い……もう落着いたわ……以前の通りに話をしたり、冗談を言つたりすることが出來るわ……）とオリガは考へながら傍の樹の枝をぐいと引き千切り、その枝の一枚の葉を屑で引き離し、それから直ぐに枝も葉も路の上に投げ捨てた。

「あなたは怒つてゐらつしやるのではありませんか？　忘れて下すつたのですか？」と、オブローモフはオリガの方へ屈みながら言つた。

「何をですか？　あなた、何をお訊きなの？」と、オリガは昂奮して、殆んど泣き出したいやうな心持になつて答へた。そして彼の傍を離れた。「私、何もかも忘れて了つたわ……ひどく忘れつぽいんですから！」

オリガは口を噤んだが、どうして良いか分らなかつた。オブローモフにはたゞオリガが突然悲しさうな顏をしたのは分つたが、其の原因は分らなかつた。

（あゝ！）と、オリガは考へた。（もうすつかり片附いたんだわ。どうかこんな芝居はもう無ければいゝが！　どうしたのでせう……あゝ、あゝ！　私、一體どうしたのかしら？　あゝ、ソーニチカ、ソーニチカ！　お前は幸福な女ねえ！）

「私、家へ歸りますわ。」と、オリガは突然に言つて、歩調を速めながら他の並木路の方へ曲つた。

オリガの聲は涙に曇つてゐた。が、彼女は泣くのを恐れてゐた。

「其　より此方の方が近路ですよ。」と、オブローモフは言つた。（馬鹿だ）と、彼は悲しさうに自分に言つた。（打ち開けて了へばよかつたのに！　反つて侮辱して了つた。あんな事を言はないでもよかつたのだ。あんな事は時が經つに從つてひとりでに忘れられて了ふものだ。もう斯うなりや取り返しはつかない。謝罪ら

なけりやならない。）

（私が悲しくなつたのは、屹度）と、彼女は考へた。（オブローモフさん、あなたがあんな事をなさらうとは、實に意外でした……と言へなかつたからだわ。先を越されたからだわ……「間違ひです！」つて。彼の人はまだ僞つてる！　あの人は何と云ふ大膽な方だらう！）

「あなたは本當に忘れて下さつたのですか？」と、オブローモフは靜かに訊いた。

「忘れましたわ。すつかり忘れましたわ！」と、オリガは速口に言つて、家の方へ急いで行かうとした。

「では、あなたが怒つてゐらつしやらない標に手を貸して下さい。」

オリガはオブローモフを見ずに彼に指先を差し出した。オブローモフは其の指先に一寸觸るや否や、直ぐに自分の手を引つ込めた。

「ぢや、あなたは怒つてゐらつしやるのですね！」と、オブローモフは溜息を吐きながら言つた。「どうすれば私は、あれが一生忘れることの出來ない衝動であつたと云ふことをあなたに確信して戴けるでせうねえ？……無論、今後は決してあなたの歌を聞きませんが……」

「そんなことを私、信じやしません。私にはあなたの證明は要りません……」と、オリガに元氣よく言つた。

「私ももう歌ひませんわ！」

「ぢや、私はもう言ひません。」と、オブローモフは言つた。「が、どうかこんな別れ方をしないで下さい。でないと、私の心に何だか石のやうなものが殘りますから……」

オリガは靜かに歩きながら注意深くオブローモフの言葉を聞き始めた。

「若し私があなたの歌を聞いて、あゝ、と溜息を吐かなければ、あなたは泣くに違ひないとおつしやつたことが本當なら、若しあなたが今斯うして蕊爾ともせず、親しく手も出さずに歸つてお了ひになれば、私は……オリガ・セルゲーヴナさん、どうか同情して下さい！　私は病氣になります。私の膝は慄へてゐます。私は辛つと立つてゐるのです……」

「何故なの？」と、オリガはオブローモフをチラリと見て唐突に訊いた。

「自分でも分らないんです。」と、オブローモフは言つた。「もう私の羞恥心は失くなつて了ひましたから、私は自分の言葉を恥かしいと思ひません……が、多分自分の言葉の中には……」

また彼の心臟の中を蟻のやうな物が逼ひ出した。まだ何か餘計なものが心臟の中に現はれた。またオリガの愛嬌のある好奇心を帶びた眼附が彼を燒き始めた。オリガも矢張り婀娜やかに彼の方へ向いて、不安らしく彼の答を待つてゐた。

「あなたの言葉の中に何があつて？」と、オリガは堪り兼ねて訊いた。

「それを言ふのが怖いのです。あなたが再た御立腹なさるから。」

「言つて下さい！」と、オリガは命令するやうに言つた。

オブローモフは默つてゐた。

「さア、何なの？」

「私はあなたを見てゐると、再た泣きたくなります……この通り、私には自尊心がないのです。私は自分の感情を恥ぢないのです……」

「何故泣きたいんです？」と、オリガは訊くと、その兩頬には二つの薔薇色の斑點が現はれた。

「私には何時もあなたの聲が聞えてゐます……私は再た感じてゐるのです……」

「何を？」と、オリガは言つた。涙が胸先に込み上げて來た。彼女ははら〳〵しながらオブローモフの答を待つてゐた。

二人は玄關へ近づいた。

「私が感じてゐるのは……」と、オブローモフは急いで言ひ了らうとしたが、再た止めた。

オリガは徐々と大儀らしく階段を上つた。

「あの歌をです……あの……衝動をです……あの……感……赦して下さい、どうか赦して下さい——私は自分を支配することが出來ないのです……」

「オブローモフさん……」と、オリガは最初嚴として言つたが、直ぐに彼女の顏は微笑の光に輝いた。

「私、怒りませんわ、赦して上げてよ。」と、彼女は優しく附け足した。「たゞ此の先……」

オリガは振り返つてオブローモフに手を差し伸べた。オブローモフは其の手を握つて、掌に接吻した。オリガは輕く彼の脣を握つて、忽ち飛ぶやうに硝子扉の中へ駈け込んだ。が、オブローモフは植ゑ込まれでもしたやうに凝と其處に佇ッ立つてゐた。

七

オブローモフは長い間眼を見開き、口を開けてオリガの後を眺め、長い間灌木のあたりを見廻してゐた……他の人達が通り過ぎた。小鳥も飛んで行つた。一人の百姓の婆さんは、其處を通りすがりに、オブローモフに草の實は要らないかと訊ねた——が、彼は矢張り茫然自失してゐた。

オブローモフは再た以前の並木路を徐々と歩き出した。そして其の半ばまで靜かに來ると、オリガが落した鈴蘭と彼女が手折つて悲しさうに投げ捨てたライラックの枝とを見附けた。

（彼の女は何故これを？……）と、オブローモフは想像し出した……

「俺は馬鹿だ、馬鹿だ！」と、オブローモフは鈴蘭とライラックの枝を拾ひながら突然に聲を出し、殆んど走るやうに並木路を歩き出した。「俺は赦罪を願つた，けれども彼の女は……あゝ、そんなことはあるまい……そんなことを考へちや不可い！」

オブローモフは幸福を感じ、乳母の言葉で言ふと、宛然（額に月でも出た）やうな輝かしい顏附をして家へ歸り、長椅子の片隅に腰を下すと、卓子の上の埃に大きな文字で手速く（オリガ）と書いた。

「あゝ、大した埃だ！」と、オブローモフは偶と我に歸つて言つた。「ザハール！　ザハール！」と、彼は長い間叫んだ。と云ふのは、ザハールは小路の方へ向いてゐる門の傍に、馭者と一緒に腰掛けてゐたからである。

「行かねえだか、お前さん！」と、アニシヤはザハールの袖を引つ張りながら、囁すやうに囁いた。「旦那様が先刻からお前を呼ばつて御座るだよ。」

「ザハール、これを見ろ、どうしたんだ？」と、オブローモフは優しく親し味をもつて言つた。彼は此の場合腹を立てるやうな気分になれなかつたのである。「お前は此處を、埃や蜘蛛の巣でこんなに亂雜にして置きたいのだらう。だが、それは御免だ、俺は許さないぞ！　こんなにして置くからオリガ・セルゲーヴナは俺のとこへ來て臭れないんだ、そして（あなたは埃がお好きなんですねえ。）などゝ言ふのだ。」

「そりやア、言ふなア驚手だ。あの人達とこには、五人も召使が居るだから。」と、ザハールは言つて、扉口の方へ向いた。

「何處へ行くんだ？　片附けて掃き出して臭れ。腰掛けることも肱を突くことも出來やしない。……あまり不潔ぢやないか。これぢや……オブローモフ主義だ！」

ザハールはフッと埃を吹き飛ばして、ヂロリと横目で主人を見た。

（あれだ！）と、ザハールは思つた。（また何だか厭な言葉を考へ出した！　が、聞いたこともあるやうだ！）

「さア、掃き出して臭れ、どうして衝ッ立つてるんだ？」と、オブローモフは言つた。

「何を掃くだ？　今日掃いたぞよ！」と、ザハールは頑固に答へた。

「掃いたのなら何處から埃が入つたんだ？　こら、こら、この通りだ！　すつかり綺麗になるやうに今直ぐに掃け！」

「掃いたぞよ。」と、ザハールは言つた。「そんなに幾度も掃いてゐられねえだ！　埃は街路から飛び込むだから……此處は野原の別莊だから街道は埃だらけだよ。」

「でもね、お前さん、ザハール・トロフィムイチさん。」と、アニシヤが別な室から覗いて、突然に言ひ始めた。「初めに床を掃いて、それから卓子を掃くからいけないんだよ。埃は再た卓子に上つて了ふだ……お前さん、前に……」

「何だつて手前、そんな處まで出しやばつて指圖をするだ？」と、ザハールは憎々しさうに嗄れ聲を出した。「自分の處へ行かねえか！」

「床を前に掃いて、それから卓子を片附ける者が、何處にあるだらう？……だから旦那様が怒りなさるだよ……」

「いゝよ、いゝよ、いゝよ」と、ザハールはアニシヤの胸を衝くやうに肱を振りながら叫んだ。

アニシヤはにや〳〵と笑つて姿を隱した。オブローモフは、ザハールに彼方へ行けと言ふやうに手を振つた。彼は刺繍をした枕に頭を横たへ、心臓の上に片手を載せて、心臓の鼓動を聞き始めた。

（これは良くないやうだ）と、彼は獨語つた。（どうしたら良いだらう？　醫者に相談をすれば、先生、直ぐにアビシニヤへ行けと言ふ！）

ザハールとアニシヤとがまだ結婚をしない時分には、二人共各自に自分の受持を有つてゐて、一方の受持に手を出すやうなことをしなかつた。で、アニシヤは市場通ひと料理の方ばかりをして、たゞ年に一度床を

洗ふ時だけ室の取り片附けを手傳ふのであつた。

が、結婚後アニシヤは主人の室へ以前より自由に出入りするこが出來るやうになつたので、ザハールに手傳つて室の中も次第に綺麗にし、殊に亭主の仕事を自分に幾らか引き受けるやうにさへした。それは一つは自由に引受けたのだらうが、一つは確かにザハールから强制的に押し着けられたものに相違ない。

「おい、絨毯を叩いて」と、ザハールは命令的に嗄れ聲を出した。或は「お前、あの隅に積んである物を彼方へ片附けて餘計な物があつたら料理部屋へ持ち込んで呉れ。」と、ザハールは言つた。

斯う云ふ譯で、ザハールは非常に氣樂になつてゐた。室の中は綺麗になるし、主人は怒鳴らないし、(厭な言葉)も聞かない。ザハールは何もする事がなかつた。が、この氣樂も過ぎ去つた——其の理由と云ふのは斯うである。

ザハールとアニシヤとが一緒に主人の家事を切り廻すやうになると、ザハールは何をしてもとんちんかんな事ばかりし出かすのであつた。ザハールのする事爲す事皆な碌なことはなかつた。彼は五十五年の間此の明るい世間で何をしても、それ以外に、またそれ以上にどうすることも出來ないと云ふ確信を有つて歩んで來たのである。

ところが、こんど二週間のうちにアニシヤはザハールのすることが皆とんちんかんであると云ふ事を彼に證明した。のみならず、アニシヤはそれを證明するのに、子供か或は本當の馬鹿でも相手にするやうに、靜かに親切に辱かしめるやうな遣り方をして、その上ザハールを眺めながら嘲笑つた。

「お前さん、ザハール・トロフィムイチさん。」と、アニシヤは愛嬌よく言つた。「前に煙突を閉めて、それから通風口を開けるから、再た室の中が冷えて了ふのだよ。」

「ぢや、お前ならどうするだ?」と、亭主は愚かしさうに訊いた。「何時開けるだ?」

「煖爐を焚きつけてからさ。空氣が入つて來ても、再た直ぐに溫まるぢやありませんか。」と、アニシヤは靜かに答へた。

「何てえ馬鹿だ!」と、ザハールは言つた。「俺は二十年の間斯うやつて來ただ。が、お前の爲めに此の遣り方を變へてやらア……」

ザハールの戸棚には、お茶や砂糖やレモンや銀の皿や靴墨や刷毛や石鹼が一緒に載つてゐた。

或る時、ザハールは其處へ來て見ると、石鹼は洗濯臺の上に、刷毛と靴墨とは料理部屋の窓の上に、お茶と砂糖とは簞笥の特別な抽斗の中にあつた。

「お前、俺の物を勝手に撒き散らしたな、え?」と、ザハールは恐ろしい權幕で訊いた。「俺は、直ぐ取れるやうに、故意と一處に置いただ。どうしてお前は彼方此處に散らかして了つただ?」

「お茶が石鹼臭くならないやうにしたんだよ。」と、アニシヤは溫柔しく言つた。

一度など、アニシヤは主人の衣服に蠹魚の穴が二つ三つ出來てゐるのをザハールに見せて、一週間に一度は屹度衣服を拂つたり、乾かしたりしなけりやいけないと言つた。

「どれ、私が箒で叩いて見ませう。」と、アニシヤは愛嬌よく言葉を結んだ。

所が、ザハールはアニシヤから帯と彼女が持つてゐた燕尾服を引つたくつて、以前の場所へ置いた。

或時など、ザハールは例によつて、主人が詰らない油蟲くらゐで自分を怒鳴りつけたとか、(俺が油蟲を考へ出したんぢやねえ。)などゝ、ぶつ〳〵言ひながら主人の悪口を吐き始めた時、アニシヤは何時から轉がつてゐるのか分らないやうな黒パンの碎片を默つて棚の上から拾ひ集め、戸棚や器物などを掃いたり、拭いたりしたが、其の時以來油蟲はすつかりゐなくなつた。

ザハールはそれでもまだアニシヤの成功を理解することが出來ずに、たゞ彼女の熱心の爲めであると思つてゐた。けれども、或時、ザハールが茶碗や洋盃を載せた盆を運んでゐる時に、二つの洋盃を壞し、何時もの通り、悪口を吐きながら盆も一緒に床の上へ投り出さうとしたことがあつた。その時、アニシヤはザハールの手から盆を取り、他の洋盃を載せ、尙ほ砂糖壺やパンまでも載せて、茶碗一つさへ動かない程澤山に載せ、それから片手で盆を持ち、其の盆を左右に搖りながら、二度までも室の中を歩き廻つたが、盆の上の物は匙一つ動かなかつた。ザハールは之を見ると、突然にアニシヤが自分より悧巧なことをはつきりと知つた。

ザハールはアニシヤから盆を引つたくり、洋盃を振り落したが、其時から酷くアニシヤを憎んでゐた。

「それ御覽なさい、斯うするんですよ!」と、アニシヤは更に靜かに附け足した。

ザハールはどんよりした眼附で、傲然とアニシヤを見た。が、アニシヤは笑つてゐた。

「おい、婆さん、お前は馬鹿な女だ。お前は自分の悧口を見ようとするだ! だが、俺のオブローモフカ村の家はこねえな家だと思つてるだか? でも、皆な俺一人で切り廻して來たゞ。大勢の從僕や子供たちを合せて十五人の家族を養つて來たゞ! だが兄弟、いや、婆さん、お前はそれを知らねえだ……お前はこねえな處で……おい、お前はね!……」

「私だつて良い人へ嫁きたいんだがね。」と、アニシヤは言ひ始めた。

「いゝよ、いゝよ、いゝよ!」と、ザハールは嘯すやうに肱で胸を衝きながら嗄れ聲で言つた。「お前は此處から、旦那の室から料理部屋へ行つてな……婆アらしい仕事でもしてるがいゝだ!」

アニシヤは笑ひながら出て行つたが、ザハールは鬱いだ顏附をして、横目でチロリとアニシヤの後を見送つた。

ザハールは大いに自尊心を傷つけられたので、妻に對しては陰險な態度をとるやうになつた。が、オブローモフが、何かを捜させたり、其の捜し物が見附からなかつたり、見附かつても壞れてゐたりした時には、殊に、家の中が混雜になつてゐて、(厭な言葉)を伴ふ雷鳴が、ザハールの頭上に鳴り響きさうになつた時には、ザハールはアニシヤに眼くばせをしたり、頭で合圖をしたりして、彼女を主人の書齋へ呼びつけ、其處を親指で差しながら命令的に囁くのであつた。

「旦那の許へ行つて見ろよ。何の用事だか。」

アニシヤが入つて行くと、雷雨は何時も普通の注意くらゐで解決された。ザハール自身も、オブローモフの話の中に(厭な言葉)が出始めると、直ぐにアニシヤを呼んで貰ひたいと彼に言つた。

斯う云ふ具合だから、若しアニシヤがゐなければ、オブローモフの室の中には、始終怒鳴り聲が響いてゐ

たことだらう。アニシヤはもう自分をオブローモフ家の者と思つて、自分の亭主とオブローモフの生活や家や人格との間にある斷つことの出來ない連絡を無意識に分擔して、その女らしい眼と世話好きな手とを空虛な靜寂の中に元氣よく働らかせてゐた。

ザハールが何處かへ出かけて行くと、アニシヤは直ぐに卓子や長椅子の埃を拂ひ、通風口を開け、窓掛を直し、室の眞中に投げ出されてゐる靴や安樂椅子に掛けてゐるズボンをそれ〴〵の場所に持つて行き、衣服や机の上の紙や鉛筆や小刀(ナイフ)やペンを片附ける。種々な物を順序よくしたり、皺くちやになつた寢床を引き延したり、枕を直したりして、それを三つの範圍に片附けて了ふ。それから室中に眼を走らせて、椅子の位置を直したり、半ば開いてゐる簞笥の抽斗を閉めたり、卓子の卓布を退けたりする。そしてザハールの軋るやうな靴音を聞くと、急いで料理部屋に辷り込む。

アニシヤは生々した身輕い婆さんで、年齢は四十七であつた。彼女の微笑は忙しさうで、眼は活々と四方に走せてゐた。彼女の頸や腕も頑丈であつた。彼女の手は赤く粘々(ねば〳〵)してゐて、決して疲れることを知らなかつた。

彼女の顏は、殆んど無いと言つても良いくらゐであつた。たゞ鼻だけが目立つてゐた。無論、此の鼻も大きくはなかつたが、なんだか顏と別々になつてゐるやうで、如何にも顏との釣合が惡かつた。のみならず、鼻の下部が上の方へそれ反つてゐたので、顏はそれに隱れて目立たなかつた。第一、顏の大きさや色合が目立たなかつた。で、彼女の鼻に就いて誰でも直ぐに明白な觀念を有つことが出來るが、顏の方には何時まで經つても氣が附かない。

世間に、ザハールのやうな男は少なくない。どうかすると、外交家でさへ良い氣になつて細君の御說を拜聽しながら肩を窄め、こつそりと其の御說に從つて自分の意見を書く者がある。

どうかすると、或る行政官などは、口笛を吹き遺憾の苦笑を洩しながら、重要事件に關する細君の長口舌を聞き――翌日になると、この長口舌を仰々しく大臣に上申することがある。

斯うした紳士は、細君に慳貪に當るか或は柔和に當る。たとへ細君をザハールのやうに婆さんとして取扱はないまでも、眞面目な勤務生活を慰める小花くらゐに取扱ふ。

もう正午で、太陽は疾(とう)くから燦々(さん〳〵)と公園の小路を燒いてゐた。人々は皆な木蔭に天幕を張つて、其の下に腰掛けてゐた。たゞ子供や馬鹿者や子守達だけは、元氣よく歩いたり、眞晝の日光を浴びながら草の上に坐つたりしてゐた。

オブローモフは矢張り長椅子の上に横はつたまゝ、今朝オリガと交した話の意味を信じたり、否定したりしてゐた。

「彼の女は俺を愛してゐるんだ。彼の女は俺に對し、燃えるやうな感情を持つてゐるんだ。さうかしら？オリガは俺のことを空想してゐるんだ。俺の爲めにあんなに熱心に歌を唄つたんだ。そして其の音樂が吾々二人を共鳴で結びつけたんだ。」

オブローモフの中には、自尊心が頭を擡げ、生活と魅するやうな將來とたつた今迄無かつた色彩と光明と

が輝き始めた。彼はもうオリガと一緒に外國へ行き、スウキツルの湖畔を逍遙し、イタリヤで羅馬の古城を訪ね、ゴンドラに乘り、それから巴里や倫敦の群衆の中を歩き、それから……それから自分の故郷の樂園で――オブローモフカ村で生活することを考へた。

オリガは愛らしい囁き聲と美しく貧白い顏と細そりとして優しい頸とを有つた女神である……

百姓達はそれ迄こんな美しい女を見たことがない。彼等は此の天使の前に俯伏す。オリガは靜かに草の上を歩く。オブローモフと一緒に樺林の木蔭を歩く。オリガは彼に歌を唄つて聞かせる……

オブローモフは生活と生活の靜かな流と、生活の甘い流と波打とを感ずる……彼は希望の滿足と幸福の充實との爲めに無我の境に陷る……

と、突然に彼の顏は曇つた。

「いや、そんなことがある筈はない！」と、オブローモフは長椅子から起き上り室の中を歩きながら聲を發て〻言つた。「眠さうな眼附をし、血色の惡い頰を有つた可笑しい恰好の俺を愛するなんて……彼の女は俺を見ると何時も笑つてゐるぢやないか……」

オブローモフは鏡の前に立ち止つて、長い間自分の姿を見てゐた。最初彼は不安な顏附をしてゐたが、やがて眼を光らせて莞爾とした。

「俺は街に居つた時より美しく晴々してゐるやうだ。」と、オブローモフは言つた。「俺の眼は曇つてゐない……眼丹が出來たと思つてゐたら、もう癒つて了つた……此處の空氣で癒つたんだらう。それに無暗に歩くし、酒は一滴も飲まないし、寢轉びもしないから……もうエヂプトへ行く必要はありやしない。」

オリガの叔母なるマリヤ・ミハイロヴナから晩餐の使者が來た。

「行くよ、行くよ！」と、オブローモフは言つた。

使者は騙らうとした。

「おい、一寸待つて呉れ！　之を遣らう。」

オブローモフは使者に幾らかの金錢を與へた。

彼は愉快になつて、氣が浮々として來た。自然も矢張り晴々しかつた。人と云ふ人は皆な善良で、皆な樂しんでゐるやうであつた。誰の顏にも、幸福が漲つてゐた。たゞザハールだけは暗い顏をして、矢張り横目で主人を覗いてゐた。その代りアニシヤは正直な顏をして笑つてゐた。

（犬を飼はう）と、オブローモフは決心した。（それとも猫……猫の方が良い。猫は愛嬌があつて、鼻を鳴らす。）

オブローモフはオリガの許へ走つて行つた。

（けれど……オリガは俺を愛してゐるんだ！）と、彼は途々考へた。（若くつて晴々した女だ！　今彼の女の想像の前には、詩的生活が開かれてゐる。彼女は青年を夢見るはずだ。其の青年は黑い縮毛を有つてゐる。恰好の良いすらりとした體附で、其の中には考へ深い力が潛んでゐる。顏には勇氣と誇りやかな微笑とが現はれてゐる。眼には火花がある。其の火花は視線の中に溶け込み、慄へながら、輕く心臟まで擴がつて行く。此の